宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第14集

UCHIYASHIKI

内　屋　敷　遺　跡

県立小林高等学校生徒寮建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

１　９　９　９　年

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第14集

UCHIYASHIKI

内　屋　敷　遺　跡

県立小林高等学校生徒寮建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

１　９　９　９　年

宮崎県埋蔵文化財センター

序

埋蔵文化財の保護・活用に対しまして、日頃より深いご理解をいただき厚くお礼申し上げます。

このたび宮崎県教育委員会では、県立小林高等学校生徒寮建設に伴い、内屋敷遺跡の発掘調査を行いました。本書はその報告書です。

今回の調査では、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が検出されました。特に縄文時代の生活の痕跡が数多く確認され、当時の人々の暮らしを垣間見ることができたことは、調査の大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関をはじめ、ご指導・ご助言をいただいた先生方、ならびに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成１１年３月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長　田中　守

例　　言

1．本書は、県立小林高等学校生徒寮建設に伴い、宮崎県教育委員会が行った内屋敷遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

3．発掘調査は、２次に分けて実施し、それぞれ次の期間で行った。

　平成８年度（第１次調査）平成９年１月２９日～同３月１４日（担当：東憲章）

　平成９年度（第２次調査）平成９年４月１４日～同８月２１日（担当：甲斐貴充）

4．現地での実測・写真撮影等の記録は、主に東憲章・甲斐貴充・米久田真二が行った。

5．空中写真撮影は(株)スカイサーベイに、テフラ分析・プラントオパール分析は(株)古環境研究所に委託した。

6．整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・実測・トレース・写真撮影は、東と甲斐が整理補助員の協力を得て行った。

7．本書で使用した位置図は国土地理院発行の５万分の１図を基に作成し、調査範囲図は小林市都市計画図の２.５千分の１図を基に作成した。

8．土層断面及び土器の色調は『新版標準土色帖』に拠った。

9．本書で使用した方位は、第１・２・４・10・36図は座標北（座標第Ⅱ系）で、その他は磁北（磁針方位は西偏約5.5°）ある。レベルは海抜絶対高である。

10．本書使用した遺構略号は以下のとおりである。

　ＳＡ・・・竪穴住居跡　　ＳＢ・・・掘立柱建物跡　　ＳＩ・・・集石遺構

11．本書の執筆は、第Ⅰ章－１を石川悦雄が、その他は東と甲斐が分担し、編集は甲斐が行った。

12．出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
第Ⅱ章　調査の概要
　第１節　遺跡の位置と環境 …… 2
　第２節　調査の経過 …… 3
　第３節　基本層序 …… 5
第Ⅲ章　調査の記録
　第１節　縄文時代の遺構と遺物 …… 6
　第２節　弥生時代の遺構と遺物 …… 52
　第３節　その他の遺構と遺物 …… 57
第Ⅳ章　自然科学分析の結果
　第１節　内屋敷遺跡の土層とテフラ …… 60
　第２節　内屋敷遺跡における植物珪酸体分析 …… 64
第Ⅴ章　まとめ …… 70

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 2
第２図　内屋敷遺跡発掘調査範囲図 …… 4
第３図　内屋敷遺跡土層断面図 …… 5
第４図　縄文時代早期遺構分布図 …… 7～8
第５図　集石遺構（１） …… 9
第６図　集石遺構（２） …… 10
第７図　集石遺構（３）・配石遺構 …… 12
第８図　掘立柱建物跡（平地住居跡）（１） …… 14
第９図　掘立柱建物跡（平地住居跡）（２） …… 15
第10図　縄文時代早期遺物分布図 …… 17～18
第11図　縄文時代早期土器（１） …… 19
第12図　縄文時代早期土器（２） …… 20
第13図　縄文時代早期土器（３） …… 21
第14図　縄文時代早期土器（４） …… 22
第15図　縄文時代早期土器（５） …… 23
第16図　縄文時代早期土器（６） …… 24
第17図　縄文時代早期土器（７） …… 25
第18図　縄文時代早期土器（８） …… 26

第19図　縄文時代早期土器（９）…… 27
第20図　縄文時代早期土器（10）…… 28
第21図　縄文時代早期土器（11）…… 29
第22図　縄文時代早期土器（12）…… 30
第23図　縄文時代早期土器（13）…… 32
第24図　縄文時代早期土器（14）…… 33
第25図　縄文時代早期石器（１）…… 35
第26図　縄文時代早期石器（２）…… 36
第27図　縄文時代早期石器（３）…… 37
第28図　縄文時代早期石器（４）…… 38
第29図　縄文時代早期石器（５）…… 40
第30図　縄文時代早期石器（６）…… 42
第31図　縄文時代早期石器（７）…… 43
第32図　縄文時代早期石器（８）…… 44
第33図　縄文時代早期石器（９）…… 45
第34図　縄文時代早期石器（10）…… 46
第35図　縄文時代早期石器（11）…… 47
第36図　第Ⅲ層検出遺構分布図 ……49～50
第37図　縄文時代前期・後期　土器・石器 …… 51
第38図　１号竪穴住居跡 …… 52
第39図　１号竪穴住居跡出土土器・石器（１）…… 53
第40図　１号竪穴住居跡出土石器（２）…… 54
第41図　２号竪穴住居跡 …… 55
第42図　２号竪穴住居跡出土土器・石器・鉄器 …… 56
第43図　掘立柱建物跡（１）…… 57
第44図　掘立柱建物跡（２）…… 58
第45図　表土・包含層出土遺物 …… 59

表　目　次

第１表　出土土器観察表（１）…… 74
第２表　出土土器観察表（２）…… 75
第３表　出土土器観察表（３）…… 76
第４表　出土土器観察表（４）…… 77
第５表　出土土器観察表（５）…… 78
第６表　出土土器観察表（６）…… 79
第７表　出土土器観察表（７）…… 80
第８表　出土石器観察表（１）…… 81
第９表　出土石器観察表（２）…… 82
第10表　出土遺物観察表 …… 82

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

県教育委員会文化課が平成７年度に実施した平成８年度開発事業調査で、県教育委員会学校施設課から県立小林高等学校体育コース生徒寮整備事業の回答があった。

建設予定地（小林市大字真方字内屋敷）は「周知の埋蔵文化財包蔵地」ではなかったものの、分布調査を実施した結果青磁片等が採集されたので、試掘調査を実施することとした。平成８年７月12日に、県の開発部局担当者を召集し開催した「開発事業と埋蔵文化財発掘調査の調整会議」において正式にその旨を学校施設課に通告し、その後協議を重ね、平成８年12月13日に試掘調査を実施した。

試掘調査では、アカホヤ層下位で黒曜石のチップ、アカホヤ層上位で前期の曽畑式、剥片利用の縦長石匙等を検出し、青磁片を耕作土中から採集した。

この結果を受けて当該地を字名から「内屋敷遺跡」と命名し、県文化課と埋蔵文化財センターは学校施設課と事前調査の協議を行い、調査対象面積約3,600㎡のうち、進入路部分及び外溝部分の約400㎡を平成８年度に、建物本体部分等約3,200㎡を引き続き平成９年度に実施することにした。

第２節　調査の組織

内屋敷遺跡の調査組織は次の通りである。

調査主体　宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所　　長	藤本健一	
副　所　長	岩永哲夫	（平成９年度　調査第二係長兼務）
庶務係長	三石泰博	
調査第二係長	北郷泰道	（平成８年度）
主査（調整担当）	谷口武範	
主事（調査担当）	東　憲章	（平成８年度）
主事（調査担当）	甲斐貴充	（平成９年度）
調査員（嘱託）	米久田真二	（平成９年７月～８月）
試掘・事業調整担当	石川悦雄	（県教育委員会文化課）

第Ⅱ章　調査の概要

第１節　遺跡の位置と環境　（第１図）

内屋敷遺跡（第１図１）は、宮崎県小林市大字真方字内屋敷に所在する。小林市は、北の裏日向山地、東の諸県山地北西支脈、南の霧島火山、西の加久藤盆地に囲まれた小林盆地に位置する。

本遺跡は、小林盆地底部の石氷川と種子田川に挟まれた、標高約212mのシラス台地上に立地する。調査時点で台地は東部及び南西部が削平され、各々水田と住宅地となっていた。また、本遺跡の西側に隣接して、縄文・弥生時代の散布地である種子田遺跡群（第１図２）が周知の遺跡として存在する。

その他、本遺跡の周辺遺跡について時代別に概略を述べる。縄文時代の遺跡としては、本田遺跡（大字東方字坂下・第１図３）や平木場遺跡（大字南西方字平木場・第１図４）がある。本田遺跡では、押型文土器・前平式土器・塞ノ神式土器・曽畑式土器・石器類が出土している。平木場遺跡では、押型文土器・曽畑式土器が出土している。また、本田遺跡では、縄文時代前期の竪穴住居１基が確認されている。弥生時代の遺跡は調査例が少ないが、水落遺跡（大字細野字水落・脇ノ上・第１図５）があり、弥生時代後期の土器が出土するとともに、６基の竪穴住居が確認されている。

1　内屋敷遺跡　　2　種子田遺跡群　　3　本田遺跡
4　平木場遺跡　　5　水落遺跡

第１図　遺跡位置図

第２節　調査の経過

内屋敷遺跡の調査対象面積は3,600㎡である。建設工事の工程上、平成８年度に車両進入路となる調査区東側約15ｍと外周擁壁部分（幅約10ｍ）の調査を先行して行い（400㎡）、残りを平成９年度に行うこととなった。

平成８年度の調査では、重機により表土を除去し、黒色土（後述する第Ⅱ層）と褐色土（第Ⅲ層）を人力にて掘り下げた。遺構検出面はアカホヤ火山灰層（第Ⅳ層）上面である。Ⅱ・Ⅲ層からの遺物出土はほとんど見られなかった。精査の結果、調査区南東部でピット群を、外周南側で竪穴住居１基と溝状遺構２条を検出した。ピット群では４棟の掘立柱建物を確認した。

遺構完掘後、実測・写真撮影を行い調査第１面（第１文化層）を終了した。その後、再度重機を用いて第Ⅳ層の除去を行い、縄文時代早期（第２文化層）の調査に着手した。トレンチを設定し、土層の確認と並行しながら掘り下げを行った。その結果、集石遺構５基が検出され、多数の土器片・石器類が出土した。遺構実測と遺物の取り上げを行った後、トレンチによりさらに下層からの遺構・遺物の検出がないことを確認して調査を終了した。

平成９年度の調査は、前年度の外周擁壁建設工事の継続により、西側半分のみからの着手した。前年度の調査結果を受け、第１文化層検出のため、表土（第Ⅰ層）と黒色土（第Ⅱ層）の除去を重機によって行った。作業員による掘り下げを開始したところ、遺物が散見し始めた。精査の結果、竪穴住居１基と溝状遺構が３条を検出した。遺物は、古墳時代の土師器、弥生土器、縄文土器がほぼ同じレベルから出土した。

西側の第Ⅳ層上面の調査を終了した後、第２文化層検出のためにアカホヤ火山灰層（第Ⅳ層）の除去を重機により行った。作業員によって掘り下げを開始したところ、黒色土（第Ⅵ層）と黒褐色土（第Ⅶ層）中より、多量の石器、縄文土器が出土し、集石遺構３基と配石状遺構３基を検出した。

外周擁壁建設工事終了後、東側の第１文化層の調査を西側同様に行った。その結果、掘立柱建物１棟を含むピット群が確認された。第Ⅳ層上面の調査終了後、アカホヤ火山灰層の除去を行い、西側と併せてアカホヤ火山灰層下の第２文化層の調査を行った。西側同様多量の石器、縄文土器が出土し、集石遺構２基・多数のピット群が検出された。ピット群では平地住居11基が確認された。

現地での記録図面作成のため、両年度の調査を通じて国土座標（ＸＹ座標）に乗じた共通の１０ｍグリッドを設置した。

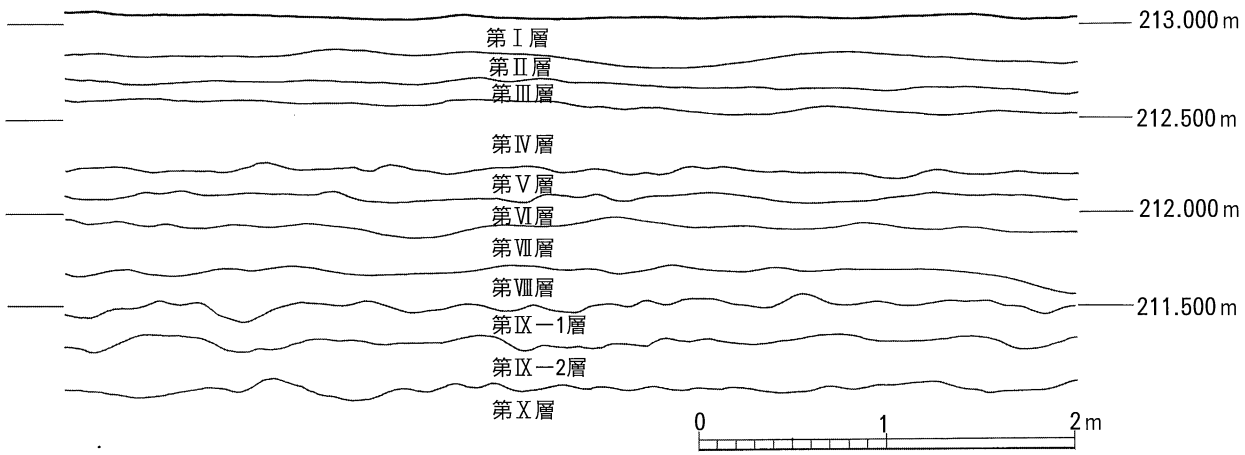
第２図　内屋敷遺跡発掘調査範囲図（１／2,500）

第３節　基本層序

内屋敷遺跡の基本層序を第３図に示した。第Ⅰ層（表土）は、最近まで茶園に利用され、30cm前後の厚みがある。第Ⅱ層は、やや軟質の黒色土で、部分的に茶園による攪乱を受けている。第Ⅲ層は、やや硬質でしまりのある褐色土層である。縄文時代前期から中世までの遺物包含層である。第Ⅳ層は、アカホヤ火山灰層（一次堆積）であり、下部に火山豆石を含む。第Ⅴ層は、非常に硬い暗灰色土層で、牛の脛ロームを含む。第Ⅵ層は、硬質な黒色土層で、白・黄色軽石粒を少量含む。第Ⅶ層は、硬質な黒褐色土層で、白・黄色の軽石粒を含む（特に白色軽石粒が多い）。第Ⅵ層・第Ⅶ層は縄文時代早期の遺物包含層である。第Ⅷ層は、やや硬質な黒褐色土層で、白・黄色軽石粒を含む。第Ⅸ層はやや硬質な褐色土層で、粘性をわずかにもち、少量の白色と多量の黄色軽石粒を含む。上部と下部の色調が違い、暗い上部をⅨ－１層に明るい下部をⅨ－２に分層した。

なお、内屋敷遺跡では、テフラ分析・プラントオパール分析を実施している。その結果については第Ⅳ章を参照されたい。

Ⅰ	第 Ⅰ 層･･･表土。耕作土。
Ⅱ	第 Ⅱ 層･･･黒色土(HUE 25Y 2／1)。やや軟。
Ⅲ	第 Ⅲ 層･･･褐色土(HUE 10YR 4／4～3／4)。やや硬い。一部暗褐色。（縄文時代前期～中世の遺物包含層）
Ⅳ	第 Ⅳ 層･･･黄褐色土(HUE 10YR 7／6)。アカホヤ火山灰層。
Ⅴ	第 Ⅴ 層･･･暗灰色土(HUE N 3／)。非常に硬い。
Ⅵ	第 Ⅵ 層･･･黒色土(HUE 10YR 1.7／1)。硬い。（縄文時代早期の遺物包含層）
Ⅶ	第 Ⅶ 層･･･黒褐色土(HUE 7.5YR 2／2)。硬い。（縄文時代早期の遺物包含層）
Ⅷ	第 Ⅷ 層･･･黒褐色土(HUE 7.5YR 3／1)。やや硬い。
Ⅸ－１	第Ⅸ-1層･･･褐色土(HUE 10YR 4／4～4／3)。やや硬い。
Ⅸ－２	第Ⅸ-2層･･･褐色土(HUE 10YR 4／4)。やや硬い。



第３図　内屋敷遺跡土層断面図（1／40）

第Ⅲ章　調査の記録

第１節　縄文時代の遺構と遺物

・集石遺構

集石遺構は、10基が検出された。土坑（掘り込み）の有無、礫の被熱度合、炭化物の有無などによりいくつかの段階（準備礫の集積や使用状態に近いものなど）を想定し得る。

ＳＩ１（第５図１）

ＳＩ１は、掘り込みを持たず、20個あまりの礫が疎に集まったものである。礫のほとんどは安山岩で、比較的偏平なものが並ぶように配置されていた。炭化物は見られず、礫の赤変も顕著ではない。準備礫の集積の可能性がある。

ＳＩ２（第５図２）

1.33×1.18mの楕円形の土坑を有し、底面付近には大型で偏平な礫を配置している。礫は砂岩と安山岩であり、密集して検出された。礫の多くに赤変が認められたが、割れたものは少なく丸みを帯びたものが多い。礫間からは炭化物も多く検出された。周辺から貝殻腹縁刺突文を持つ土器片（下剥峰式土器）が出土している。

ＳＩ３（第５図３）

0.65×0.55mと小振りの土坑を有し、比較的大型で偏平な礫による配石を持つ。検出された礫の数は多くはないものの、全体に大振りな礫が目立ち、遺構を中心として周囲に拡げられたような状態で検出されている。礫は砂岩と安山岩で、赤変が顕著である。埋土には炭化物が認められた。

ＳＩ４（第６図１）

1.22×1.04mの楕円形の土坑を有す。面を揃えてはいないものの、大型の礫が下部に配されている。比較的大振りで丸みの強い礫が用いられており、赤変は認められるものの割れたものは少ない。礫間からは炭化物が多く検出され、貝殻腹縁刺突文やヘラ状工具による綾杉文を有する土器片（下剥峰式土器）が出土している。

ＳＩ５（第６図３）

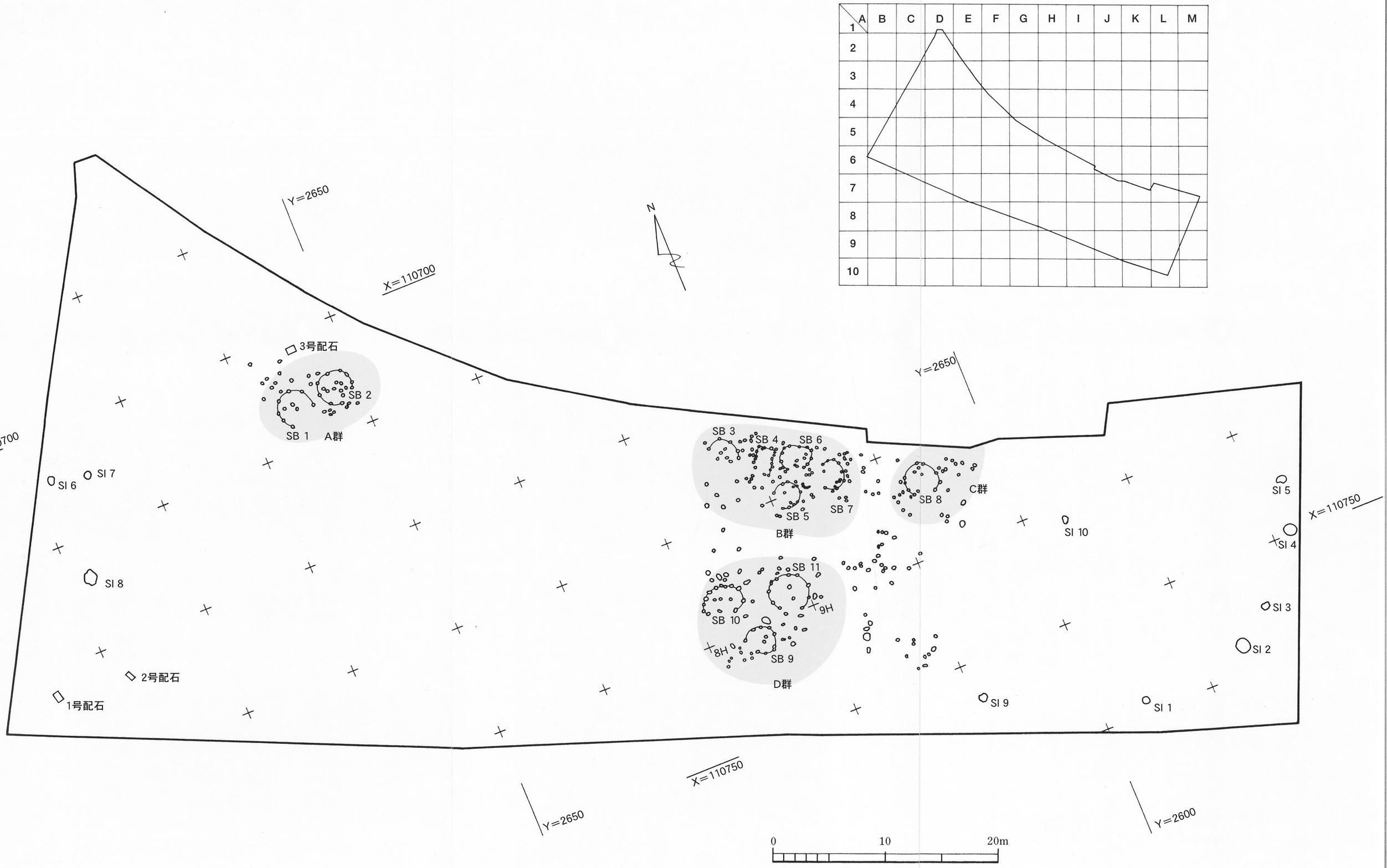
掘り込みは認められない。礫の重なりは見られず、安山岩を主とする数10個の礫が疎に配されている。礫の赤変は認められたが、炭化物は見られなかった。廃棄礫の集積の可能性がある。

ＳＩ６（第６図２）

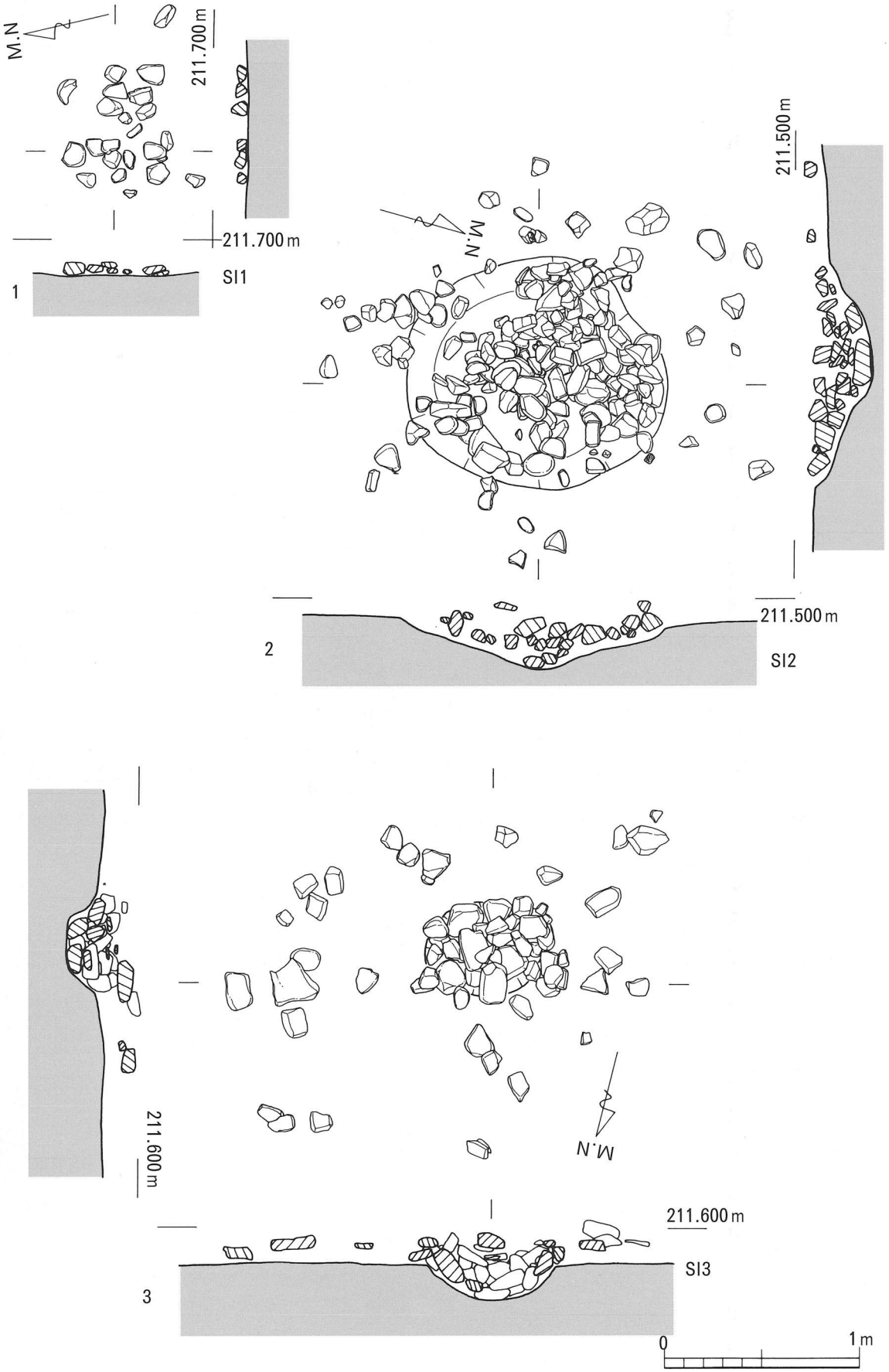
掘り込みは認められない。安山岩を主とする20個程の礫が集められている状態である。礫の赤変、炭化物ともに認められなかった。準備礫の集積の可能性がある。

ＳＩ７（第６図４）

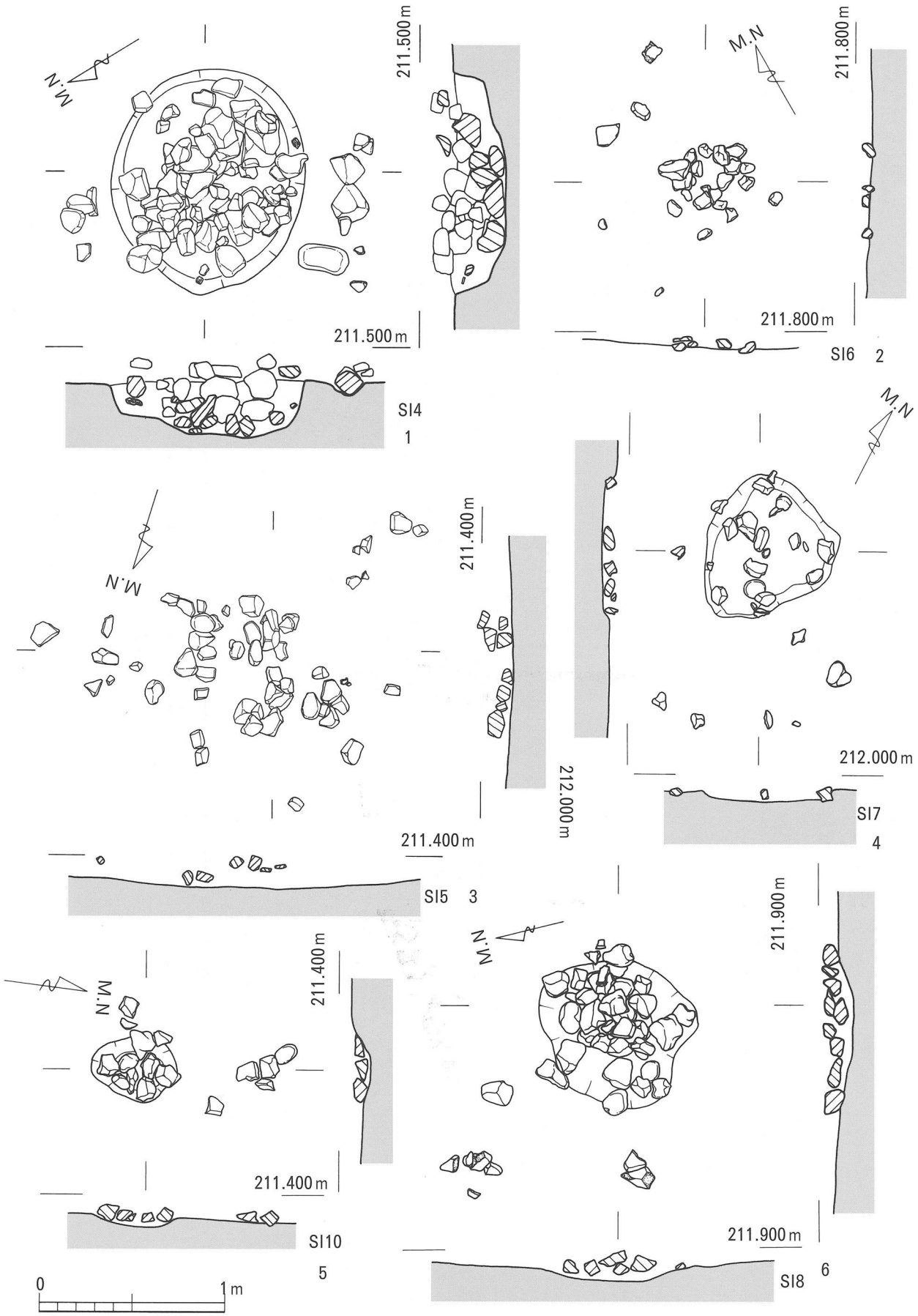
0.77×0.72mの浅い土坑を有する。土坑の中外に20数個の礫が散逸した状態で検出された。安山岩を主とする比較的小振りな亜角礫を利用している。礫の赤変、炭化物ともに認められなかった。土坑内より石器（黒曜石製チップ）が１点出土している。準備礫の集積の可能性がある。



第４図縄文時代早期遺構分布図（１／３００）



第５図　集石遺構（1）（１／30）



第６図　集石遺構（2）（１／30）

ＳＩ８（第６図６）

0.84×0.81ｍの土坑を有する。礫は比較的大振りな亜円礫を利用している。礫は主として安山岩であり、赤変は若干認められたが、炭化物は見られなかった。

ＳＩ９（第７図１）

0.76×0.71ｍの浅い土坑を有する。礫は主として安山岩であり、赤変が認められる。礫間の埋土中に３cm前後の炭化物粒数点、土坑床面直上で長さ約13cmの木炭１点が検出された。

ＳＩ10（第６図５）

0.46×0.39ｍの小型の土坑を有する。安山岩を主とする10数点の礫が密集している。礫は顕著ではないものの赤変が認められ、被熱のためか割れたものが多い。炭化物は見られない。

・　配石遺構

配石遺構は３基検出された。本報告では、集石遺構と異なり大型の板石状の礫で構築された配石遺構として扱う。配石遺構は、一般的に炉などに関連した遺構として想定されている。しかし、本遺跡検出のものは、炭化物の存在の有無や被熱の痕跡の有無など不明な点が多く、今後の検討を要する。

１号配石（第７図２）

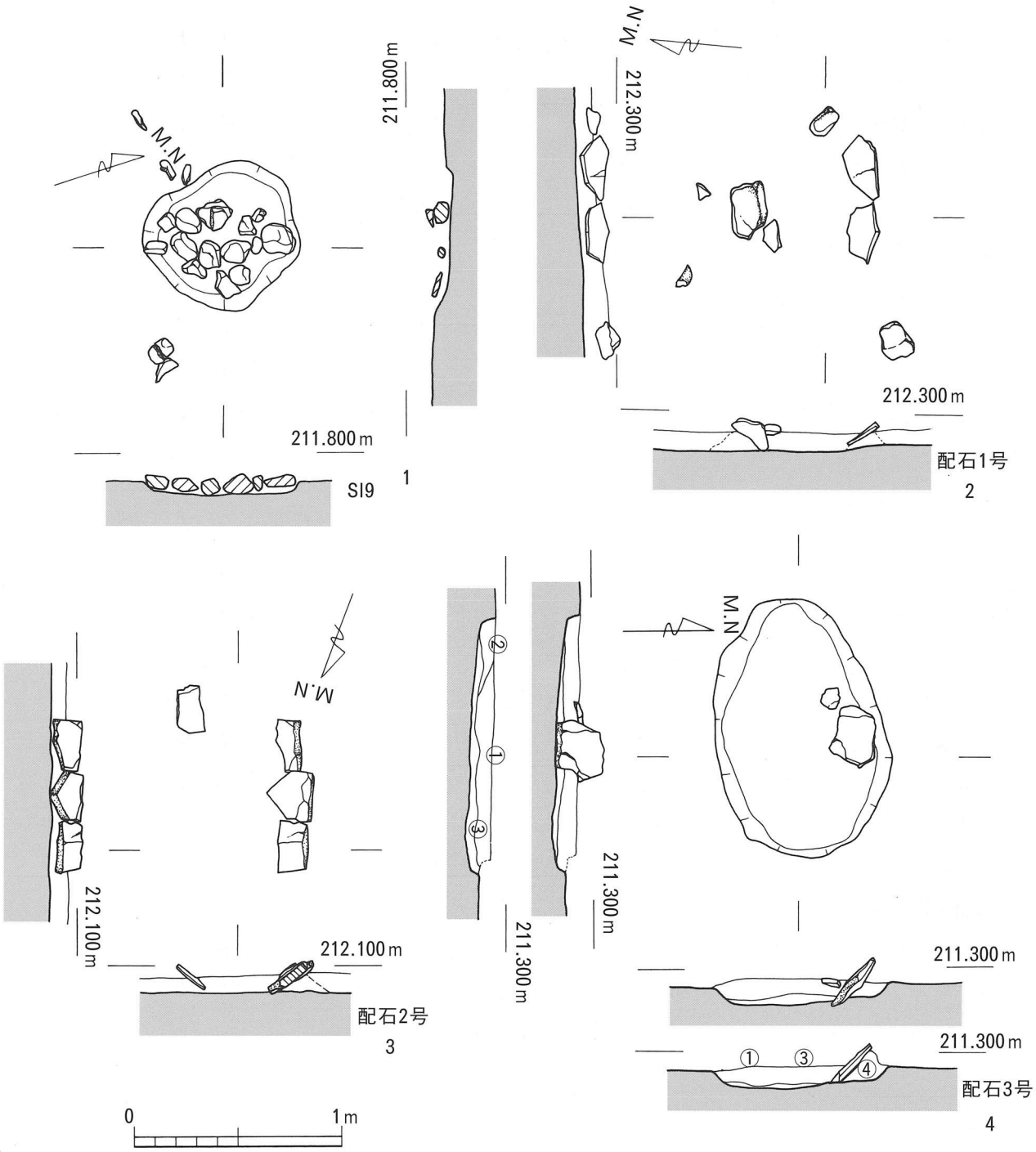
幅30cm前後の板石状の輝石安山岩を、一辺に２枚、対辺に１枚、斜めに配する。掘り込みは確認できなかったが、配石の背後下部に裏込め土を確認したことにより、掘り込みの存在が考えられる。焼土や炭化物、礫の被熱の痕跡は認められなかった。また、台石からの転用と考えられる石（第35図－301）が、遺構の構成礫の一つとして確認された。配石は0.74×0.68ｍの長方形の範囲内である。

２号配石（第７図３）

幅25cm前後の板石状の輝石安山岩を、一辺に３枚、対辺に１枚、斜めに配する。掘り込みは確認できなかったが、１号同様、配石の背後下部に裏込め土を確認し、掘り込みの存在が考えられる。焼土や炭化物、礫の被熱の痕跡は認められなかった。配石は0.90×0.67ｍの長方形の範囲内である。

３号配石（第７図４）

1.24×0.86ｍの楕円形の土坑を有し、一辺のみに幅30cmの板石状の輝石安山岩を一枚、斜めに配する。配石は赤変し、被熱の痕跡が認められる。焼土や炭化物は見られなかった。配石の背後下部の裏込め土が確認されたことから、土坑を掘り込んだ後に礫を配したと考えられる。



【3号配石土層註記】

① 黒褐色土層　やや硬　1㎜前後の黄・白色軽石粒

② 暗褐色土層　やや軟　3㎜前後の白色軽石粒を極少量含む。

③ 褐色土層　やや硬　5㎜前後の黄色軽石粒を極少量含む。しまりあり。

④ 黒褐色土層　やや軟　1㎜以下の白色軽石細粒を極少量含む。しまり弱し。裏込め土。

第7図　集石遺構（3）・配石遺構（1／30）

・ 掘立柱建物跡（平地住居）

第Ⅷ層直上から、直径10～25cm、深さ20cm前後のピット群が多数検出された。精査の結果、掘立柱建物11棟が確認された。内訳は馬蹄形９棟、方形１棟、半円形１棟である。馬蹄形のものは、主柱穴の有無に差異が見られるものの、求心型で10本前後の側柱穴がめぐり、一方向に開口部をもつ。伏屋式かドーム屋根式のどちらかの可能性がある。方形のものは壁立式の一種と考えられ、壁柱を30～60cmの間隔に立て、馬蹄形のもの同様一方向に開口する特徴をもつ。建物は、１～５棟による４群に分かれ、それぞれＡ～Ｄ群と呼称する。

Ａ群（ＳＢ１－第８図１・ＳＢ２－第８図２）

ＳＢ１は、開口部に対して直行する２本の主柱穴に、９本の側柱穴が直径約3.2mで馬蹄形にめぐる。ＳＢ２は、開口部に対して平行する２本の主柱穴に、11本の側柱穴が直径約3.2mで馬蹄形にめぐる。

Ｂ群（ＳＢ３－第８図３・ＳＢ４－第８図４・ＳＢ５－第８図５・ＳＢ６－第８図６・ＳＢ７－第９図１）

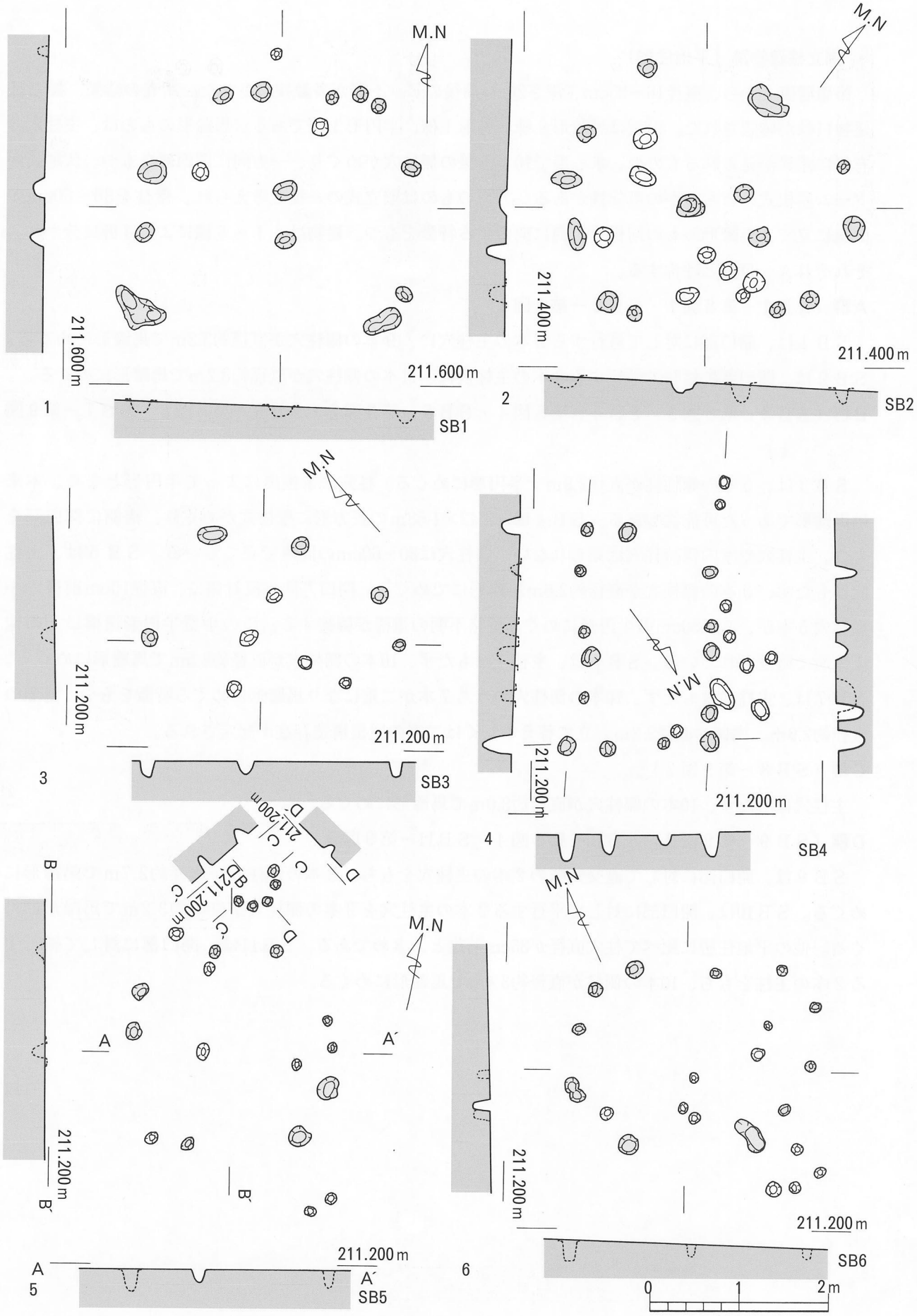
ＳＢ３は、５本の側柱柱が直径2.9mで半円形にめぐる。柱穴の未検出によって半円形となり、本来は馬蹄形であった可能性もある。ＳＢ４は、2.43×1.58mの長方形に壁柱穴がめぐり、南側に開口部をもつ。主柱穴や屋内棟持柱穴は見られない。壁柱穴は30～60cmの間隔で立てている。ＳＢ５は、主柱穴はもたず、９本の側柱穴が直径約2.6m馬蹄形にでめぐる。開口方向の反対側に、直径10cm前後の小型柱穴５本が、直径50cmの半円形にめぐる性格不明の遺構が隣接する。この小型半円形遺構はその他１カ所で確認されている。ＳＢ６は、主柱穴はもたず、10本の側柱穴が直径約2.5mで馬蹄形にめぐる。ＳＢ７は、主柱穴はもたず、10本の側柱穴のうち７本が二重になり馬蹄形にめぐる特徴をもつ。外側の直径約2.9m、内側の直径2.2m。立て替えもしくは二重の屋根構造存在が想定される。

Ｃ群（ＳＢ８－第９図２）

主柱穴はもたず、10本の側柱穴が直径約3.0mで馬蹄形にめぐる。

Ｄ群（ＳＢ９－第９図３　ＳＢ10－第９図４　ＳＢ11－第９図５）

ＳＢ９は、開口部に対して直交気味の２本の主柱穴をもち、８本の側柱穴が直径約2.7mで馬蹄形にめぐる。ＳＢ10は、開口部に対して平行する２本の主柱穴を９本の側柱穴が直径約3.2mで馬蹄形にめぐる。他の平地住居に比べて柱穴直径が35cm前後と大きめである。ＳＢ11は、開口部に対して斜行する２本の主柱をもち、10本の側柱が直径約3.4mで馬蹄形にめぐる。



第８図　掘立柱建物跡（平地住居跡）(1)　（１／60）

第９図　掘立柱建物跡（平地住居跡）(2)（１／60）

・土　器　（第11図～第24図）

縄文時代早期に位置づけられる土器が多数出土した。それらは文様や手法、器形により分類が可能である。ここでは、分類の基準と根拠を示し、若干の説明を加える。全ての土器に対して観察所見を述べることは、紙数の関係上無理であるので、個々の資料については観察表を参照されたい。

1類（第11図１・２）

内湾気味の口縁部で、口唇部外側に押圧刻み、その下に横位の貝殻腹縁刺突文を数段施している。口唇部内側は斜めにナデを施し、山形に尖る口唇部となる。「岩本式土器」に相当する。

2類（第11図３～第12図23）

直立またはわずかに外反する口縁部で、外器面全体に斜方向の貝殻腹縁条痕文を施文した後に、口縁部上端に斜位の貝殻腹縁連続刺突文を１段施す。内器面は、口唇部にミガキ、それ以下に丁寧なナデを施す。器形は膨らんだ胴部から底部に向かって緩やかにしまっていく形状で、底部は平底である。器形の面では異なるものの、文様構成は「前平式土器」と同じであり、その系譜上にあるものと思われる。

3類（第13図24～37）

直立気味の口縁をもち、平坦な口唇部に縦位の連続刻み目を、外器面全体には縦位の貝殻腹縁刺突文を、底部側辺には縦位の刻線を施す。器壁は薄く、内器面にはナデを施す。器形は蘭鉢状で円筒と角筒の両方がある。「知覧式」に相当する。

24は、斜方向の条痕文の後に三叉方向の貝殻腹縁刺突文を施す。27は、外器面に横方向の条痕文と斜方向の貝殻腹縁刺突文を施す。25・26・28は、貝殻腹縁による横位や縦位の連続刺突文と、刻み目をもつ楔形貼付突帯を施す。25は波状口縁をもつ。32～34は斜・横方向の条痕文の後に縦位の貝殻腹縁連続刺突文を施す。24・25は角筒土器で、26～37は円筒土器である。

4類（第13図38～第14図58）

円筒形土器であり、わずかに外反する口縁をもつ。外器面は、平坦な口唇部に縦位の刻線を、口縁部上端には数段の貝殻腹縁連続刺突文を、口縁から胴部にかけて横方向の押引文を施す。内器面には横・斜方向のナデを施す。「吉田式」に相当する。

48は穿孔（補修孔）をもつ。57と58は同一個体であり、胴部に押引文をもつが、口縁部に横位の貝殻腹縁連続刺突文２段以上、胴部に円形刺突をもつ連続瘤状突起文２段と斜位の貝殻腹縁連続刺突文を施す。円形の穿孔（補修孔）をもつ。

5類（第15図59～第16図96）

直行またはわずかに外反する口縁をもち、やや膨らむか直線的な胴部をもつ円筒形土器である。外器面は、口唇部に縦位の刻線を、口縁部には２～３段の横位の貝殻腹縁連続刺突文を、胴部には横方向の貝殻腹縁条痕文を施す。内器面は主に横方向のナデによって調整している。「石坂式」の範疇に入るが、胴部の条痕文の違いによって２つに細分する。

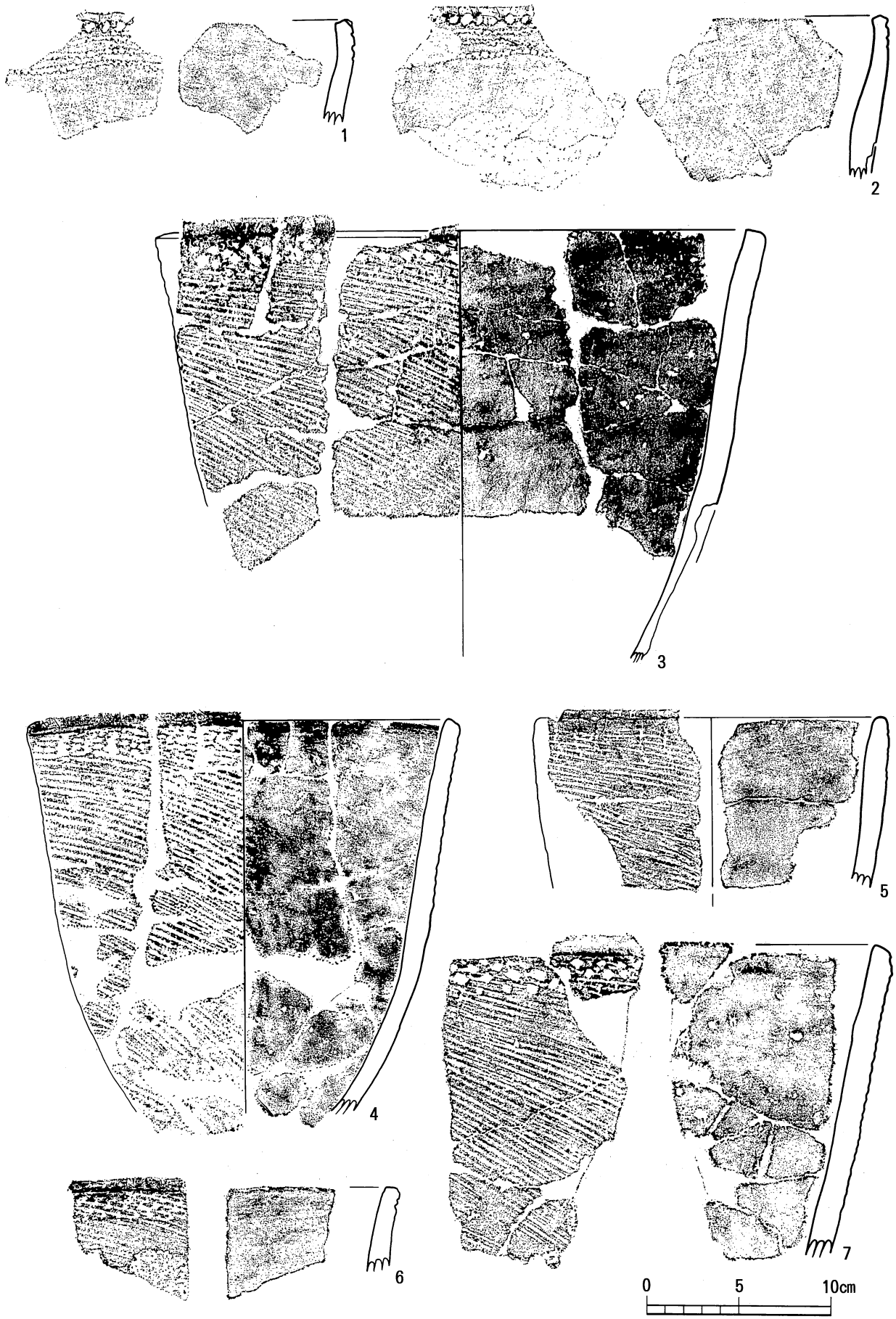
（ａ）横位施文（第15図59～87）

胴部の横位の貝殻腹縁による施文に、完全な条痕文のものと押引風条痕文のものがある。

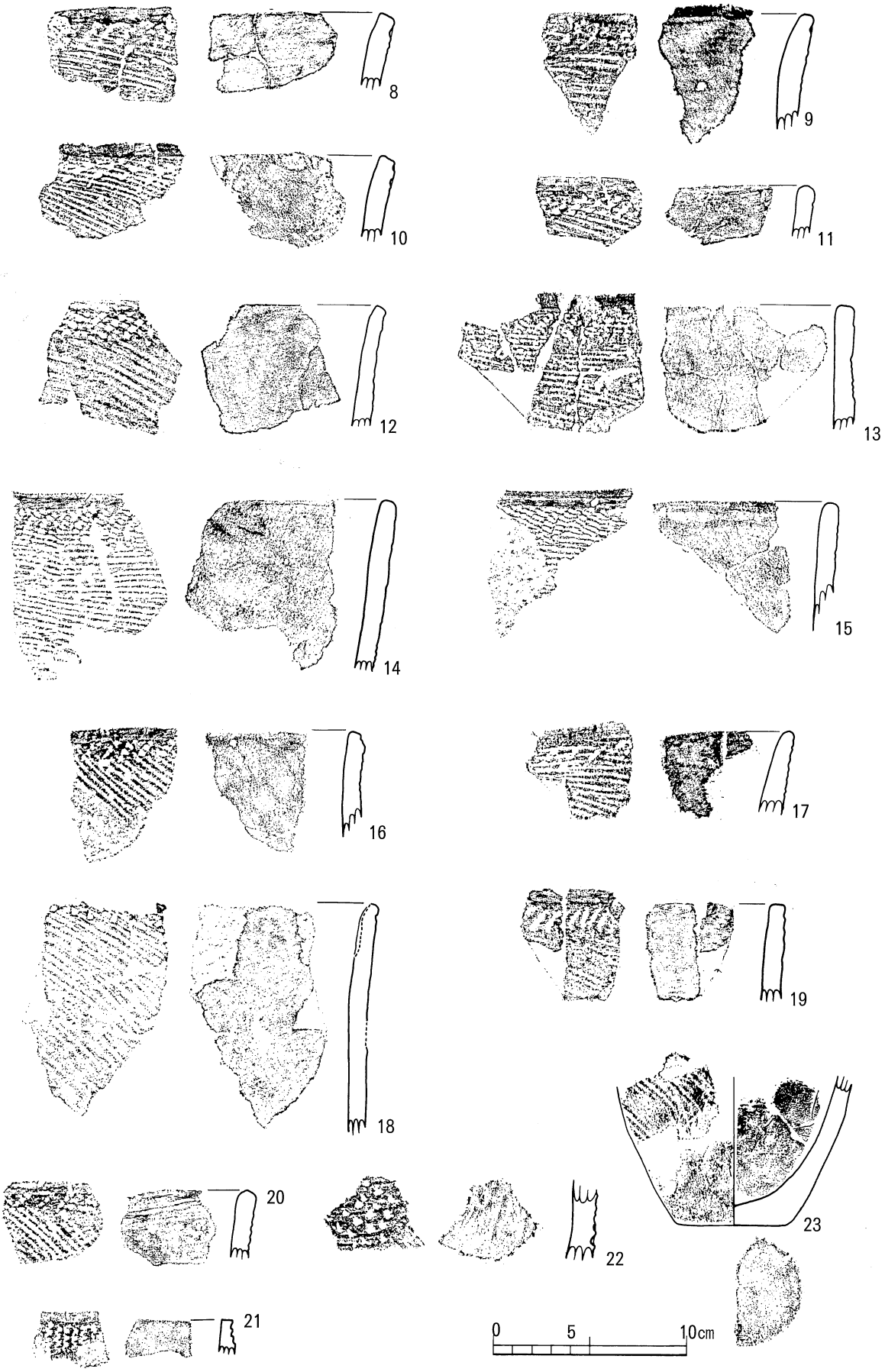
（ｂ）綾杉状施文（第16図88～96）

胴部は全て綾杉状に施文してあるが、口縁部の施文にはバリエーションがある。88は口縁部に羽状の貝

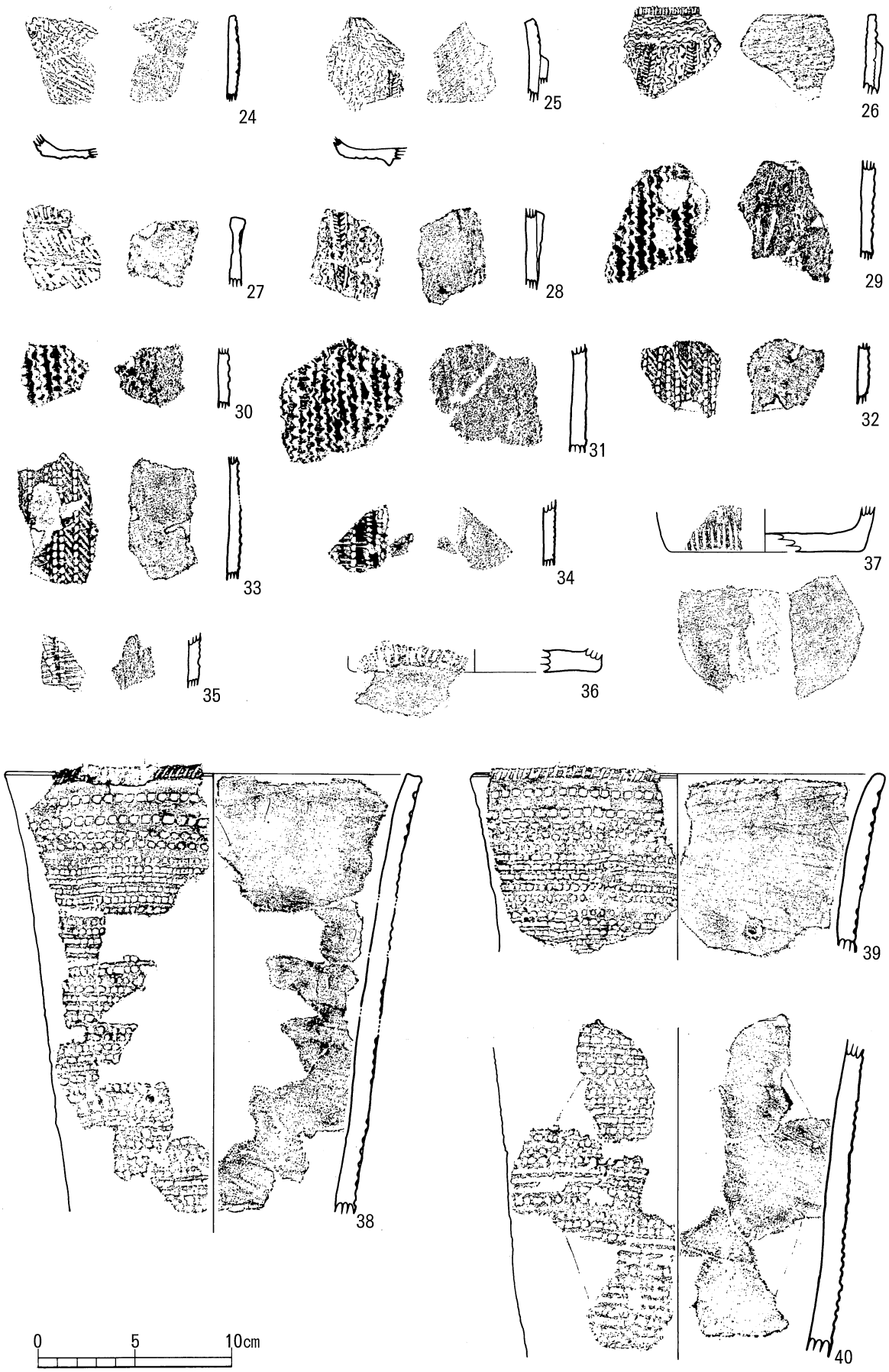
第10図　縄文時代早期遺物分布図　（1／300）



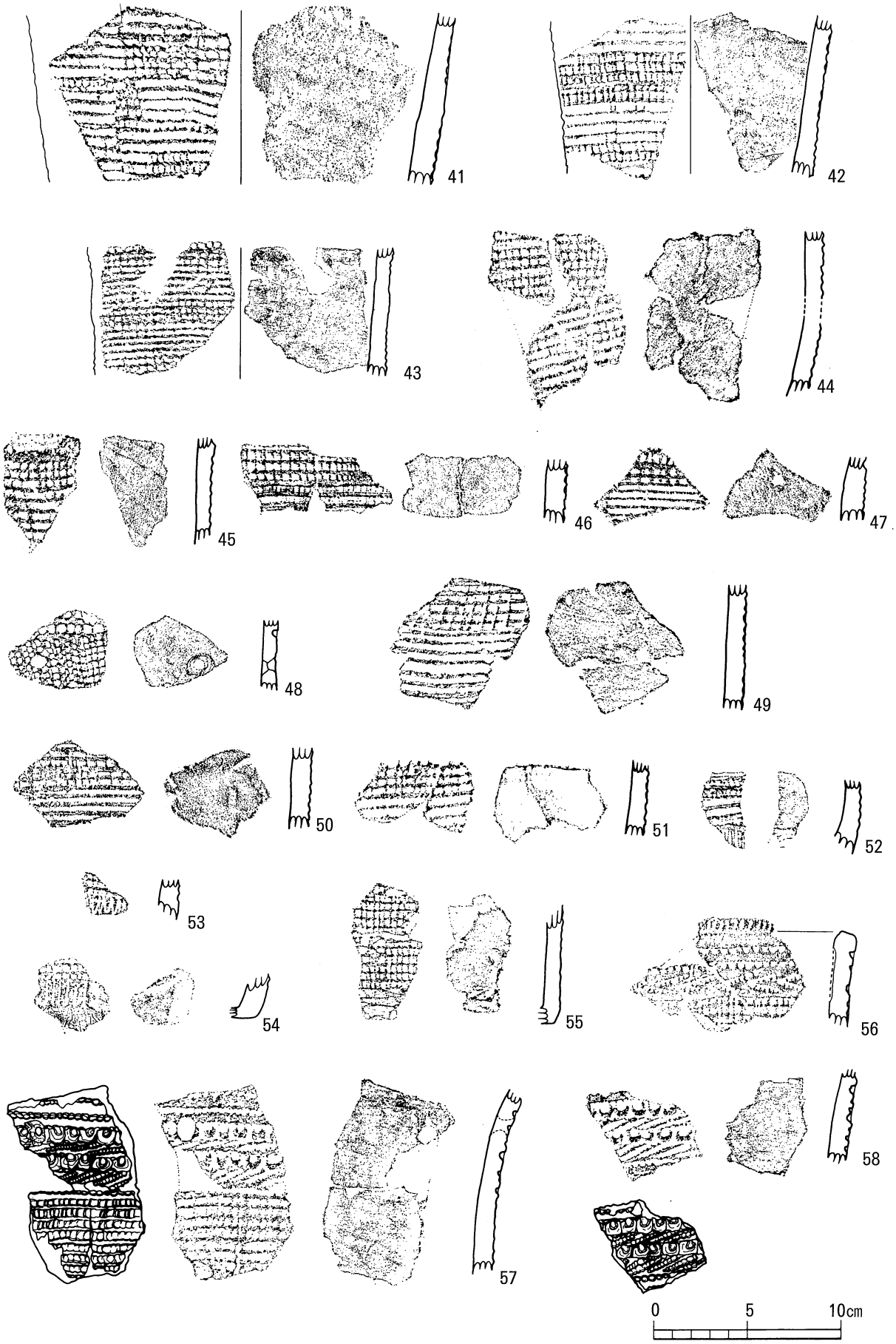
第11図　縄文時代早期土器 (1) (1／3)



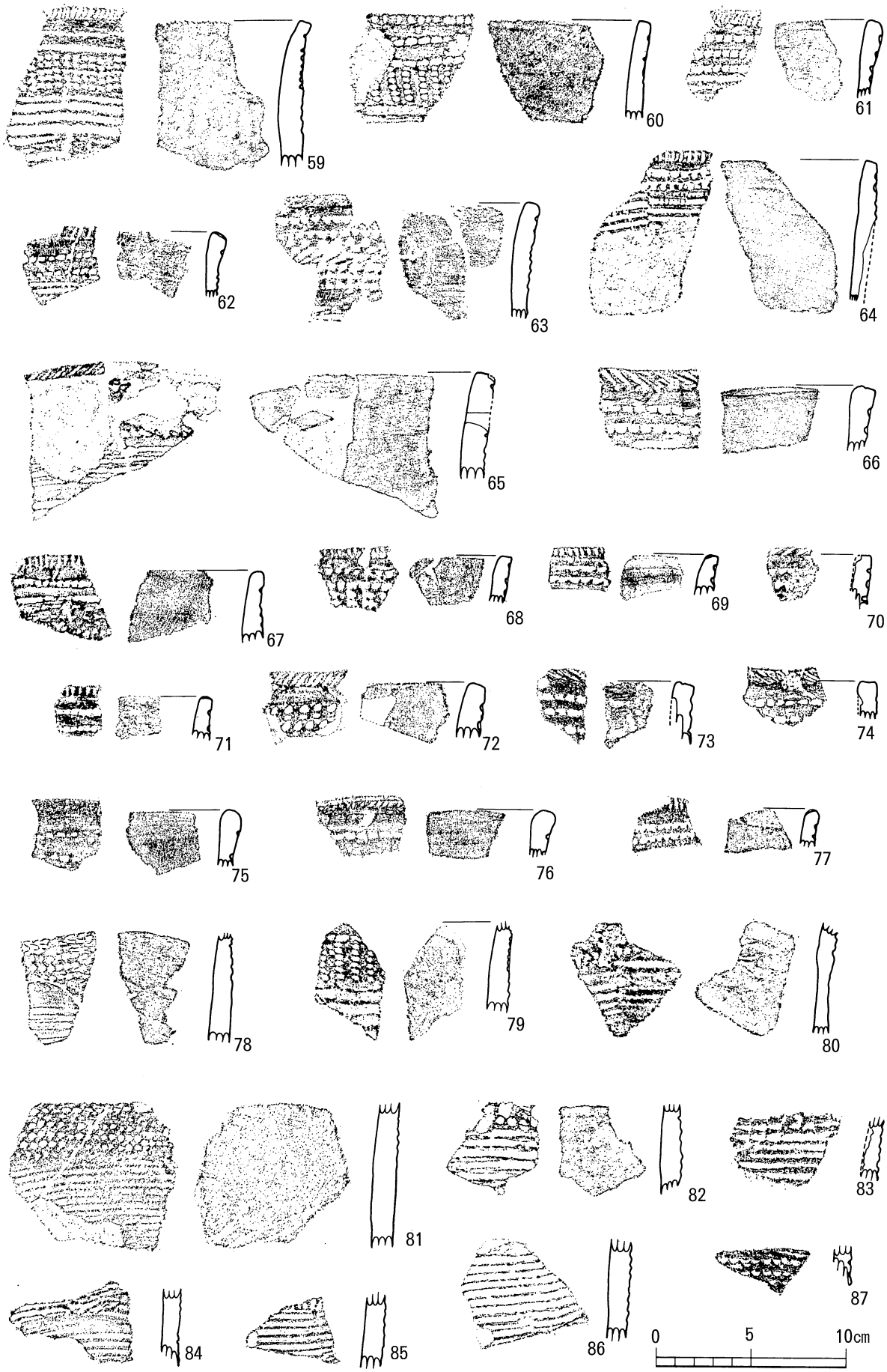
第12図　縄文時代早期土器 (2) (1／3)



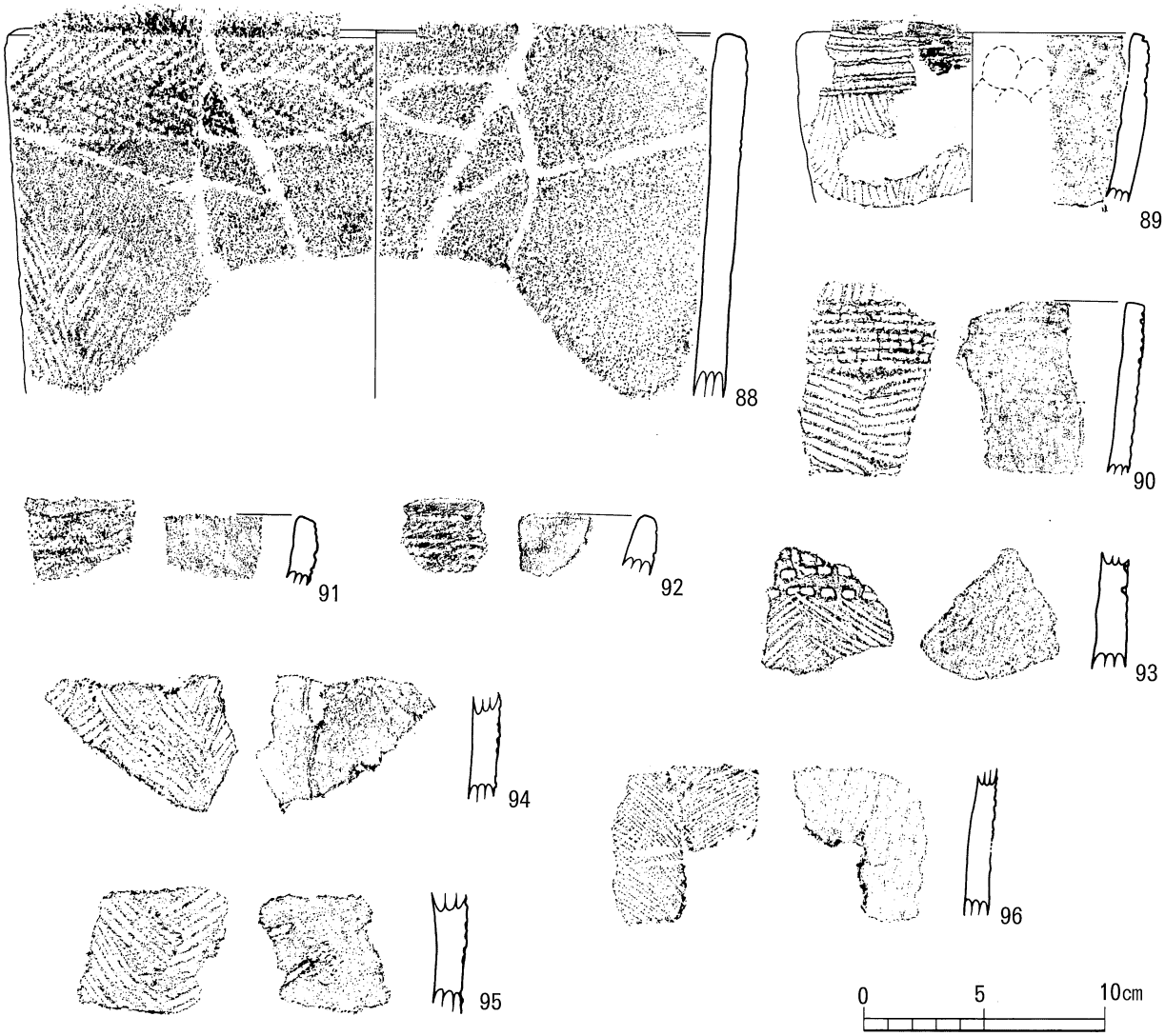
第13図　縄文時代早期土器 (3) (1／3)



第14図　縄文時代早期土器 (4) (1／3)



第15図　縄文時代早期土器 (5) (1／3)



第16図　縄文時代早期土器（6）（1／3）

殻腹縁刺突文を施す。89～93は口縁部に数段の横位の貝殻腹縁連続刺突文を施す。

5ａ類は「倉園Ｂ式」に、5ｂ類は「石坂式」に相当する。

6類（第17図97～109）

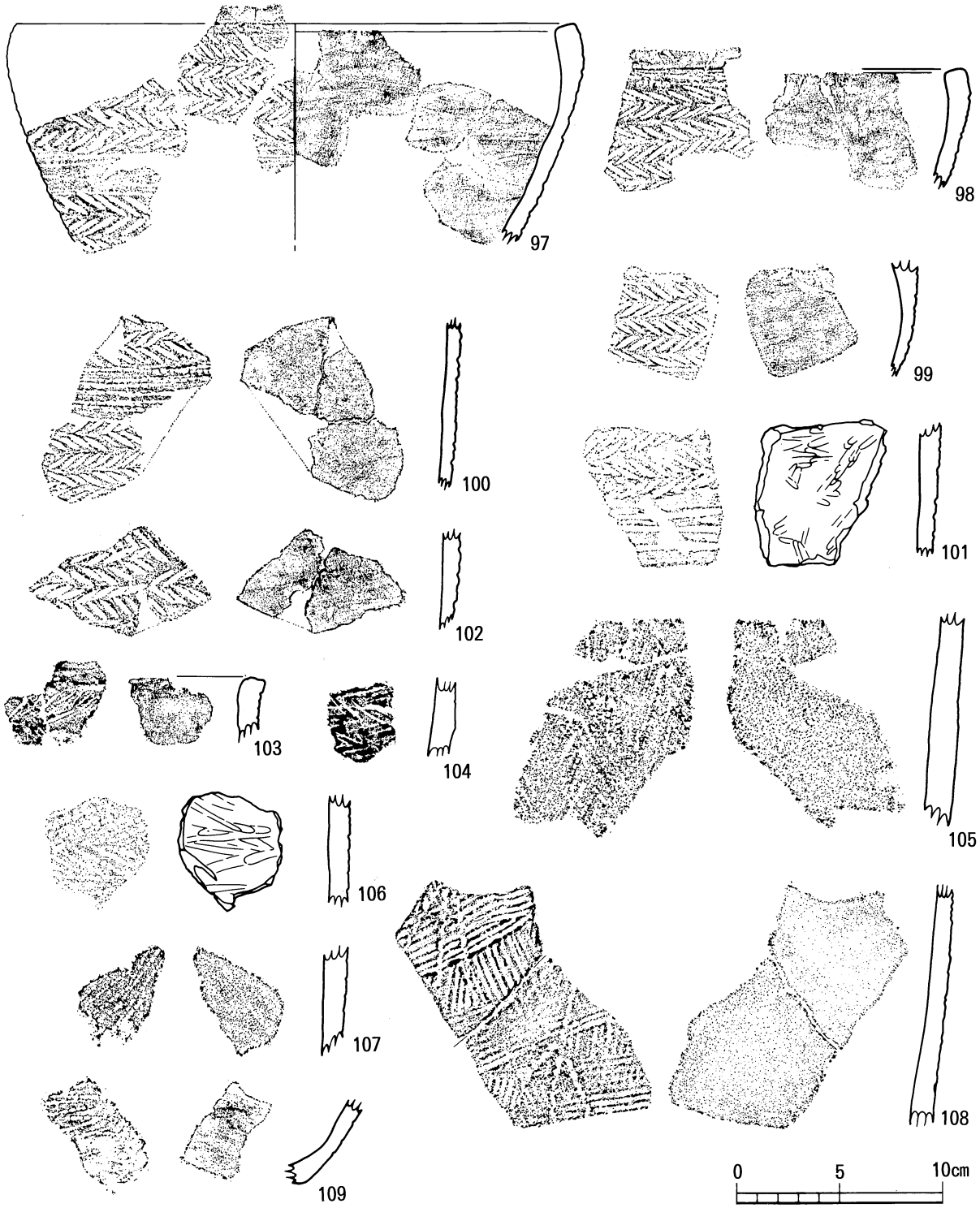
やや内湾気味の口縁部は、口唇部を平坦にナデでいる。口縁部から底部まで、貝殻腹縁刺突文と篦状工具や貝殻による綾杉文を数段づつ交互に施文する。内器面はミガキ、あるいは丁寧なナデである。底部は平底で、胴部に向け膨らみ気味に立ち上がる。「下剥峰式土器」に相当する。

7類（第18図110～第19図123）

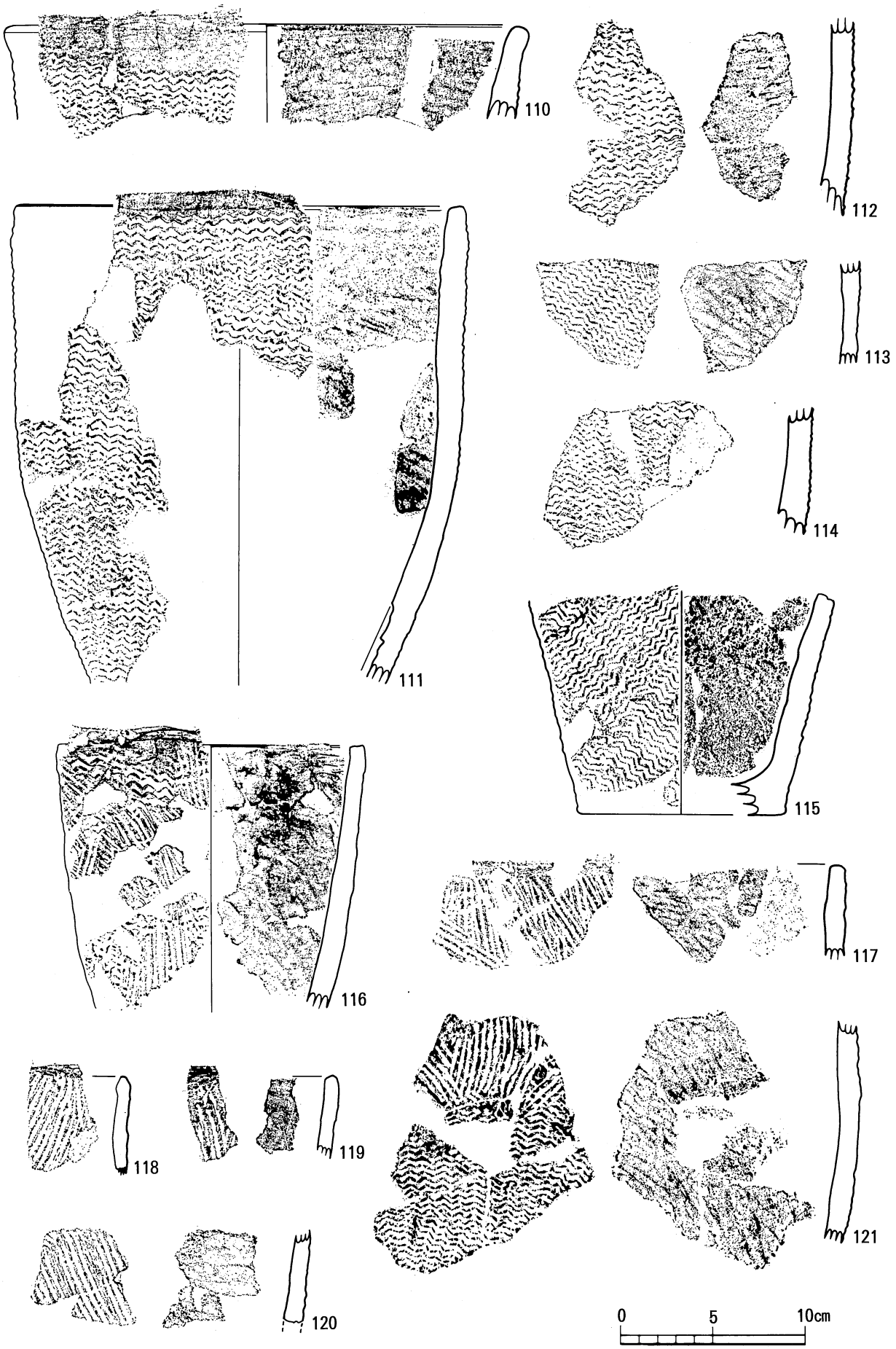
「押型文土器」である。施文具の種類によって2つに細分する。

（ａ）山形押型文（第18図110～121）

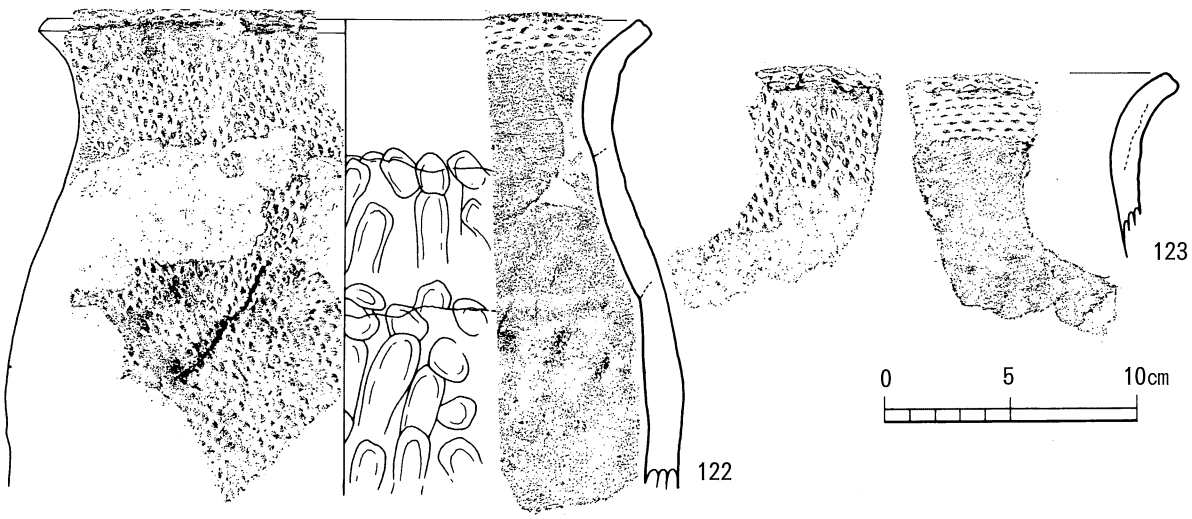
直行気味の口縁、わずかに丸みをもつ胴部に平底をもつ器形。内器面は、丁寧なナデで、口唇部付近のみミガキを施す。110～114は外器面全体に押型施文を、115・116・121は押型施文と原体条痕を施す。118～120は原体条痕だと考えられる。



第17図　縄文時代早期土器 (7) （1／3）



第18図　縄文時代早期土器 (8) (1／3)



第19図　縄文時代早期土器 (9) (1／3)

(b) 楕円形押型文（第19図122・123）

122・123は同一個体である。平坦な口唇部に、外反する口縁、膨らみのある胴部をもつ器形。外器面には口唇部から胴部にかけて全体的な押型施文が、内器面の口縁部にも2cm幅の押型施文帯が見られる。

8類（第20図124～第22図163）

「円筒形条痕文土器」である。

丸みを帯びた口唇部に、直行もしくはやや外反気味の口縁をもち、器壁が厚く、内器面に横・斜方向のミガキや丁寧なナデを施す。外器面の施文方法や施文範囲によって4つに細分する。

(a) 外器面の口唇部から口縁部上部の狭い範囲に貝殻腹縁連続刺突文を施す。（第20図124～第21図143）

124～128・140・143は、外器面の口唇部に1段、口縁部に3段前後の密な貝殻腹縁刺突文を施す。131～135は外器面の口縁部に3段前後の疎なる貝殻腹縁刺突文を施す。131は、穿孔（補修孔）が確認され、132と同一個体である。129・130・136～139・141・142は、外器面の口唇部から口縁部にかけて3段前後の押引状貝殻腹縁刺突文を施す。

(b) 外器面の口縁部から胴部上部まで横方向の貝殻腹縁条痕文を施す。（第21図144～第22図153）

144～150は直線状の条痕であるが、151・152は微妙な波状の条痕である。153は斜方向の条痕であり、穿孔（補修孔）をもつ。

(c) 外器面の口縁部から胴部全面にかけて横方向の貝殻腹縁条痕文を施す。（第22図154～158）

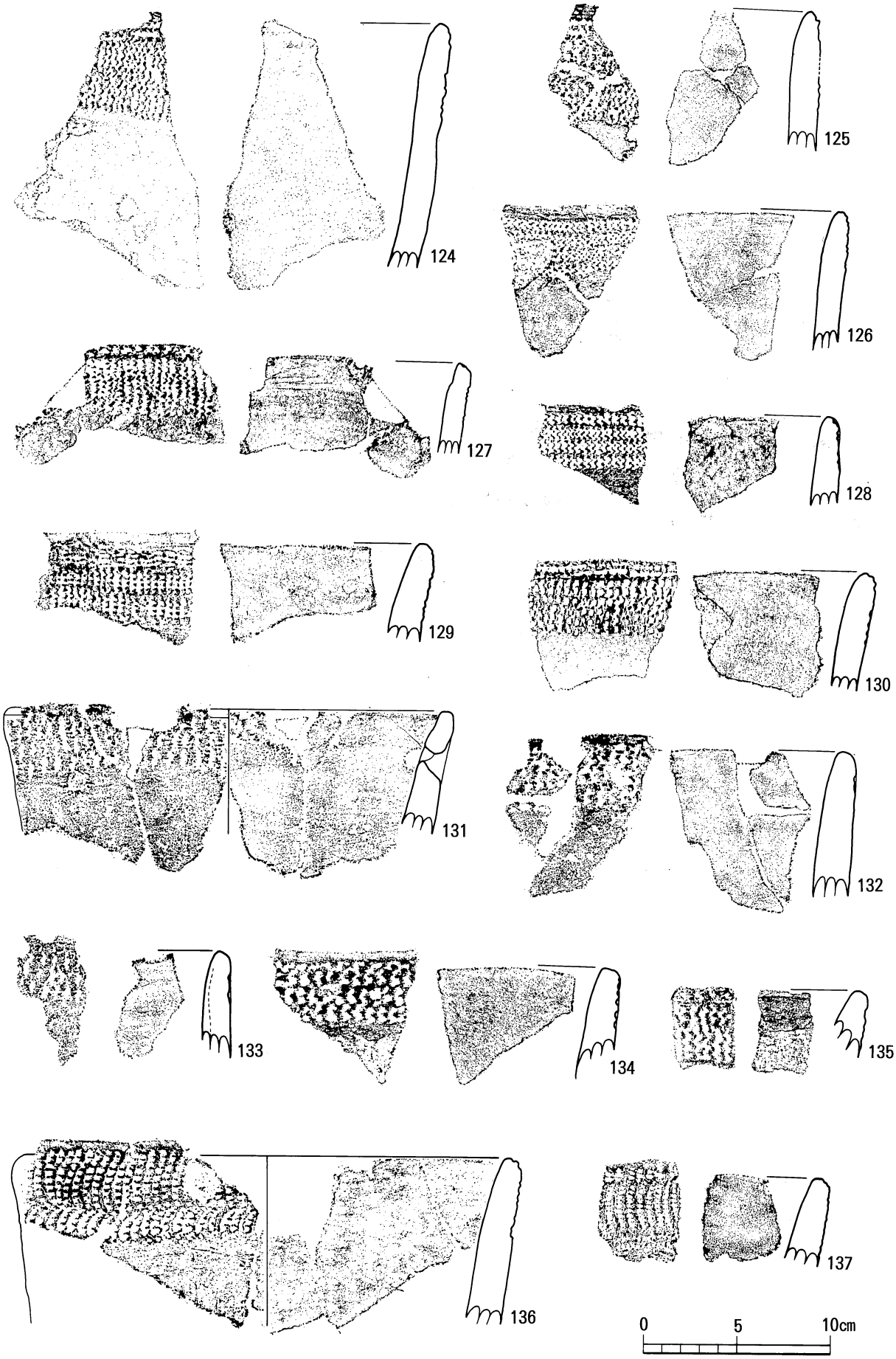
154～158のいずれも8b類に比べて条痕の間隔が広い。

(d) 小破片で施文範囲が特定できないが、横方向の貝殻腹縁条痕文を施す。（第22図159～163）

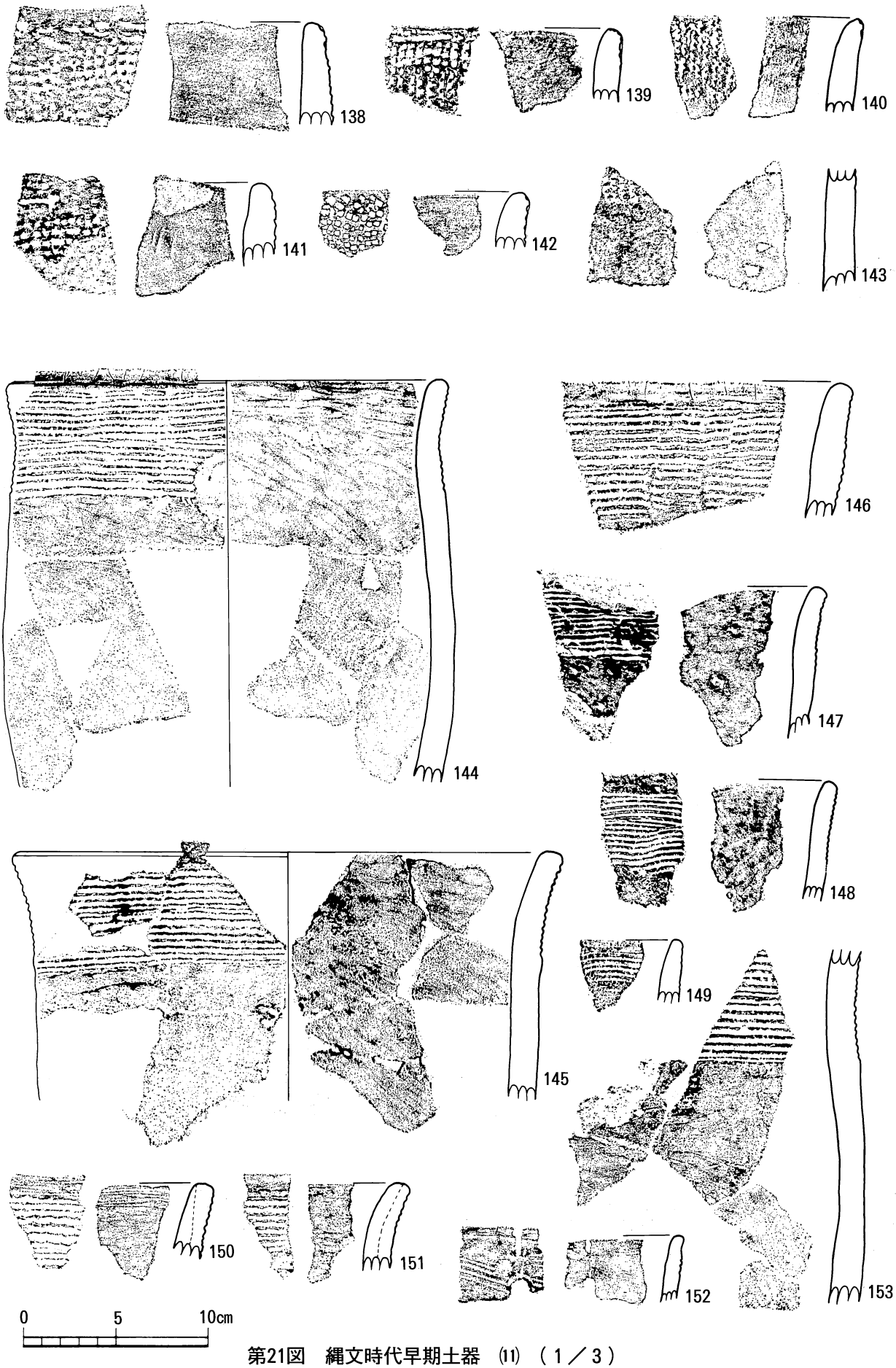
9類（第23図164～174）

1～8類以外の「条痕文土器」である。

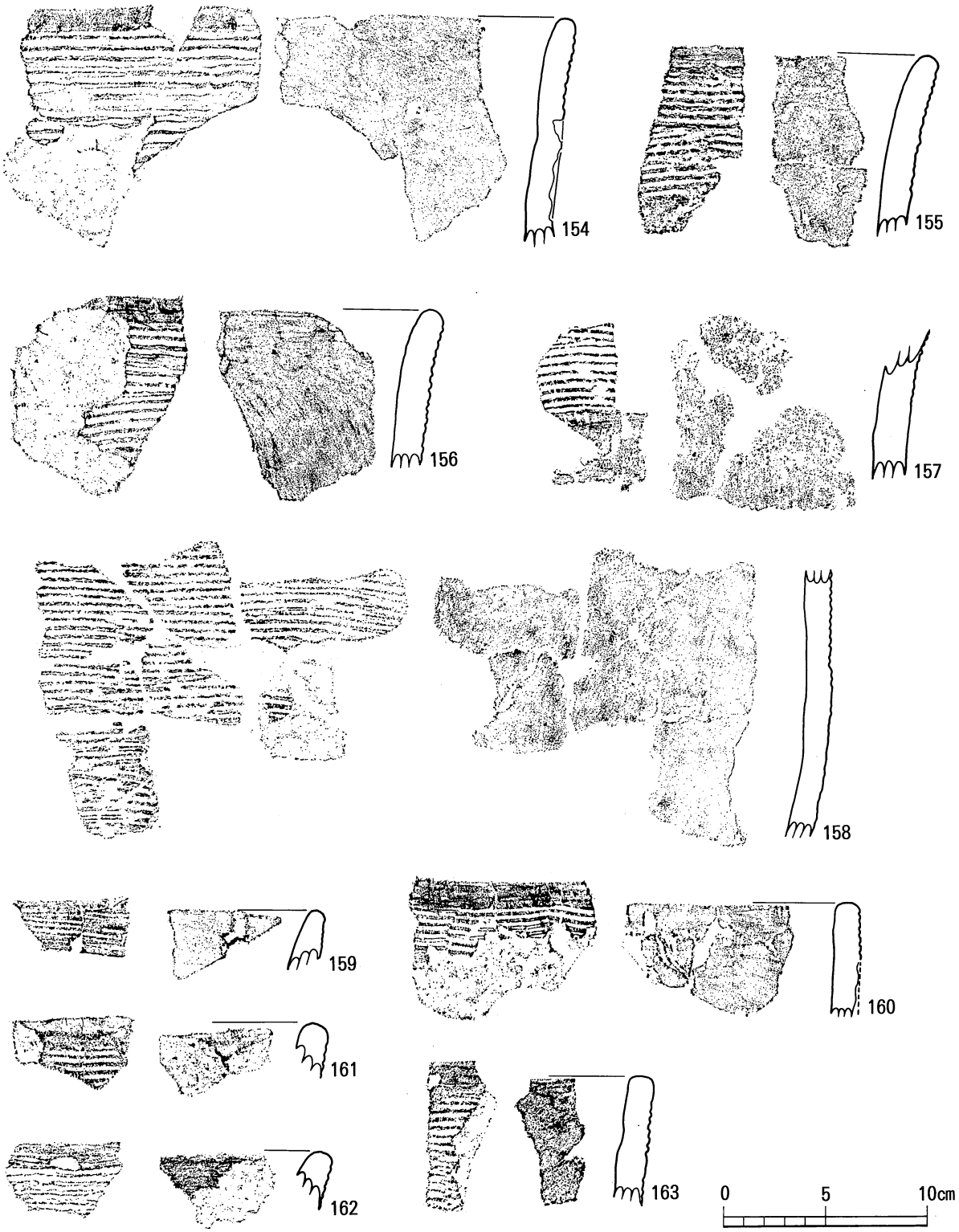
164・165は同一個体で、バケツ状の器形で全体に横位の条痕を施す。口唇部は平坦、底部は厚みのある平底である。166・170は胴部片で、器壁は厚く、横位・斜位の条痕が施される。167～169・171・172は胴部片で、明確な横位の条痕が施される。173は胴部片で、斜方向の貝殻腹縁条痕施文の後ナデを施している。174は横位・斜位の条痕が施される。器壁は湾曲しており、底部付近と思われる。



第20図　縄文時代早期土器 ⑽ （１／３）



第21図　縄文時代早期土器 (11) （1／3）



第22図　縄文時代早期土器 ⑿ （１／３）

10類（第23図175～180 ）

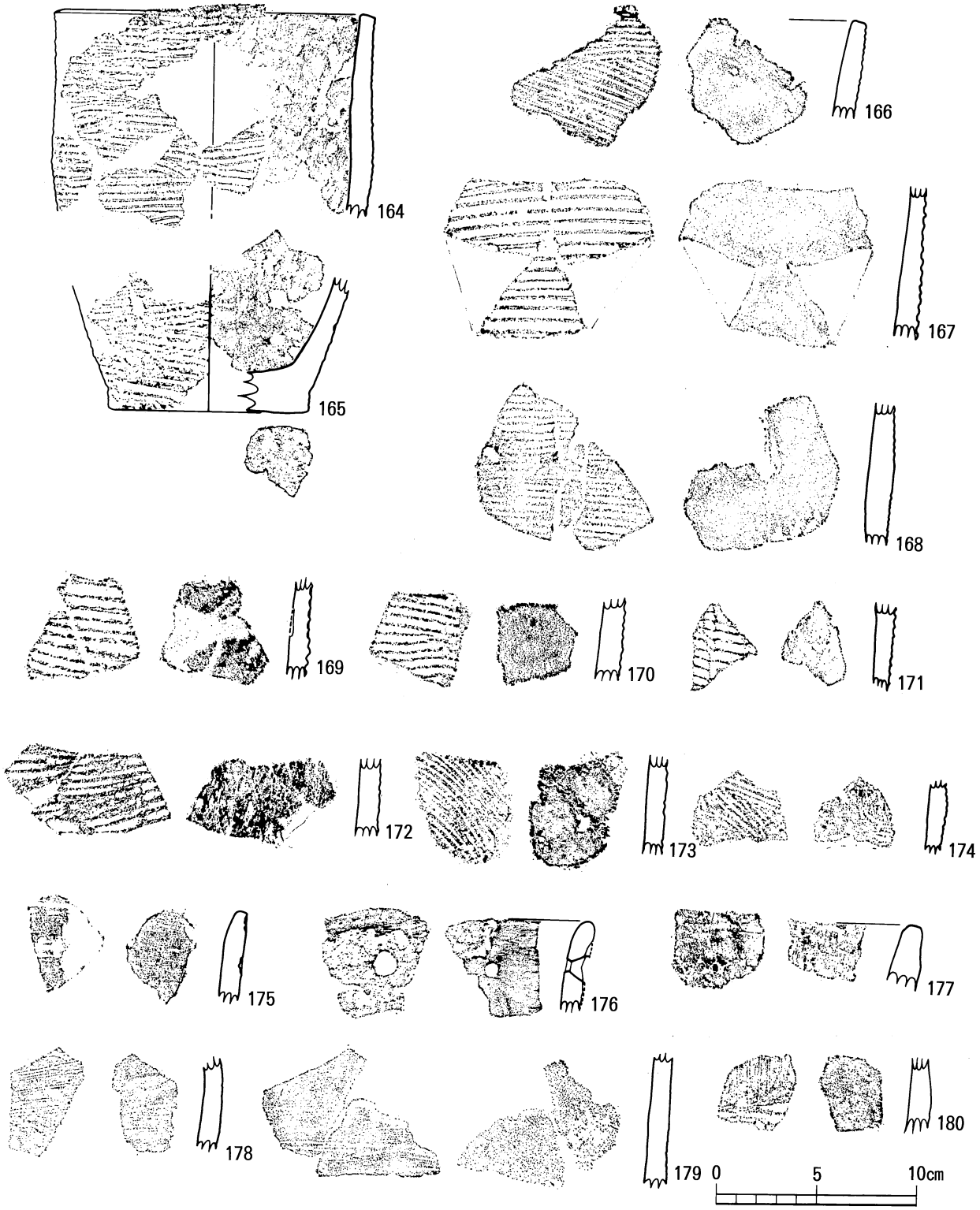
型式不明の口縁部・胴部を一括した。

175は外傾する口縁部に、幅 1.2cmに割った貝殻による刺突文を２段に施している。176は内器面にミガキと丁寧なナデを施している。外器面が剥落しているが、僅かに横方向の貝殻腹縁条痕文らしき条痕が確認できる。この内外の様子から、８類に入る可能性がある。また、内外面より穿孔（補修孔）を施している。177は口縁部片で、外器面は無文で、ミガキを施している。178・179は胴部片で、外器面は丁寧なナデの後に横方向の細沈線が施される。180は底部片で、外器面に丁寧なナデの後に縦位の細沈線を施している。

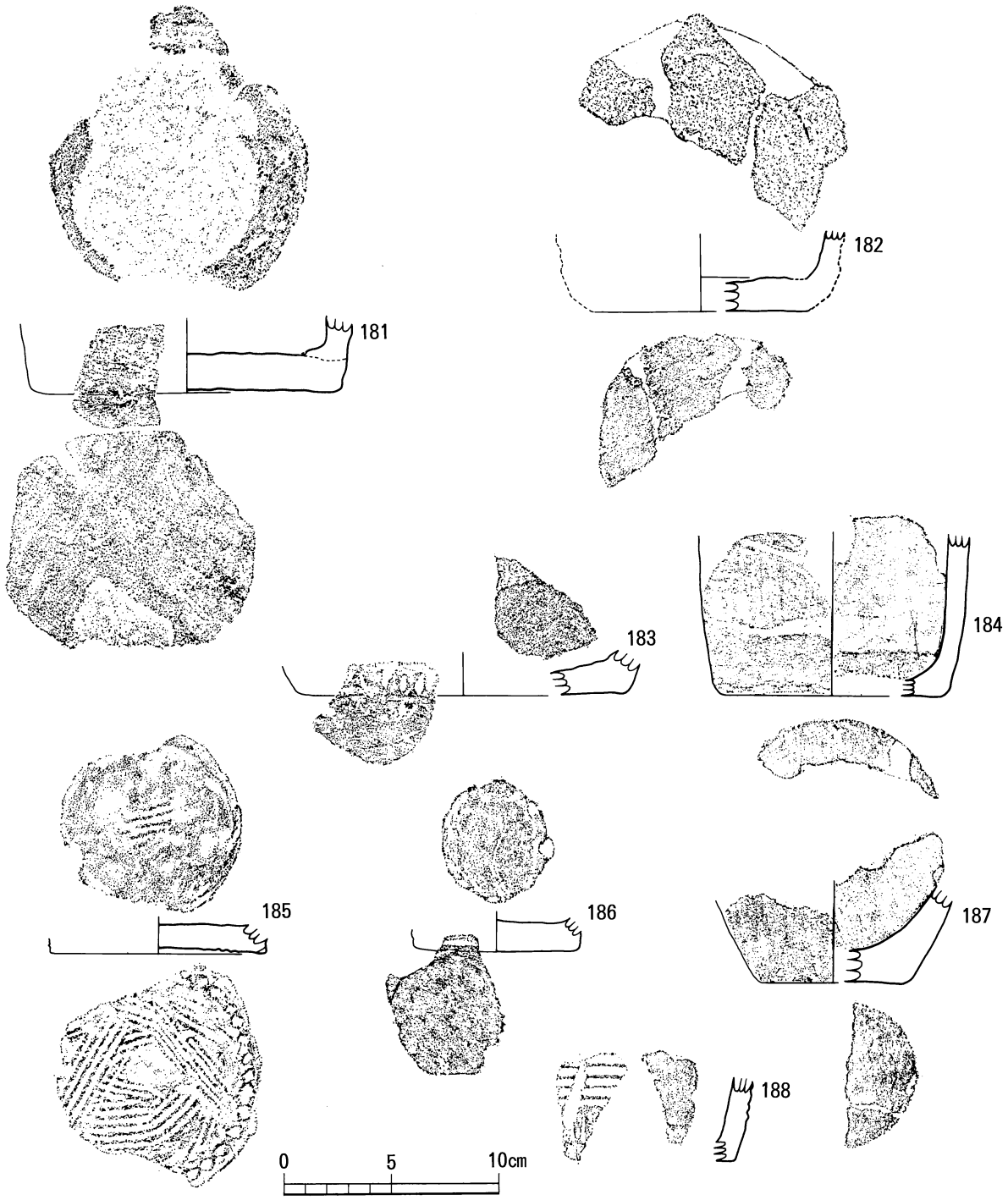
11類（第24図181～188 ）

型式不明の底部を一括した。

181・182は、底部から垂直気味に胴部が立ち上がる円筒形の底部である。181は、器壁が厚く径14.3cmの大型で底面にナデを施す。182は径10.2cmで底面にナデを施す。183も垂直気味に胴部が立ち上がるタイプで、全体にナデを施した後に縦位の短刻線を施す。184は外器面に丁寧なナデを施してあり、わずかではあるが、斜方向の条痕が確認される。185は径10.0cmの底面に、ナデ調整の後貝殻腹縁条痕と縦位の短刻線を施す。187は外器面に縦方向のミガキが確認される。188は胴部に横方向の貝殻腹縁条痕文と縦位の細刻線を施す。



第23図　縄文時代早期土器 ⑬ （１／３）



第24図　縄文時代早期土器 ⑭ （１／３）

・石　器（第25図～第35図）

ここでは、アカホヤ火山灰層下の第２文化層出土の石器を扱う。内訳は石鏃45点、尖頭状石器７点、削器９点、石錐２点、石核３点、楔形石器２点、折断剥片１点、使用痕のある剥片12点、加工痕のある剥片４点、不明剥片２点、局部磨製石斧１点、不明楕円形石製品１点、磨石・敲石16点、台石・石皿13点である。

石鏃（第25図189～第26図234）

石鏃は45点出土した。189は石英製で、鏃身の両側縁が屈曲し五角形をなす凹基無茎鏃である。190～199は無茎の基部にU字状の深い抉りをもち、脚部を顕著にもつ鍬形鏃である。196のみ黒曜石製で、190～195、197～199はチャート製である。200は石英製で、無茎の基部に明確ではない抉りをもち凹基に近いが、脚部らしき屈曲をもつので鍬形鏃である。201～214は二等辺三角形タイプの無茎凹基鏃である。201は青色系チャート製で、他の無茎凹基鏃の側縁が直線状の三角形平面とは異なり、両側縁が屈曲している形である。209は黒曜石製・212は赤色系チャート製で、両側縁の調整が鋸歯状に施されている。215～220は全て黒曜石製の小型正三角形タイプ無茎平基鏃である。221～225は小型二等辺三角形タイプの無茎平基鏃である。全て黒曜石製である。226～233は小型三角形タイプの無茎凹基鏃である。黒曜石製の226～231は両側縁が直線状であるのに対し、チャート製である232・233は基部の抉りが深く脚部を顕著にもつ。234は黒曜石製で二等辺三角形を呈するが、側縁長が基部長に比べて極端に長い特徴をもつ。小型のものには、剥片素材から片面のみや両面の縁辺付近のみを調整した、いわゆる剥片鏃の類が多く確認される。ここでは、215～234が剥片鏃の類だと考えられる。

尖頭状石器（第26図235～240）

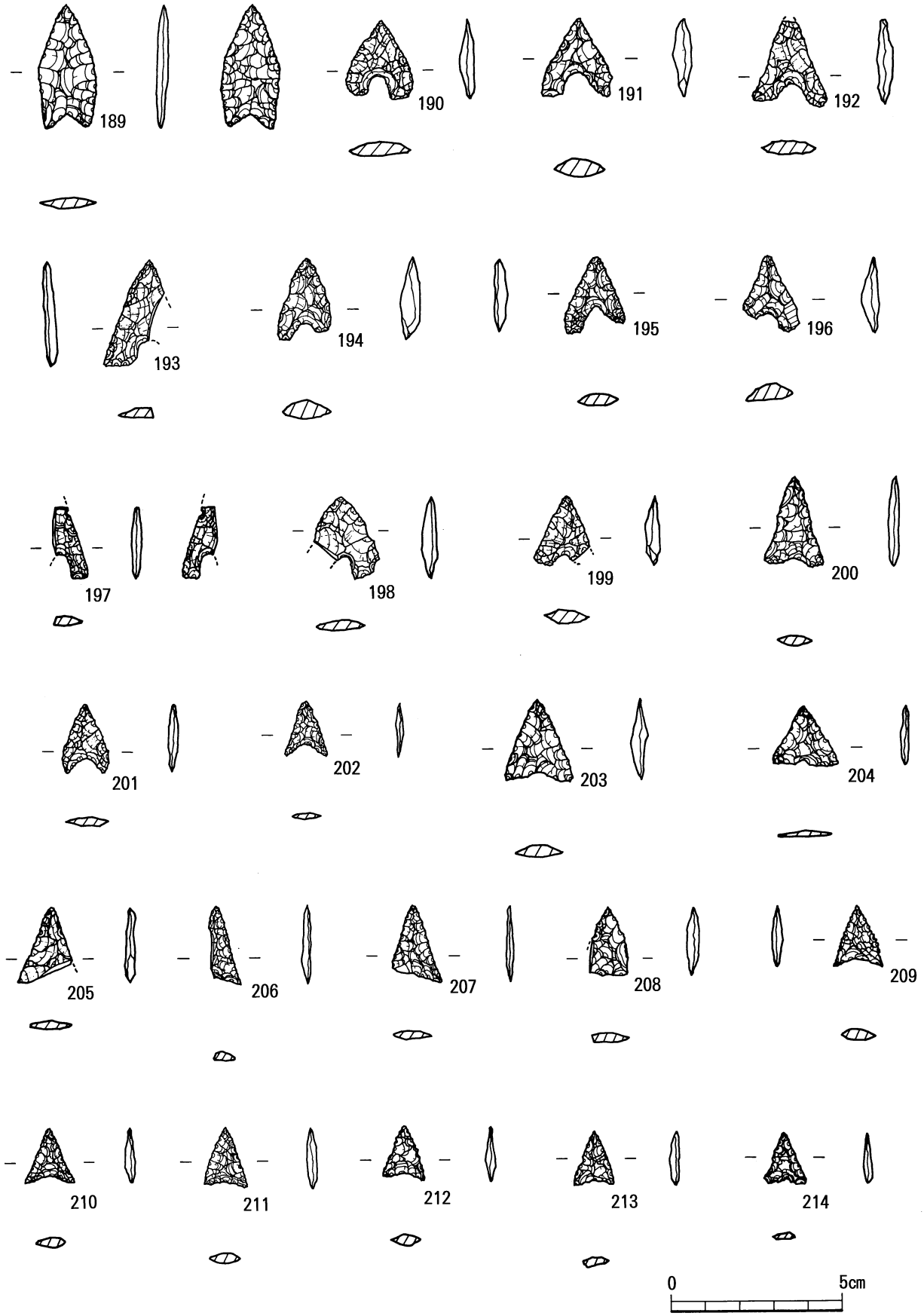
尖頭状石器は６点出土した。全てチャート製である。石鏃に近い形をとるが、石鏃に比べて大きく、重量も重い。235は先端が欠損しているものの、現存長38mmの大型二等辺三角形平基タイプである。236・237は正三角形平基タイプであり、先端を鋭く加工している。238・239は正三角形凸基タイプである。特に239は基部を舌部のように作りだしている。240は基部が欠損しているが、おそらく正三角形凸基タイプである。

削器（第27図241～249）

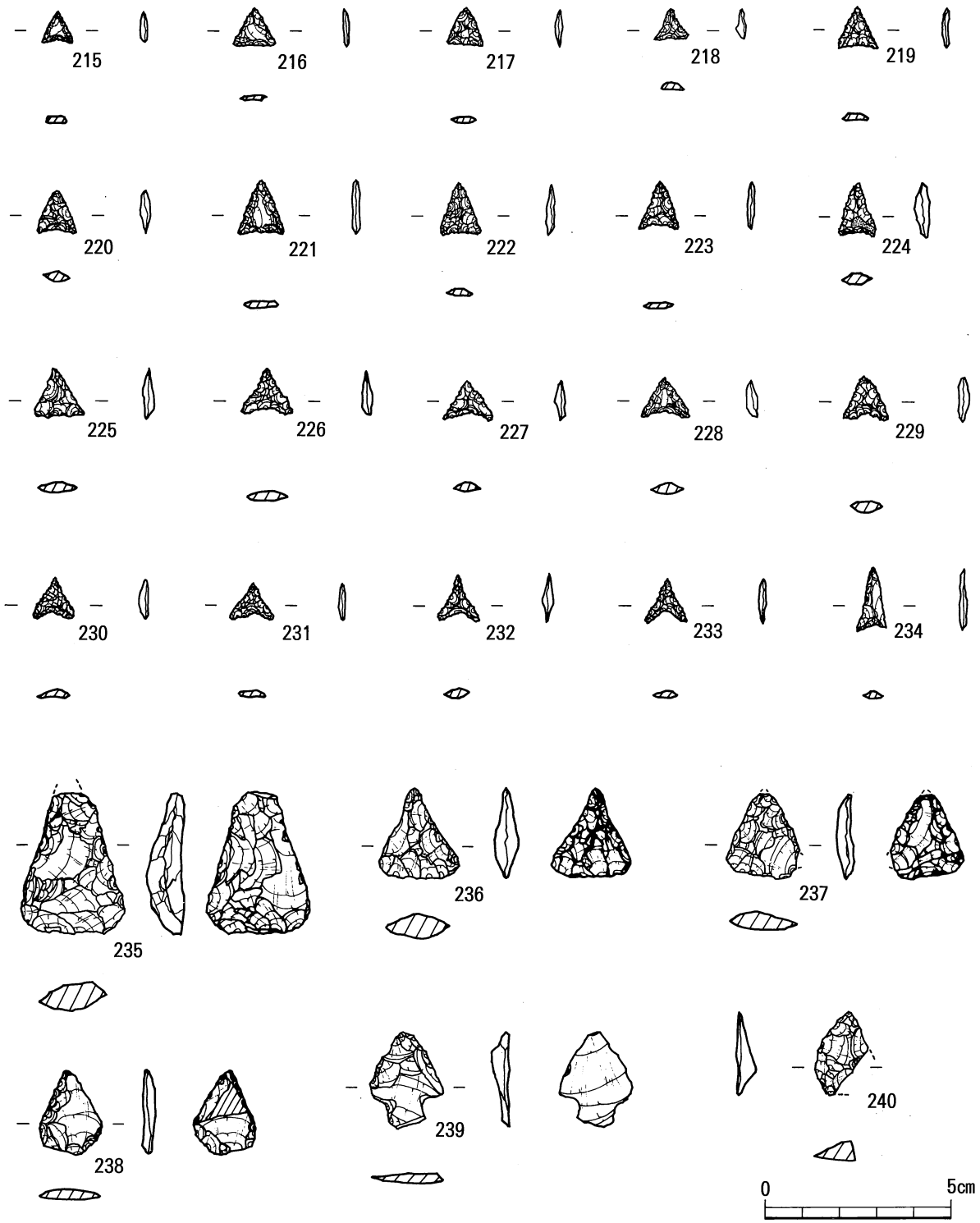
剥片の側縁部の一部に連続して加工を施したもので、９点出土した。241はチャート・244は黒曜石の縦長剥片を素材とし、両側縁辺に片面のみの加工を施している。242・243はチャートの縦長剥片を素材とし、両側縁辺に両面から明瞭な加工を施している。245はチャート製で、下側縁辺に両面から加工を施している。246は黒曜石製・247はチャート製で、下側縁辺に片面のみの加工を施している。248は赤色系のチャート製で、不定形剥片を上下両側縁辺に加工を施しているが、使用痕跡は下側縁のみである。249は黒曜石製で、不定形の剥片の上側を除く側縁全体を大きく打ち欠き整形することによって刃部を作りだしている。

石錐（第27図250・251）

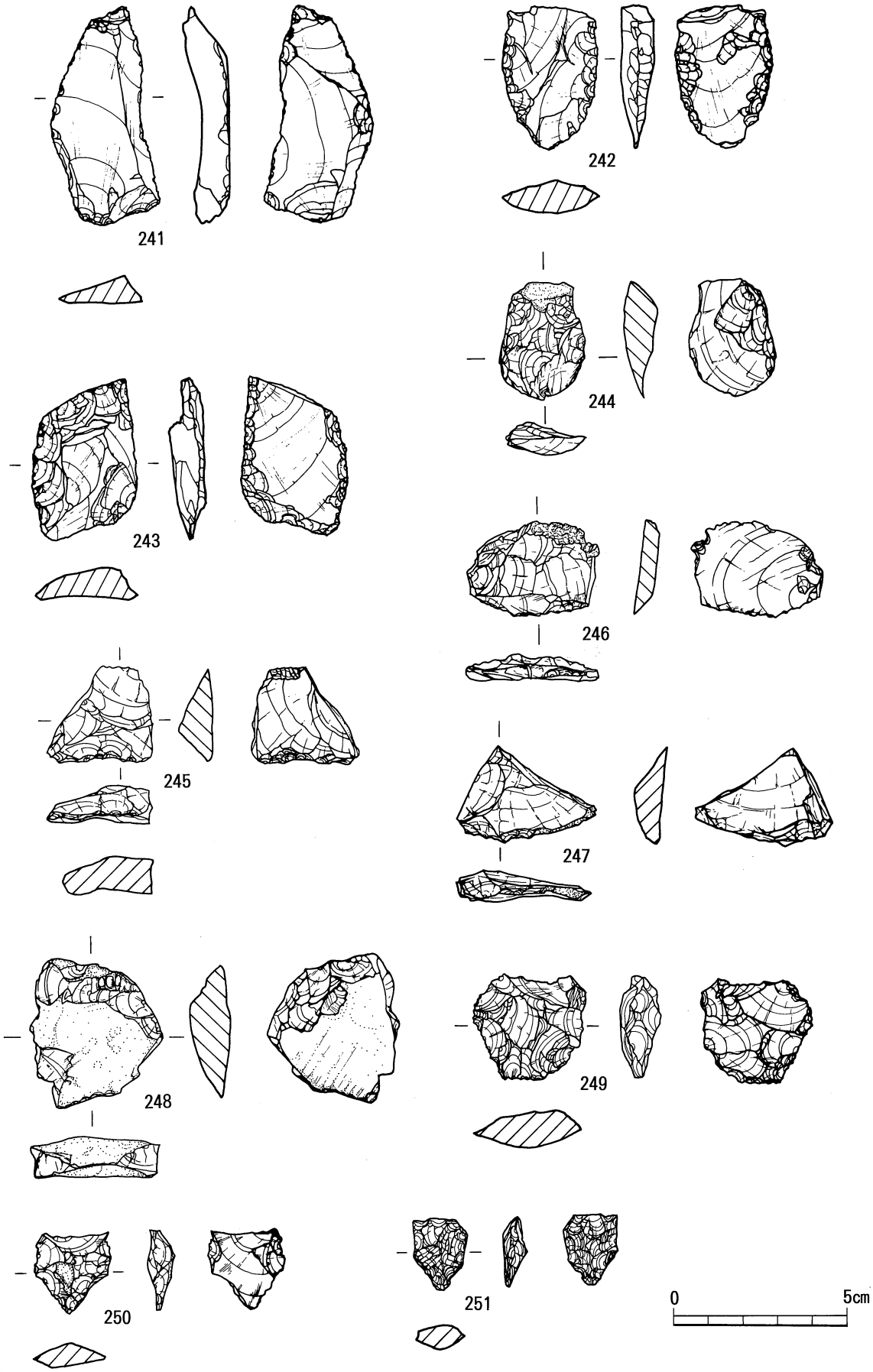
不定形の剥片の一端に加工調整を行ったもので、２点出土した。250、251ともに黒曜石製で、いずれも不定形剥片を素材とし、五角形に近い形に整えた後に、一端に丁寧な調整を加えて錐部を作りだしているが、251の両面に調整を行っているが、250は片面のみの調整である。



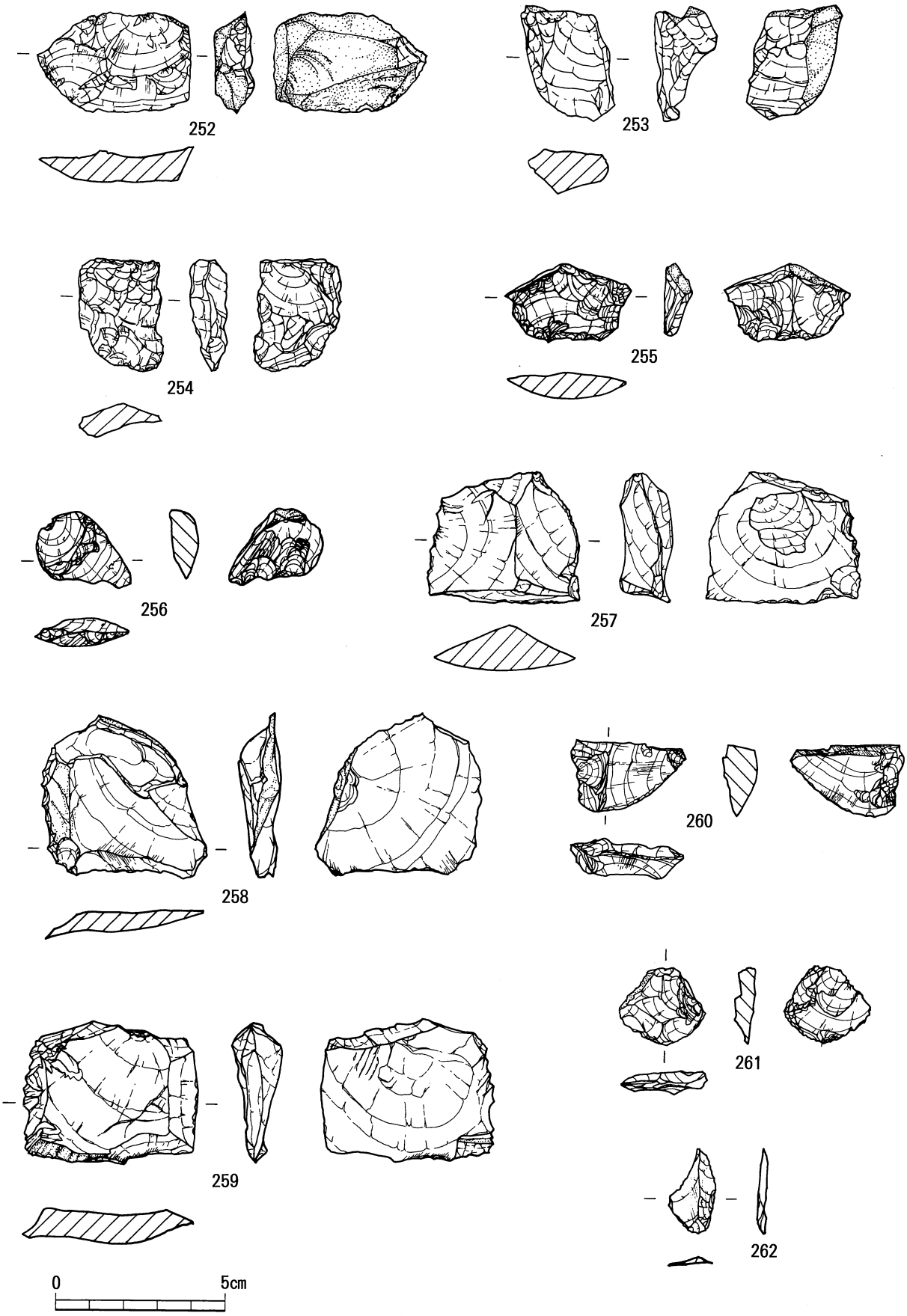
第25図　縄文時代早期石器 (1) (3／5)



第26図　縄文時代早期石器 (2) (3／5)



第27図　縄文時代早期石器 (3)（3／5）



第28図　縄文時代早期石器 (4) (3／5)

石核（第28図252～254）

石核は３点出土し、いずれも黒曜石製である。252は片面のみ利用で、一定方向ではなく不規則に剥離を行っている。253・254は不整形の剥片を表裏両面のほぼ全周にわたって剥離を行っている。

楔形石器（第28図255・256）

向かい合った縁辺部に階段状の対向する剥離痕跡が確認されるもので、２点出土した。255は、上端に打撃面を残した状態のチャート製不定形剥片素材で、両側縁から剥離を行い、下・両側縁にエッヂを作りだす。縦断面は楔形を、横断面はレンズ形をなす。256は黒曜石製不定形剥片素材で、両側縁とくに片側縁に集中した剥離を行い、下・両側縁にエッヂを作りだす。縦断面は楔形を、横断面はレンズ形をなす。

折断剥片（第28図257）

剥片を折断することによって使用面を作りだすもので、１点出土した。257はホルンフェルス製であり、先端部を折断しているが、先端部だけでなく両側縁辺両面にも使用痕をもつ。

使用痕のある剥片（第28図258～269）

剥片の側縁辺の一部に使用の痕跡が認められるもので、全部で12点出土した。258・259はホルンフェルス製不定形剥片の下部及び片側縁辺片面に使用の痕跡が見られる。260は黒曜石製横長剥片の下側縁辺両面に使用痕が見られる。261は黒曜石製不定形剥片の下側縁辺片面に使用痕が見られる。263は砂岩製横長剥片の下側縁辺片面に、刃こぼれのような使用痕が見られる。264・265は黒曜石製縦長剥片であり、264は片側縁辺両面に、265は片側縁辺片面に、使用痕が見られる。266・267は黒曜石製不定形剥片であり、266は両側縁辺両面に、267は下側縁辺両面に、使用痕が見られる。262・268・269はチャート製不定形剥片であり、262・268は片側縁辺片側に、269は両側縁辺片側に使用痕が見られる。

二次加工のある剥片（第29図270～273）

剥片の側縁の一部に未連続の加工を施したもの。全部で４点出土した。270はチャート製で、不定形剥片の下側縁両面に加工痕が見られる。271・273は黒曜石製で、不定形剥片の両側縁両面に加工痕が見られる。272は黒曜石製で、不定形剥片の片側縁片面のみに加工痕が見られる。

不明剥片（第29図274・275）

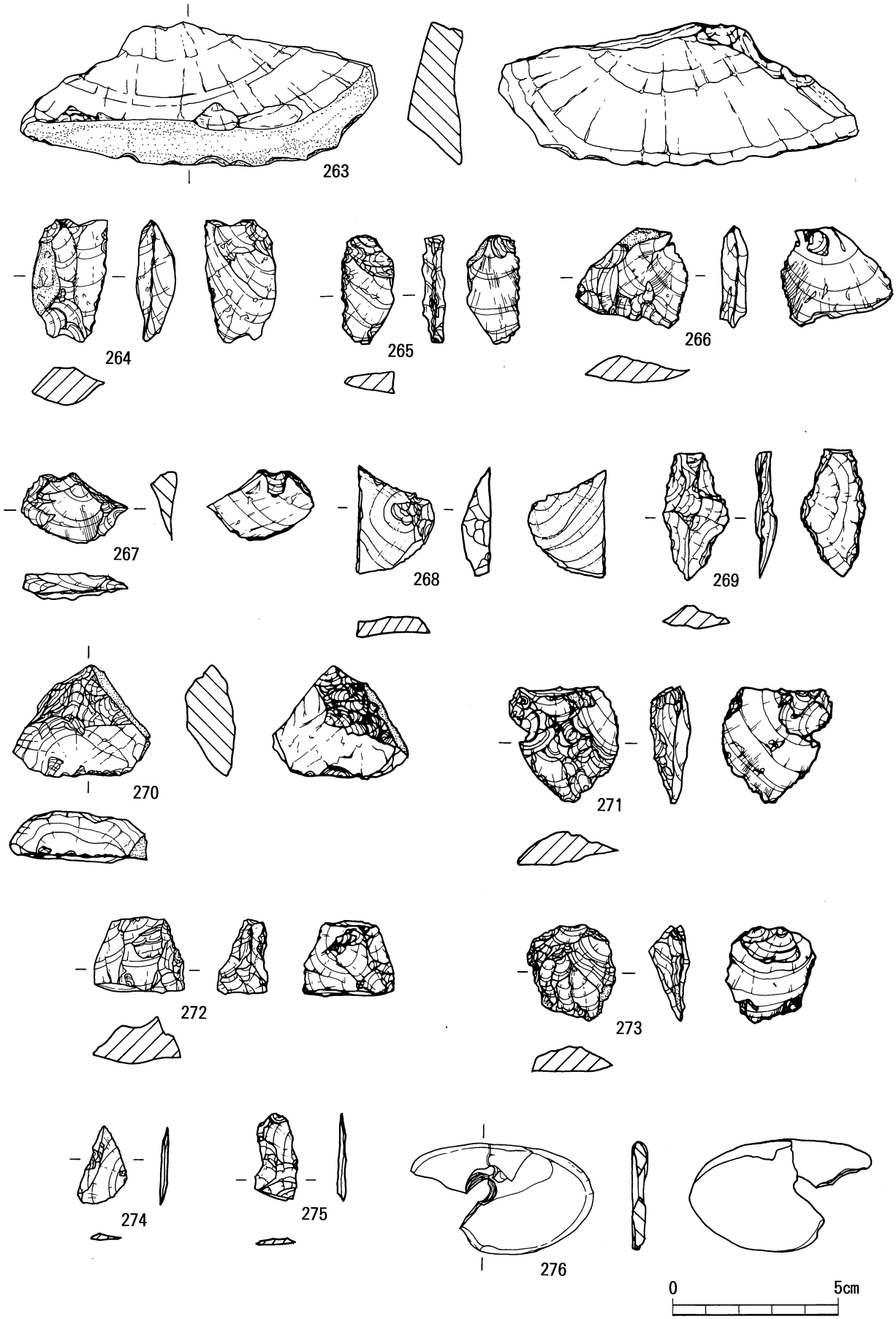
274は珪質岩製で、二等辺三角形状の剥片。特に意図的な加工は見られない。275はチャート製である。

不明楕円形石製品（第29図276）

276は粘板岩製である。１／４程の欠損と片面の剥落で完全な形でないが、残存状態から推定復元すると、長幅58mm（現存長は55mm）、短幅33mm、厚さ４mmの扁平楕円形をなす。中心部付近に直径約７mmの穿孔が認められる。穿孔部から続く切れ目が存在するようにも見えるが、欠損のため判断しづらい。耳飾りなどの垂飾品の可能性がある。

局部磨製石斧（第30図277）

１点出土した。277は石材がホルンフェルスで、基部から刃部にかけてほぼ同じ幅である。基部から胴部にかけて大きく剥離を行っている。刃部は、両面を研磨することにより蛤刃形に作りだしている。また、刃部には、全体的に研磨痕とは別に磨痕が、端部には刃こぼれらしき使用痕が確認できる。



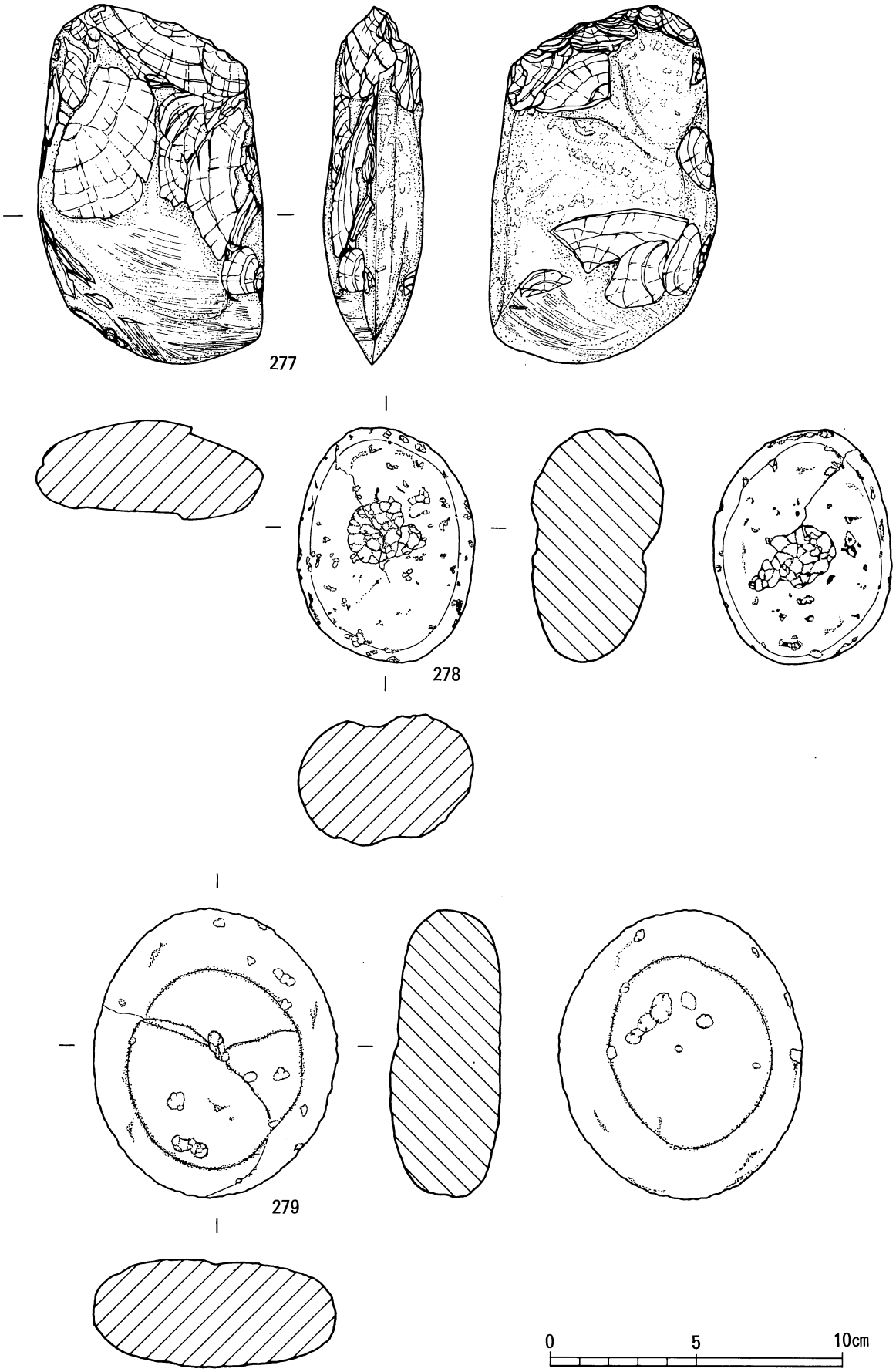
第29図　縄文時代早期石器 (5)（3／5）

磨石・敲石（第30図278～第33図293）

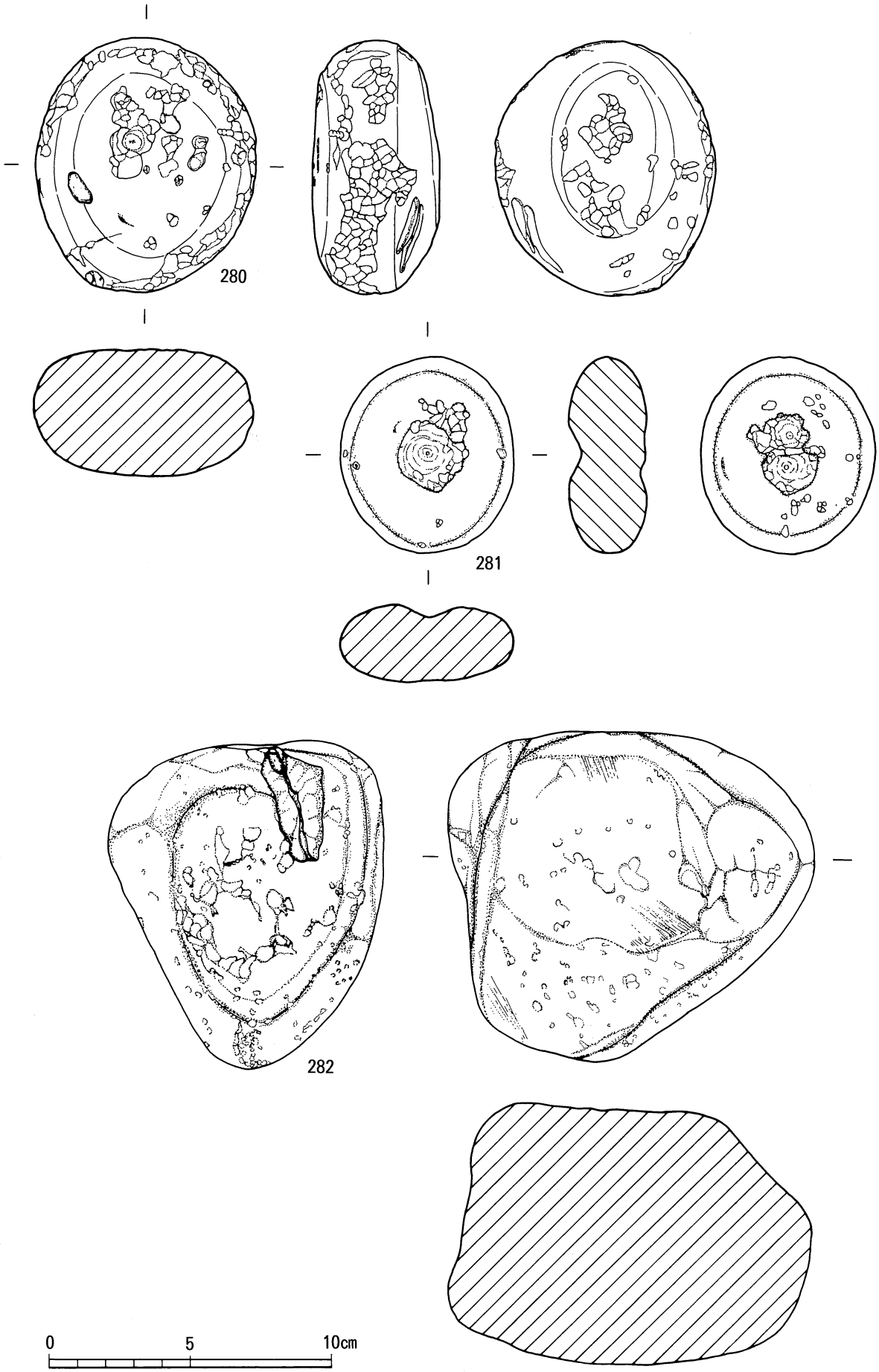
合計16点出土した。使用痕として敲打痕をもつもの、磨痕をもつもの、敲打痕と磨痕の両方もつものがある。、石材は、278・279・284が凝灰岩、280・283・285・291が尾鈴山系酸性凝灰岩、281・286～290・292・293が砂岩、282が輝石安山岩である。278・279は楕円形を呈し、風化のため判断しがたい部分もあるが、278は両面中央部と両側面に、279はさほど顕著ではないが両面全体に、敲打による凹部が認められる。280は楕円形を呈し、両面中心部と両側面を中心に敲打痕が認められる。281も楕円形を呈し、両面中心部に顕著な敲打痕が確認できる。282は他の敲石に比べ石が大きく、底部に敲打痕をもつ。底部には使用時のものか判断しづらいが、欠損部分が確認される。283・286は片側面に、284は片面中心部付近に、偏った敲打痕が認められる。285は欠損しているものの楕円形を呈していたと思われ、側面に敲打痕と磨痕が同じ箇所に認められる。287は棒状を呈し、上下両端部両面に敲打痕が認められる。288は片面中心部に敲打痕を、289は片側面に磨痕を、293は顕著ではないが側面に敲打痕を、それぞれ有する。この３点は、使用痕跡のある面の裏側を打ち欠いており、使用後の欠損の可能性もあるが、おそらく握り易いように調整したと考えられる。いずれも欠損しているが、楕円形を呈していたと思われる。290～292はそれぞれ欠損しているが、290は片面中心部に敲打痕が、291は側面に敲打痕が、292は端部に磨痕が認められる。

台石（第34図294～第35図306）

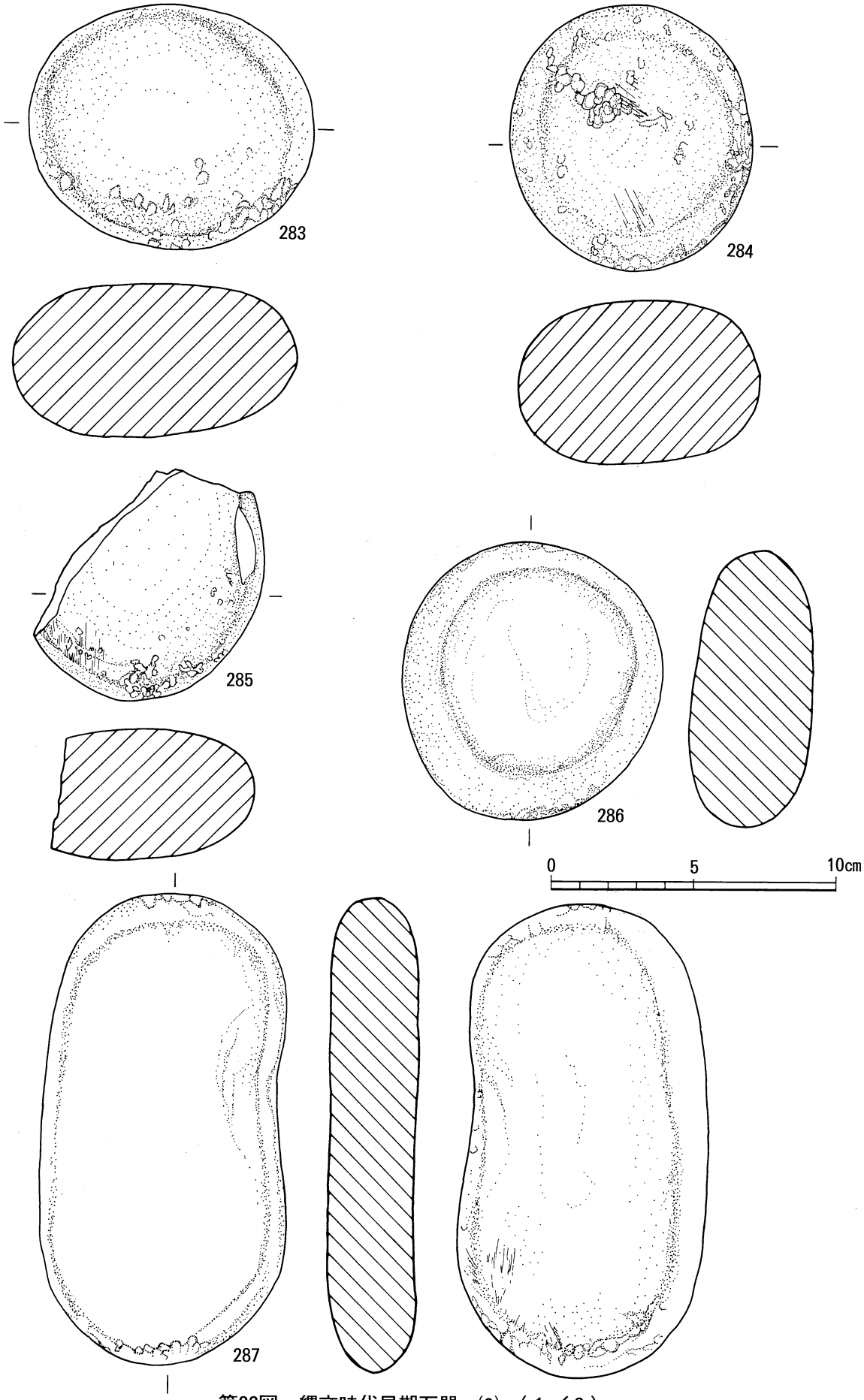
13点出土した。使用痕として敲打痕（剥離痕も含む）をもつもの、磨痕をもつもの、敲打痕と磨痕の両方をもつものがある。石材は、294～301・304～306が輝石安山岩、302・303は凝灰岩である。294は平坦部に敲打による剥離痕が顕著である。295は平坦部に敲打による剥離痕、及び磨痕が顕著に認められる。296・299は平坦部に顕著ではないが磨痕が、297は平坦部一面に敲打痕が認められる。298は平坦部中心ではなく、側縁近くに磨痕が確認される。300は、平坦部中心と、側縁近くに敲打による剥離痕が顕著ではないが確認される。301は前述したように２号配石状遺構（第７図２参照）に用いられていたものである。表面の中心は窪んでおり、石皿にも見えるが、磨痕は確認されず、敲打痕のみが確認される。いずれにしても廃棄後、配石状遺構に転用したものだと考えられる。302・303は僅かではあるが磨痕が見られる。303の平坦部にある窪みは磨痕ではなく、自然のものである。304～306は敲打による剥離痕が認められる。



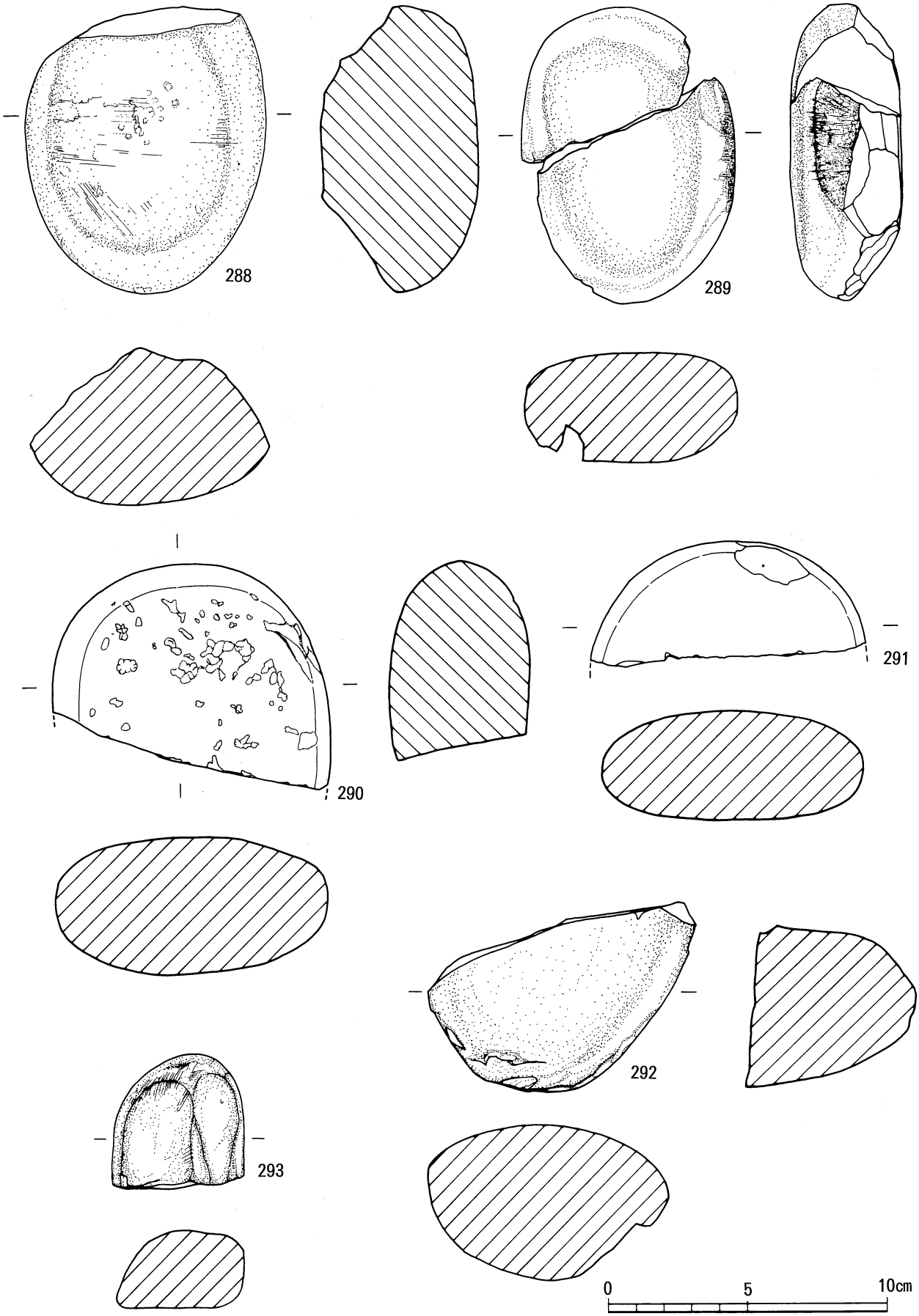
第30図　縄文時代早期石器 (6) (1／2)



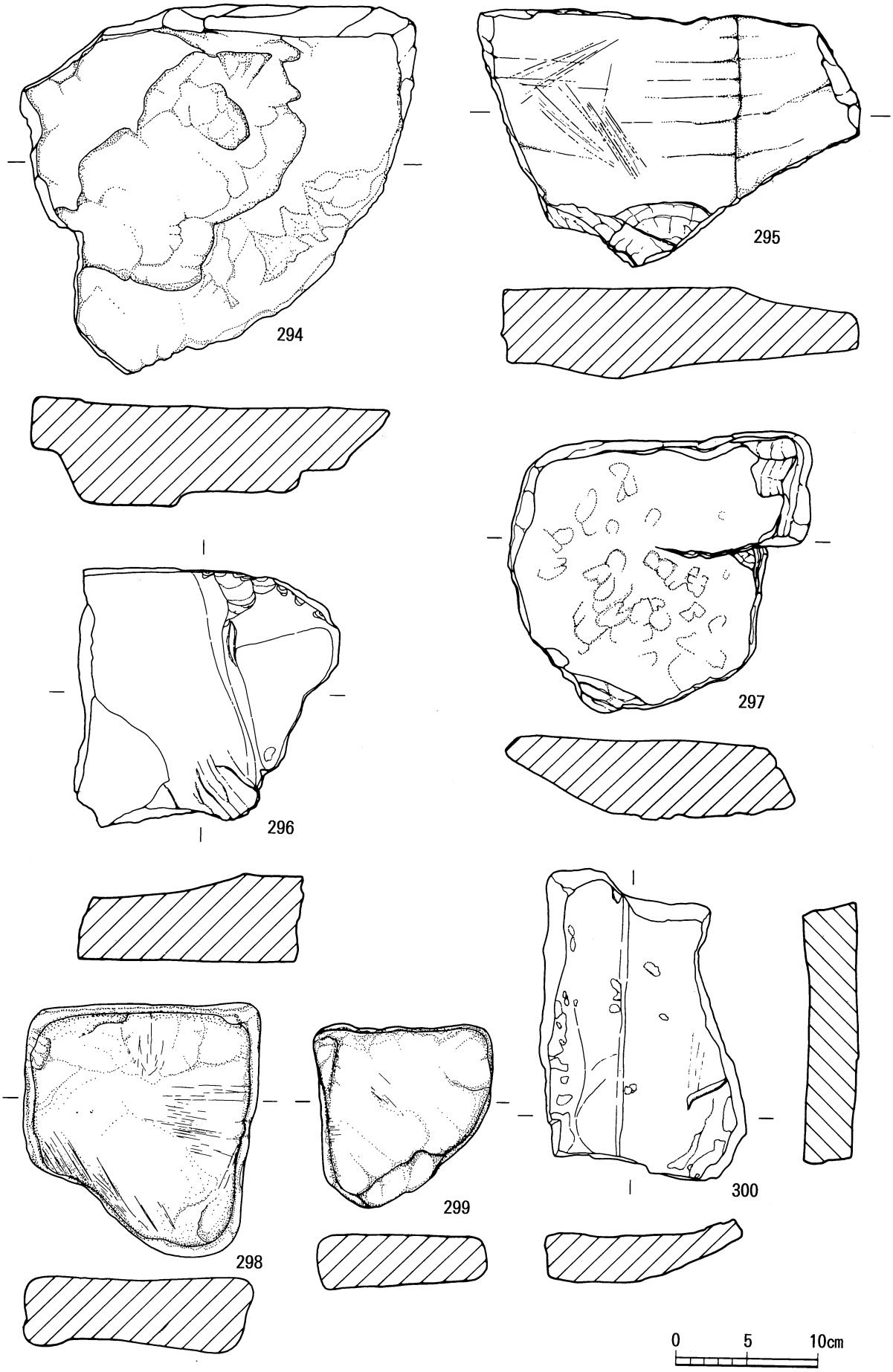
第31図　縄文時代早期土器 (7) (1／2)



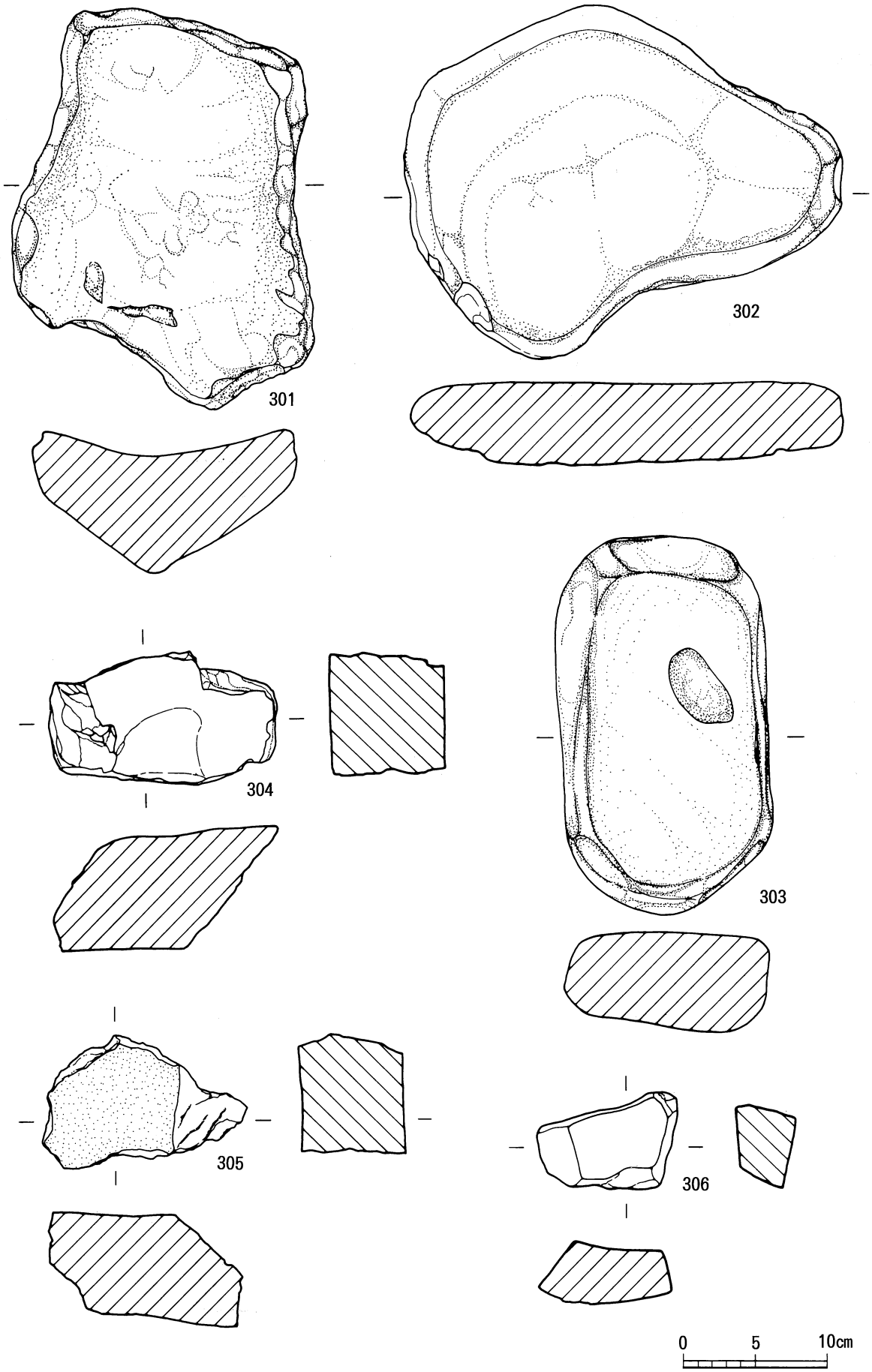
第32図　縄文時代早期石器 (8) (1／2)



第33図　縄文時代早期石器 (9) (1／2)



第34図　縄文時代早期石器 ⑽ （1／4）



第35図　縄文時代早期石器 (11) （1／4）

・縄文時代前期～後期の遺物（第37図）

第Ⅲ層中より、縄文時代の土器・石器が出土した。

土器（第37図307～330）

縄文時代前期・後期の土器片が出土した。307～329は、短沈線による施文が主体であり、縄文時代前期の曽畑式土器の系譜をひくと考えられる。330は、精製磨研土器であり、縄文時代後期の西平式と考えられる。

307～312は深鉢の口縁部である。外器面は、斜方向の沈線と横方向の短沈線を施す。内器面は、横方向のナデ後横方向の短沈線を施す。口唇部は平坦で、斜・横位の刻目を施す。307～309・312は、やや外反した口縁に紐状の貼付突帯をもつ。310・311は。横方向の沈線のみである。

313～329は深鉢の胴部である。313～317は、外器面に縦・斜方向の短沈線と横方向の沈線を施す。314と316は同一個体である。319・320は、紐状貼付突帯をもち、突帯付近を沿う形で刺突文を施す。外器面は、縦・横・斜方向の沈線を施す。318・322・324・326は、外器面に横・斜方向の沈線を施す。323・325・327・328は、連続山形文を重ねた複合文を施す。

330は深鉢口縁部である。波状口縁で、波頂部に逆Ｓ字状の沈線文を施す。口縁部の屈曲部には、横位の沈線を施す。

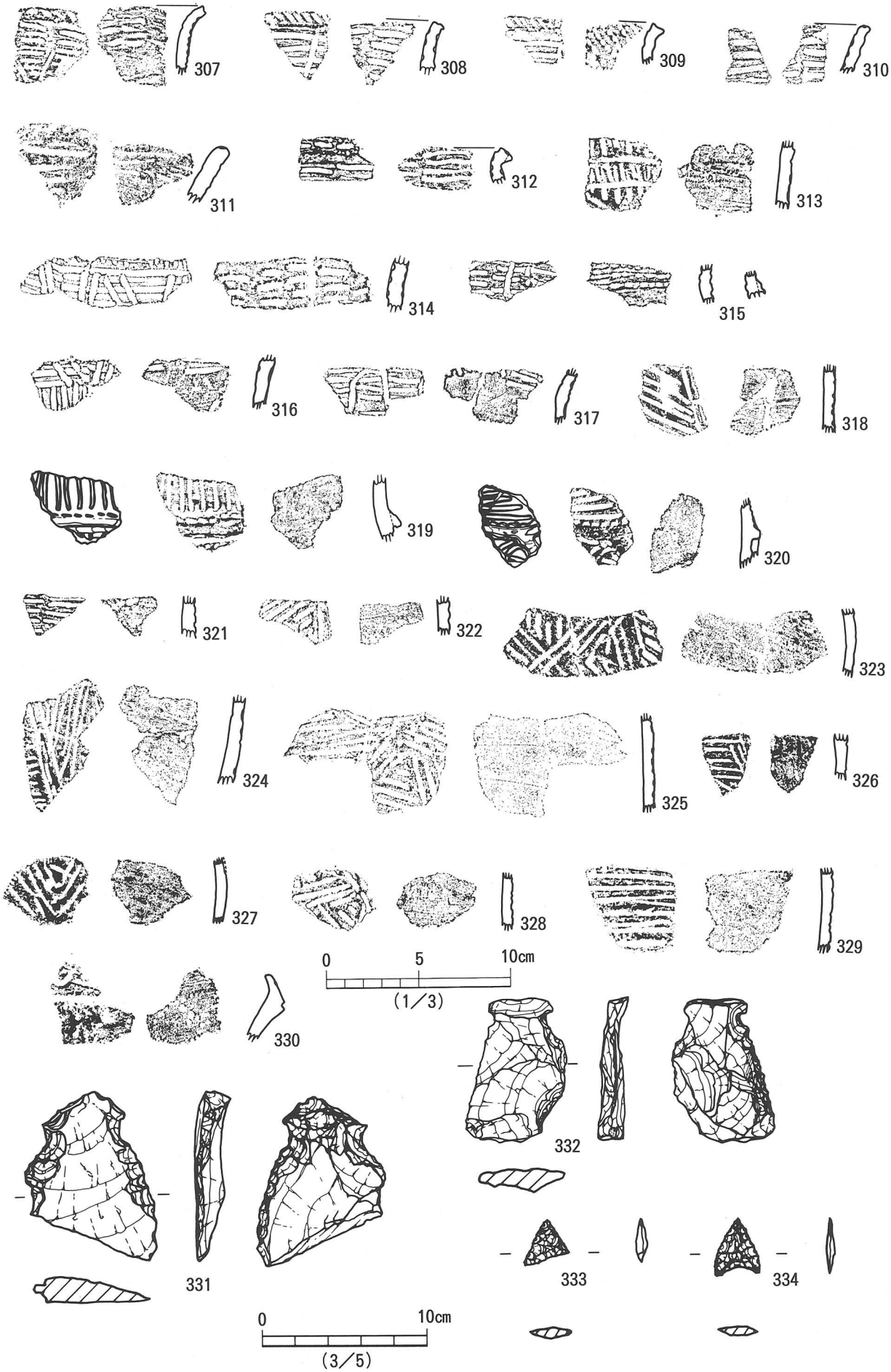
石器（第37図331～334）

石匙２点と石鏃２点が出土した。

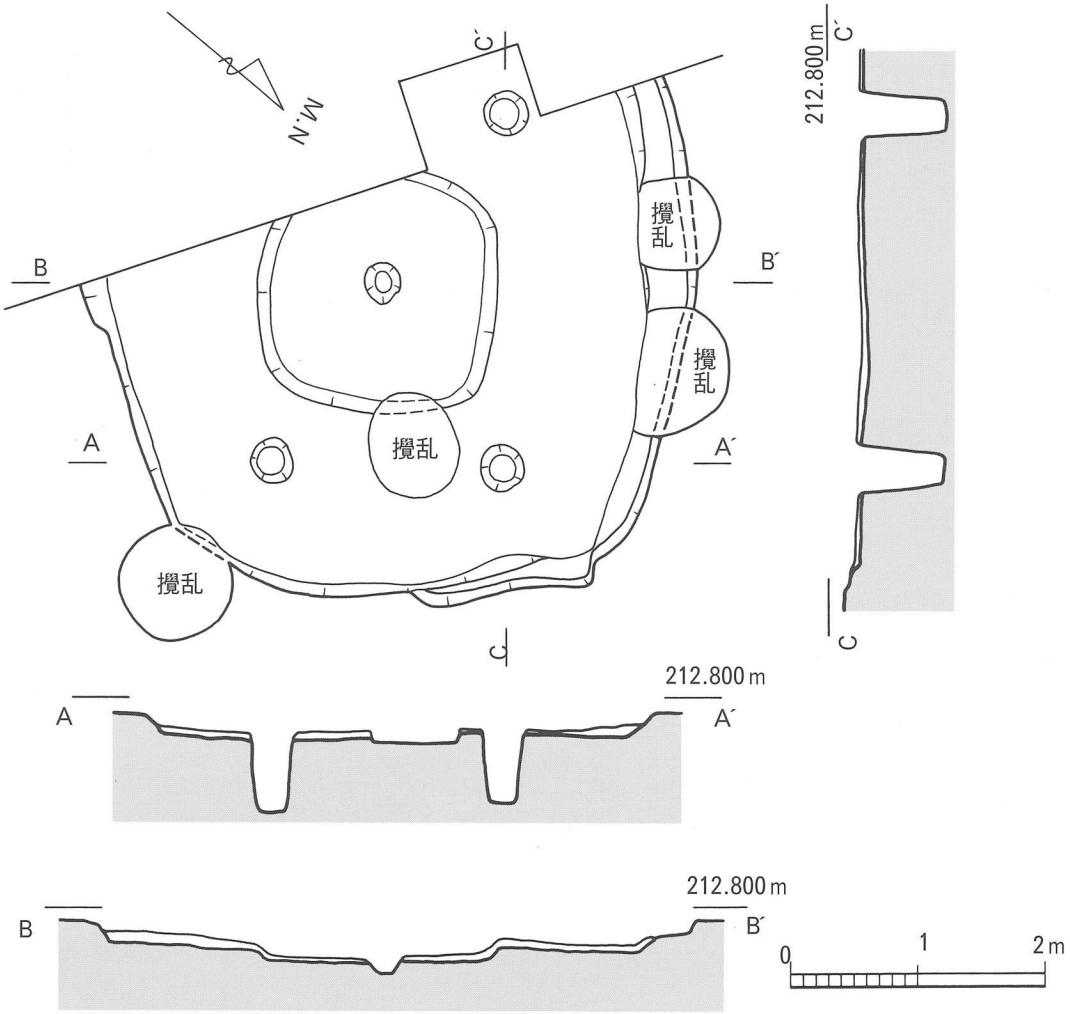
331・332は珪質岩製の石匙である。両方とも欠損しているが、打面下方の両側辺を加工して、つまみ部を作りだしている。片側縁片面全体に加工を施す。

333・334は石鏃である。333は黒曜石製で、基部の一部が欠損しているが、小型正三角形無茎凹基である。334は黒曜石製で、両側縁が緩やかに湾曲する二等辺三角形無茎凹基である。

第36図　第Ⅲ層検出遺構物分布図（S＝１／300）



第37図　縄文時代前期・後期　土器（1／3）・石器（3／5）



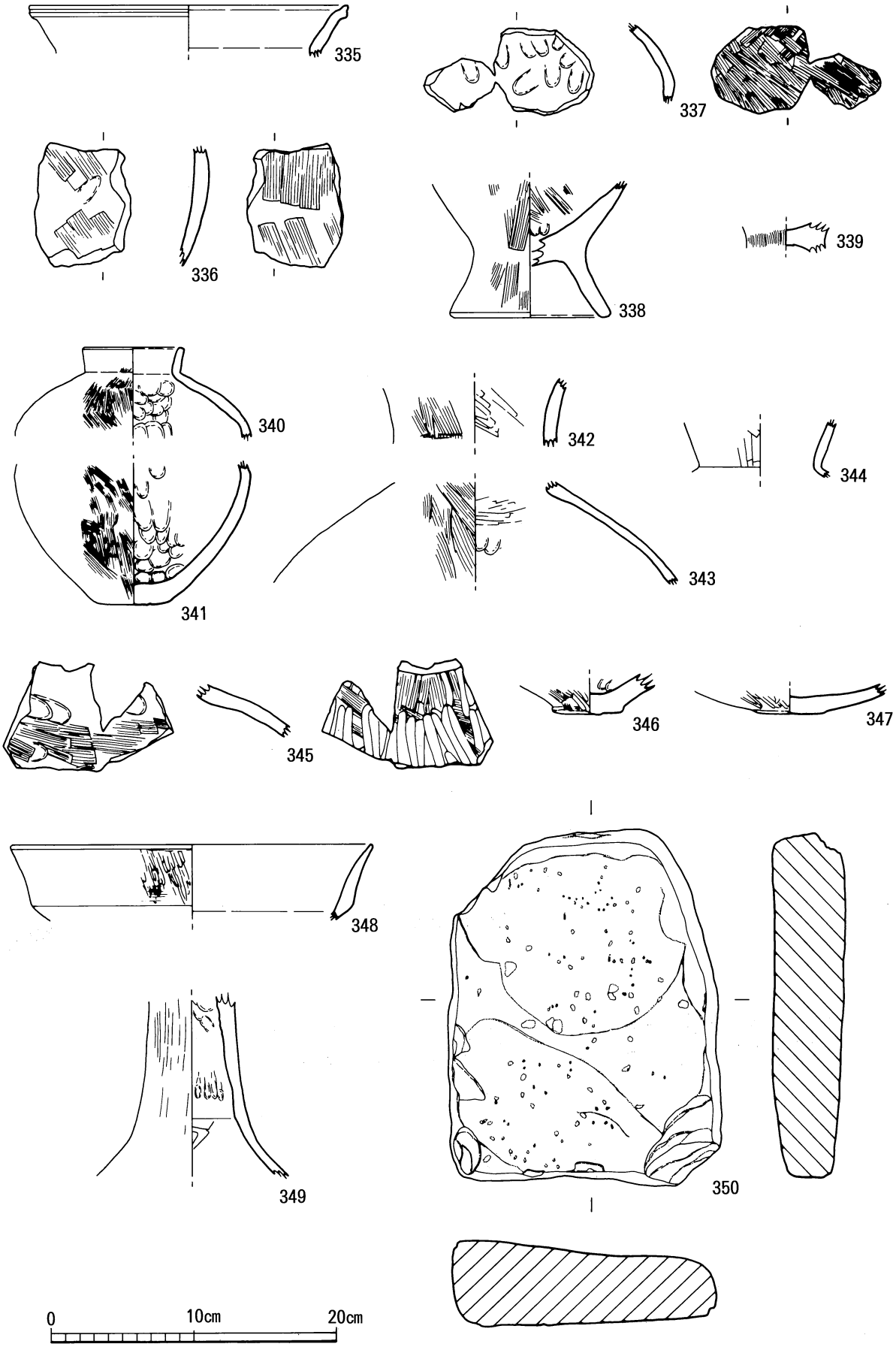
第38図　１号竪穴住居跡　（１／60）

第２節　弥生時代の遺構と遺物

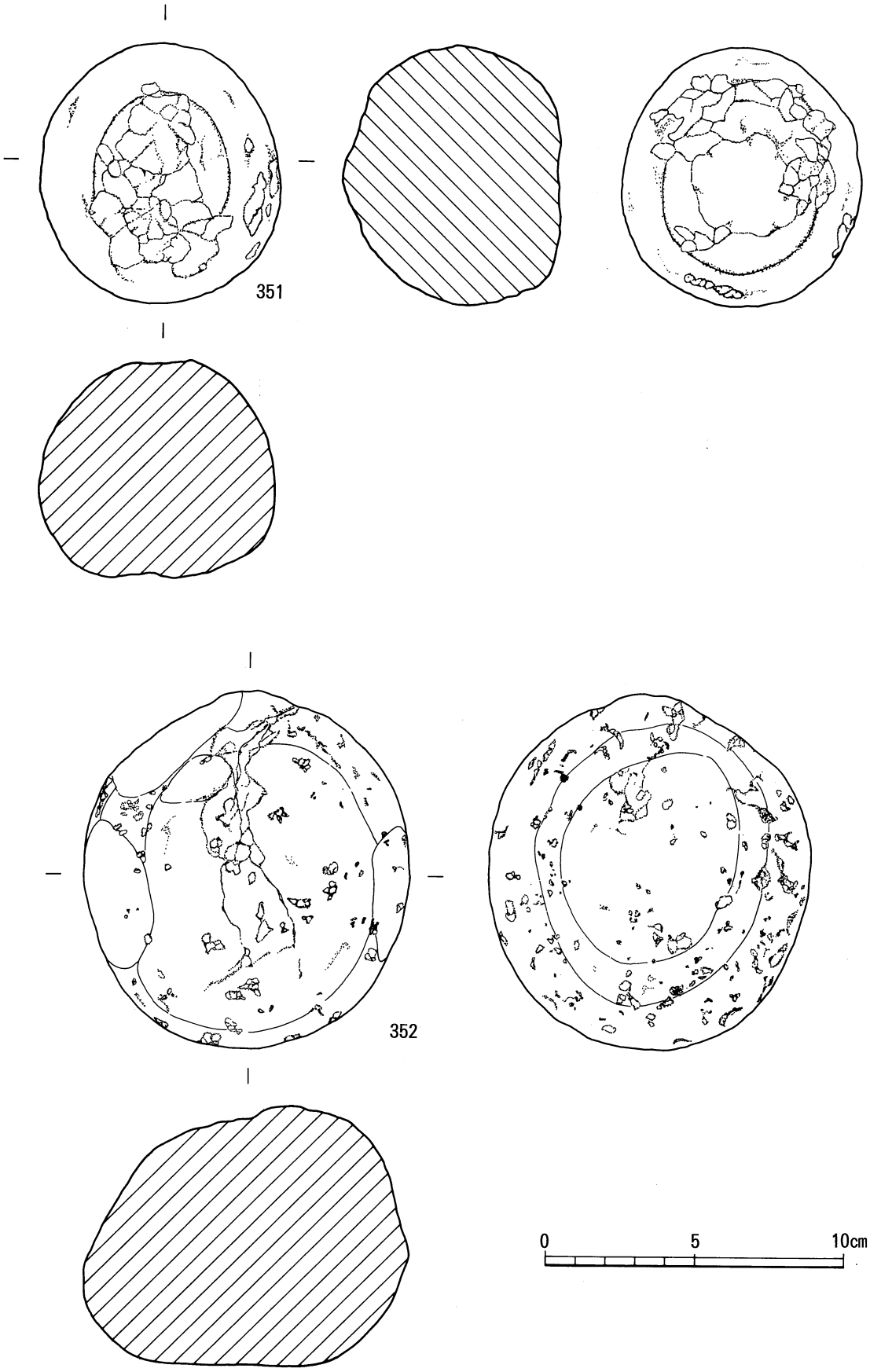
竪穴住居跡２基が検出され、土器・石器・鉄器が出土している。

ＳＡ１（第38～40図）

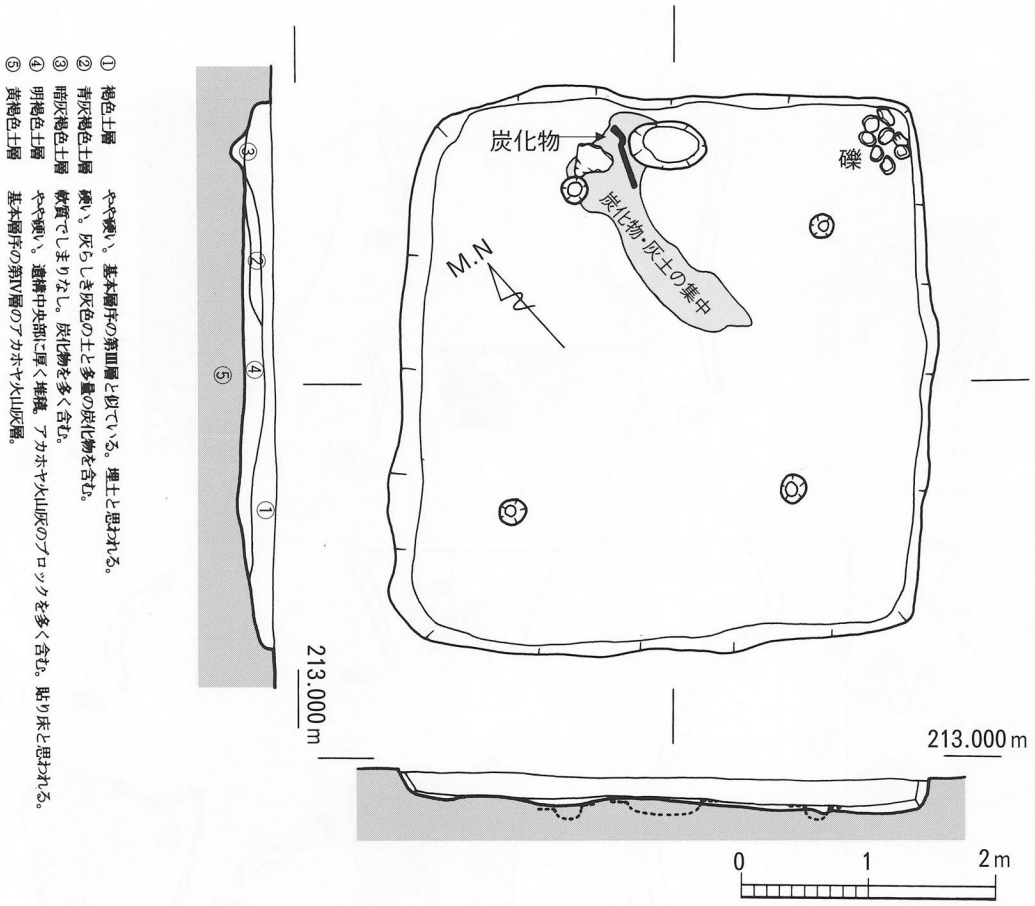
調査区南縁の８Ｆ区に検出した。一辺３ｍ強の隅丸方形プランで、床面中央に方形の土坑を有し、周囲がベッド状となる。遺構の依存状況は悪く、検出面からの深さは約20cmである。床面は、アカホヤ火山灰と黒色土の混土による貼り床で、柱穴は貼り床を除去した段階で確認した。主柱穴は方形配置の４本柱で、１基は調査区外にあり検出していない。床面中央の小ピットは、掘り形も浅く柱穴とは見なし難い。焼土・炉などの火処は不明である。遺物は検出面付近で土器の小片が出土した。床面から浮いた状態ではあるものの、遺構の残存状態が悪いため、レベル的には住居埋土の下位に位置し、遺構と遺物の時期差はさほど大きくはないと思われる。



第39図　1号竪穴住居跡出土土器・石器 (1) (1／4)



第40図　1号竪穴住居跡出土土器・石器 (2) (1／2)



第41図　2号竪穴住居跡（1／60）

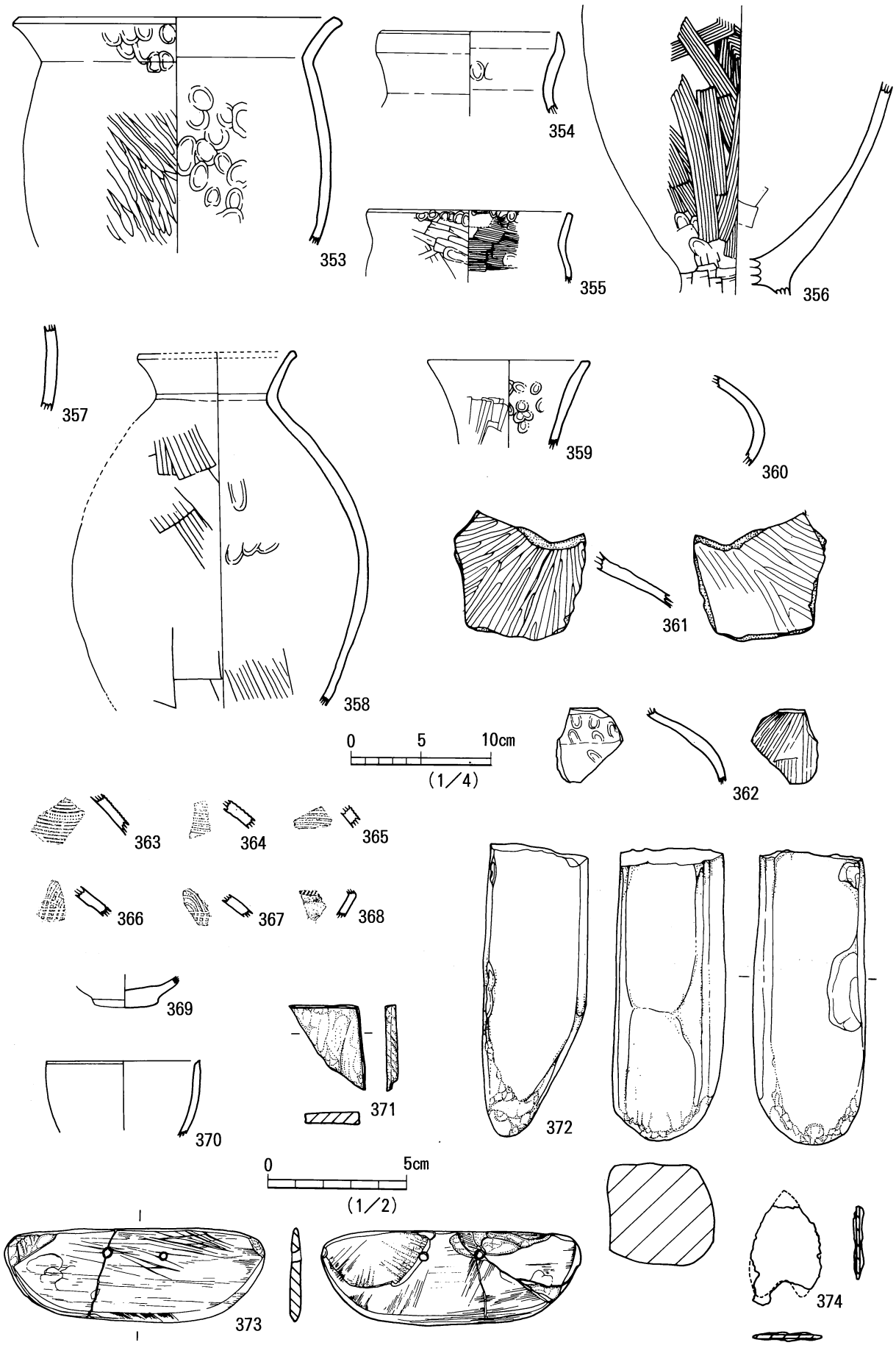
335～339は甕である。335は「く」字形に屈曲する口縁部で、端部は受け口状に小さく屈曲する。336・337の胴部は、外器面に密なハケ目が見られる。338・339は脚付きの底部で、「ハ」字状に外に張り出す。340 ～347は壺である。340・341は同一個体で、短い直口縁に球形の胴部、しっかりとした平底を持つ。調整は粗いハケ目である。342・343は大型壺の同一個体で、外反気味の口縁部と肩張りのない胴部である。355は肩部で、ハケ目の後ミガキを施す。346・347は底部で、小さく突出するボタン状の平底を持つ。348・349は高坏で、同一個体である。外反気味で短い坏部口縁と、円柱状に長く延びる脚、明瞭な稜を持たずに滑らかに開く裾部である。

350は台石、351・352は敲石である。350・351は輝石安山岩、352は凝灰岩で、敲打痕が明瞭に認められる。

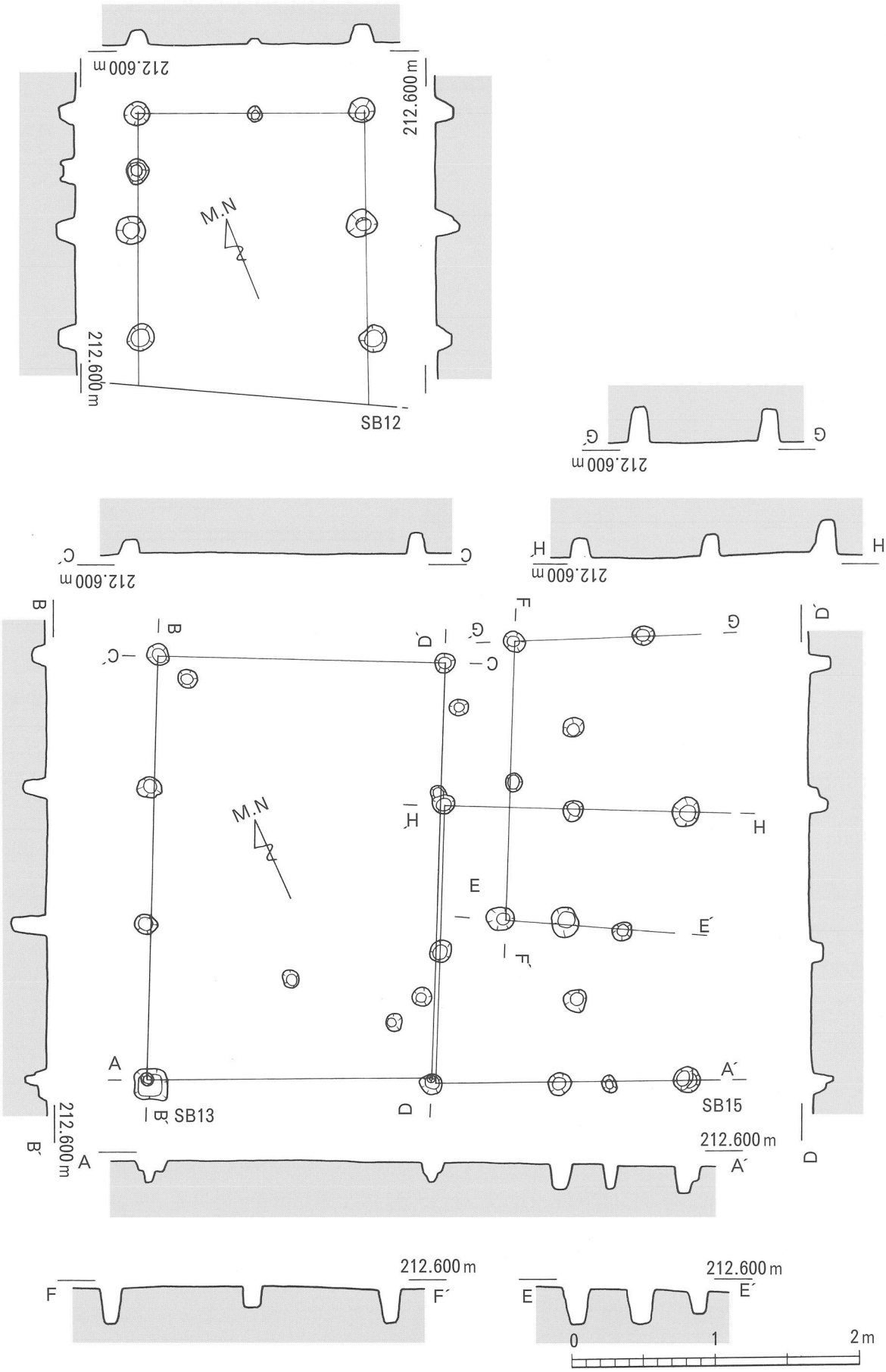
ＳＡ２（第41･42図）

調査区中央部からやや西寄りの６Ｅ区で検出された。一辺約4.2mの隅丸方形プランで、第Ⅲ層から第Ⅳ層を掘り込んでいる。床面は、アカホヤ火山灰土を僅かに含む褐色土の貼り床である。主柱穴は貼り床段階で確認し、方形配置の４本柱である。北辺中央部に、長径60cm短径40cmの楕円形の掘り込みが確認された。この掘り込みの西側には集中した炭水化物の広がりと、長さ60cmの木炭片が確認されたことから、炉跡などの火処の可能性がある。また、北東隅に拳大の円礫が10数個、また周辺に土器の集中が確認され、作業の場などの空間利用が想定される。遺物はレベル的にほとんどが床面直上から出土した。

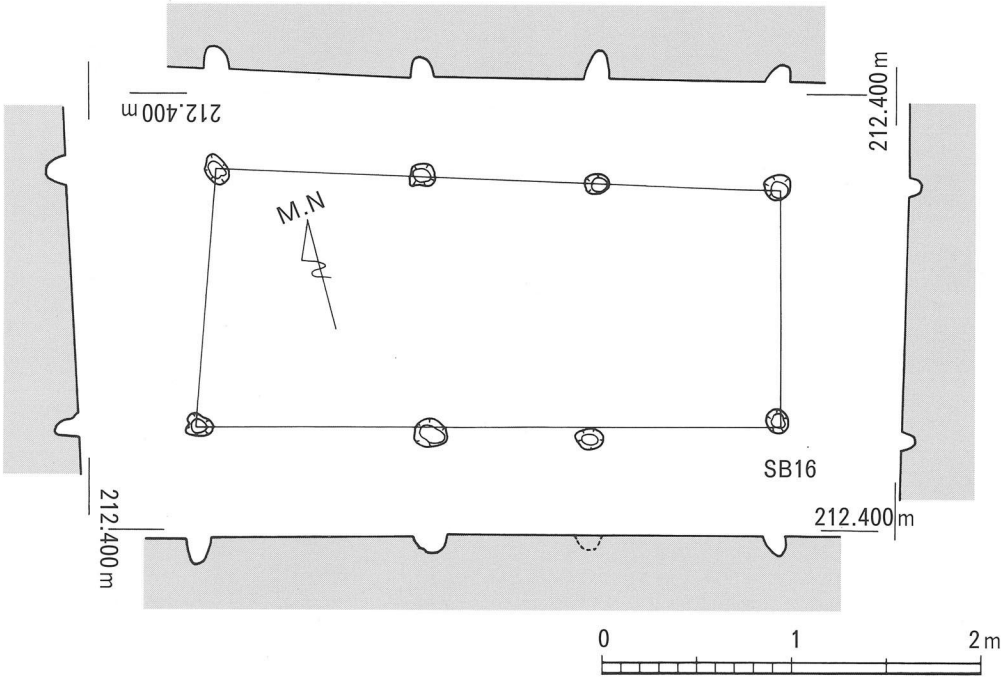
353～357は甕である。353はく字形に屈曲する口縁をもつ。356は上げ底をもつ底部である。358～369



第42図　2号竪穴住居跡出土土器（1／4）・石器（1／2）・鉄器（1／2）



第43図　掘立柱建物跡　(1)



第44図　掘立柱建物跡（2）（1／40）

362は肩部で、外器面にミガキを施す。363～368は、いずれも免田式土器の長頸壺の胴部であり、重孤文が施してある。369は小さく突出したボタン状の平底をもつ底部である。壺の底部だと考えられる。370は鉢で、ハケ目の後ナデを施す。371は粘板岩製、372はホルンフェルス製の砥石である。373は粘板岩製の石庖丁である。374は欠損部分が多いが、三角形両脚式の無茎鉄鏃だと考えられる。

第３節　その他の遺構と遺物

時期を限定し得ない遺構として、掘立柱建物５棟と溝状遺構３条を検出した。また、遺構に伴わない遺物が若干出土している。

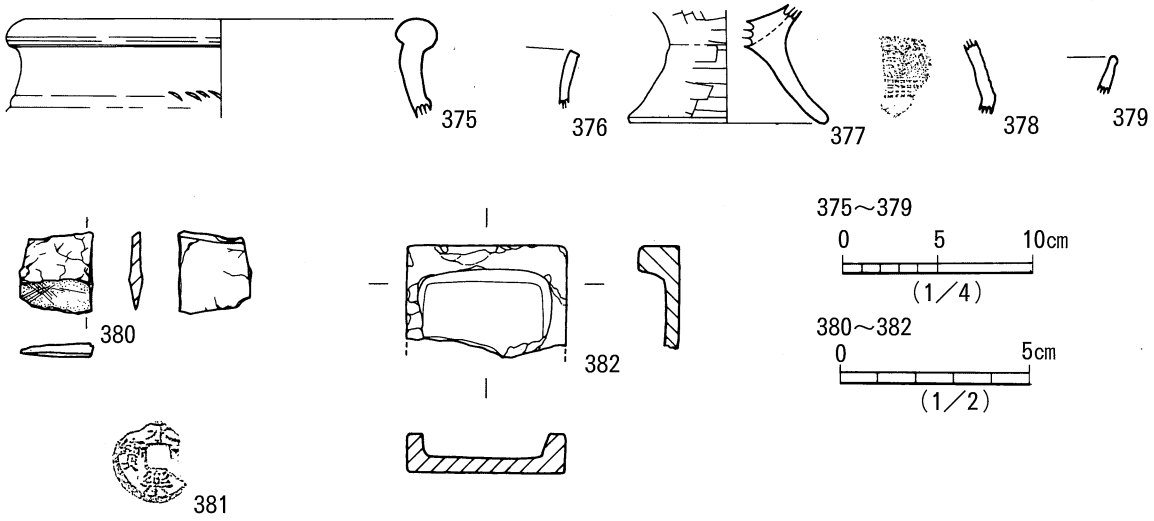
・掘立柱建物

ＳＢ12（第43図上）

ＳＢ12は、調査区南縁に検出された。南の調査区外に延びており、現状で桁行３間以上・梁行２間である。棟方位はN-22°-Eで、柱間の平均は157cm である。

ＳＢ13～15（第43図下）

ＳＢ13～15は、調査区南東隅に重複して検出された。ＳＢ13は、３×１間で、桁行柱間は平均で194cm、梁行は397cmである。棟方位はN-26°-Eである。ＳＢ14は、東側調査区外に延びており、現状で桁行２間以上・梁行２間である。棟方位はN-63°-Wで、柱間の平均は桁行で172cm、梁行で194cmである。ＳＢ15は、ＳＢ14同様調査区外に延びる。ＳＢ13と柱穴の一部（３基）が重複しており、本来的にＬ字形の平面形を持つ同一の建物であった可能性も否定できない。棟方位はＳＢ13に直交するN-64°-Wで、柱間の平均は桁行で171cm、梁行で190cmである。



第45図　表土・包含層出土遺物　（375～379は１／４、380～382は１／２）

ＳＢ16（第44図）

ＳＢ16は、調査区北側に検出された。３×１間で梁行は平均で133cm、桁行306cmである。梁行の柱間の平均は99cmである。棟方位N-18°-Wである。

・溝状遺構（第36図）

溝状遺構は全部で３条検出された。ＳＥ１は幅約70cm、深さ約20cmで調査区を南北に縦断する形で検出された。ＳＥ２はＳＥ１平行する形で幅約160cm、深さ約35cmである。ＳＥ３はＳＥ２に付属する溝である。いずれも第Ⅱ～Ⅲ層の面で検出された。年代については不明である。

・表土・包含層出土の遺物（第45図）

375は弥生土器の甕の口縁部である。口縁部は玉縁状をなし、口縁部には紐状の貼付突帯と爪痕が認められる。

376は小破片で風化が著しく詳細は不明であるが、弥生土器の甕の口縁部だと考えられる。

377は弥生土器の口縁部であるが、小破片で外器面が黒変しており器種等の詳細は不明である。

378は免田式長頸壺の胴部である。外器面は少し風化しているが、「く」の字形に屈曲した上半分に上向きの重弧文と横線文が認められる。

379は弥生土器脚付き甕の底部である。「ハ」の字状に外に張り出す。工具によるナデをほどこしている。

380は砂岩製の石器である。欠損しており器種については判別し難いが、稜線を設けてある面に磨痕が確認でき、磨製石器の一種だと考えられる。

381は貨幣で、永楽通宝である。裏面は剥落が著しく不明である。

382は石製硯である。端正な長方形の造りで、幅4.2cm 、墨溜まり深７mmである。

第Ⅳ章　自然科学分析の結果

第１節　内屋敷遺跡の土層とテフラ

株式会社 古環境研究所

１．はじめに

宮崎県中南部の火山灰土中には、霧島火山や桜島火山などから噴出したテフラが認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡において求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで年代の不明な土層の認められた内屋敷遺跡において地質調査と屈折率測定を行い、示標テフラの層位を求めて、土層の形成年代に関する資料を収集することになった。調査の対象となった地点は、9-Iグリッドである。

２．土層の層序

9-Iグリッドでは、下位より褐色スコリア混じり黄褐色土（層厚20cm以上，スコリアの最大径８mm，ⅩⅨ層）、灰色がかった褐色土（層厚11cm，ⅩⅧ層）、灰褐色土（層厚11cm，ⅩⅦ層）、褐色がかった灰色土（層厚４cm，ⅩⅥ-2層）、褐色スコリア混じりで褐色がかった灰色土（層厚13cm，スコリアの最大径10mm）、褐色スコリアに富む灰色土（層厚８cm，スコリアの最大径14mm，以上ⅩⅥ-1層）、褐色スコリアを多く含む灰色土（層厚15cm，スコリアの最大径14mm，ⅩⅤ層）、褐灰色土（層厚11cm，ⅩⅥ層）、褐色スコリア混じり黄褐色砂質土（層厚16cm，スコリアの最大径９mm，石質岩片の最大径13mm，ⅩⅢ-2層）、褐色スコリア混じり黄褐色土（層厚23cm，スコリアの最大径12，石質岩片の最大径24mm，ⅩⅢ-1層）、褐色スコリア混じり灰褐色土（層厚14cm，スコリアの最大径11mm，ⅩⅡ層）、褐色がかった灰色土（層厚４cm，ⅩⅠ層）、成層したテフラ層（層厚61cm）、黄色軽石混じり暗褐色土（層厚22cm，軽石の最大径26mm，Ⅸ-2層）、暗灰色土（層厚21cm，Ⅸ-1層）、黒褐色土（層厚22cm，Ⅷ層）、黄色細粒軽石に富む灰色土（層厚７cm，軽石の最大径３mm）、黄色軽石混じり黒褐色土（層厚８cm，軽石の最大径６mm）、黄色軽石混じり暗褐色土（層厚13cm，軽石の最大径６mm）、黒褐色土（層厚７cm，以上Ⅶ層）、黒色土（層厚９cm，Ⅵ層）、黒灰色砂質土（層厚９cm）、成層したテフラ層（層厚31cm）、黄灰色土（層厚９cm）、黒色土（層厚８cm）、盛土（層厚20cm以上）が認められる。

これらの土層のうち、下位の成層したテフラ層（Ⅹ層）は、下位より青灰色粗粒火山灰層（層厚0.8cm）、黄色軽石および赤褐色軽石混じり黄灰色粗粒火山灰層（層厚６cm，軽石の最大径20mm）、赤褐色軽石混じり黄色軽石層（層厚６cm，軽石の最大径19mm，石質岩片の最大径４mm）、青灰色粗粒火山灰層（層厚0.6cm，以上Ⅹ-4層）、赤褐色軽石層（層厚３cm，軽石の最大径17mm，石質岩片の最大径３mm）、黄色軽石層（層厚６cm，軽石の最大径21mm，石質岩片の最大径３mm）、逆級化構造の認められる黄色軽石層（層厚７cm，軽石の最大径19mm，石質岩片の最大径８mm，以上Ⅹ-3層）、赤褐色軽石層（層厚３cm，軽石の最大径19mm，石質岩片の最大径８mm）、粗粒の黄色軽石層（層厚29cm，

軽石の最大径62mm，石質岩片の最大径27mm，以上Ｘ-2・Ｘ-1層）の連続から構成されている。このテフラ層は、その層相から約1.4～1.6万年前に霧島火山から噴出した霧島小林軽石（Kr-Kb，伊田ほか，1956，町田・新井，1992）に同定される。

Ｖ層には、その層位や層相などから、約6,300～6,500年前に霧島火山から噴出した霧島牛ノ徑テフラ下部（Kr-USL，井ノ上，1988，早田，1997）に由来する粗粒火山灰が多く含まれていると考えられる。

上位の成層したテフラ層（Ⅳ層）は、下部の火山豆石混じり橙色軽石層（層３３cm，軽石の最大径７mm，火山豆石の最大径４mm）と、上部の橙色細粒火山灰層（層厚28cm）から構成されている。このテフラ層は、その層相から約6,300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，町田・新井，1978）に同定される。

３．屈折率測定

（１）測定試料と測定方法

起源や噴出年代がとくに不明な試料番号４～１の４試料中に含まれるテフラ粒子について、屈折率測定を行って示標テフラとの同定を試みた。測定は、位相差法（新井，1972）による。

（２）測定結果

9-Iグリッドの試料番号４のスコリアには、班晶として量の多い順に、単斜輝石、カンラン石、斜方輝石が認められる。斜方輝石の屈折率（γ）は、1.702-1.707である。このスコリアについては、その層位から約1.8万年前に霧島火山から噴出した韓国岳スコリア（井村，1991）由来している可能性が大きい。

試料番号３の軽石には、班晶として量の多い順に、斜方輝石と単斜輝石が認められる。斜方輝石の屈折率（γ）は、1.706-1.710である。試料番号２の軽石にも、班晶として量の多い順に、斜方輝石と単斜輝石が認められる。斜方輝石の屈折率（γ）は、1.706-1.710である。さらに試料番号１の軽石にも、班晶として量の多い順に、斜方輝石と単斜輝石が認められる。斜方輝石の屈折率（γ）は、1.706-1.710である。岩相をあわせて考慮すると、これら３試料中の軽石は同一テフラに由来していると考えられる。このテフラ層は、その層位や特徴などから、約9,100年前に霧島火山から噴出した霧島瀬田尾軽石（Kr-St，井ノ上，1988，早田，1997）に由来すると考えられる。

４．小結

内屋敷遺跡において、地質調査と屈折率測定を合わせて行った。その結果、本遺跡では下位より韓国岳スコリア（約1.8万年前）に対比される可能性のあるスコリア、霧島小林軽石（Kr-Kb，約1.4～1.6万年前）、霧島瀬田尾軽石（Kr-St，約9,100年前）、霧島牛ノ徑テフラ下部（Kr-USL，約6,300～6,500年前）、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，約6,300年前）が認められた。本遺跡の周辺では、これらのテフラを利用して後期旧石器時代後半から縄文時代にかけての詳細な編年学的な研究が可能である。

文　献

新井　房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノ　ロジーの基礎的研究，第四紀研究，11，p.254-269.

伊田　一善・本島公司・安国　昇（1956）宮崎県小林市付近の天然ガス調査報告．地調報告，168，p.1-44.

井村　隆介（1991）霧島火山地質巡検コースガイド，日本火山学会．

井ノ上幸造（1988）霧島火山群高千穂複合火山の噴火活動史．岩鉱，83，p.26-4　1.

町田　　洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰．第四紀研究，17，p.143-163.

町田　　洋・新井　房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

奥野　　充（1996）南九州の第四紀末テフラの加速器１４C年代（予報）．名古屋大学　加速器質量分析計業績報告書，Ⅶ，p.89-109.

早田　　勉（1997）火山灰土と土壌の形成．宮崎県史通史編，１，p.33-77.

表１　内屋敷遺跡の屈折率測定結果

グリッド	試料	重鉱物	斜方輝石（γ）
9-I	1	opx＞cpx	1.706-1.710
9-I	2	opx＞cpx	1.706-1.710
9-I	3	opx＞cpx	1.706-1.710
9-I	4	cpx＞ol＞opx	1.702-1.707

ol：カンラン石，opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石．屈折率の測定は位相差法（新井，1972）による．

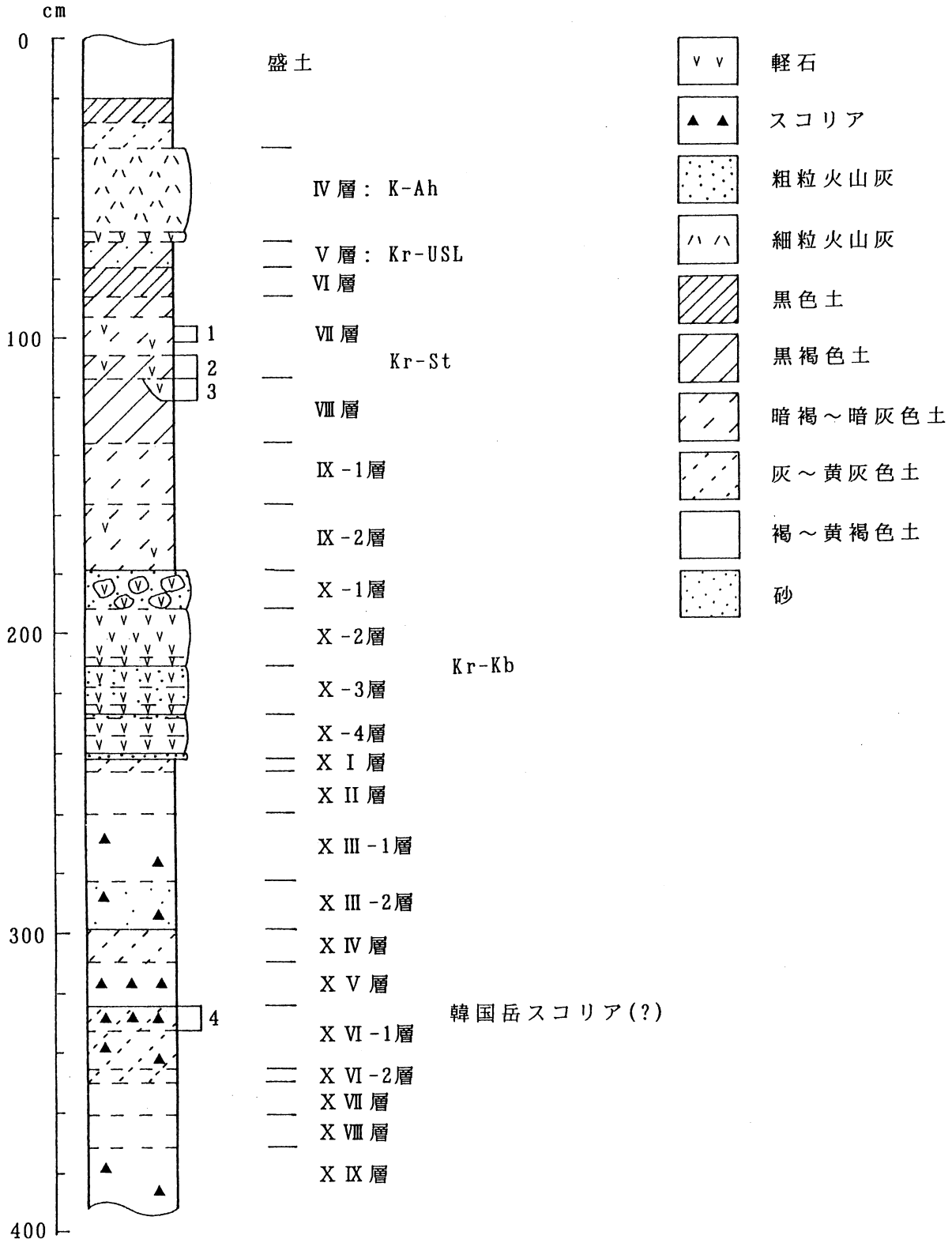


図1　9－1グリッドの土層柱状図　数字はテフラ分析の試料番号

第２節　内屋敷遺跡における植物珪酸体分析

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO２）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987）。

２．試料

試料は、9-Iグリッドで採取された30点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

３．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）　２）試料約１gに対して直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）　３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理　４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散　５）沈底法による20μm以下の微粒子除去　６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成　７）検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10－５g）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。ススキ属（ススキ）の換算係数は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。

４．分析結果

（１）分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕機動細胞由来：キビ族型、ススキ属型（ススキ属など）、ウシクサ族型、ウシクサ族型（大型）

〔イネ科－タケ亜科〕機動細胞由来：メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

〔イネ科－その他〕表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕その他

（２）植物珪酸体の検出状況

盛土直下層（試料１）からＸⅣ層（試料30）までの層準について分析を行った。その結果、ＸⅣ層（試料30）ではウシクサ族型、クマザサ属型、ミヤコザサ節型、棒状珪酸体などが検出されたが、いずれも少量である。ＸⅧ層（試料29）から韓国岳スコリア？直下のＸⅥ層（試料26）にかけては、クマザサ属型やミヤコザサ節型が大幅に増加しており、キビ族型やススキ属型なども検出された。韓国岳スコリア？直上のＸＶ層（試料25）では各分類群とも大幅に減少しているが、Kr-Kbより下位のＸⅢ-1層（試料21）からＸＩ層（試料19）にかけては、クマザサ属型やミヤコザサ節型などが増加傾向を示している。

Kr-Kb直上のⅨ-2層下部（試料17）では、Kr-Kb直下のＸＩ層と同様の分類群が検出されたが、いずれも少量である。同層上部（試料16）からKr-St直下のⅧ層（試料12）にかけては、クマザサ属型やミヤコザサ節型、棒状珪酸体が大幅に増加しており、ウシクサ族型も比較的多く検出された。また、メダケ節型やネザサ節型が出現している。Kr-St混のⅦ層下部（試料９～11）ではミヤコザサ節型、Ⅶ層上部（試料８）ではクマザサ属型が大幅に減少しており、Ⅶ層上部ではこれらに代わってメダケ節型やネザサ節型が急激に増加している。K-Ah直上層（試料２）では、ススキ属型やウシクサ族型、メダケ節型、ネザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。盛土直下層（試料１）では、ネザサ節型が増加している。

おもな分類群の推定生産量（図右側）によると、Ⅶ層下部より下位ではクマザサ属型やミヤコザサ節型が卓越しているが、Ⅶ層上部より上位ではメダケ節型やネザサ節型が優勢となっていることが分かる。

５．植物珪酸体分析から推定される植生と環境

以上の結果から、内屋敷遺跡における堆積当時の植生と環境について推定すると次のようである。

韓国岳スコリア（約1.8万年前）に対比される可能性のあるスコリアより下位のＸⅧ層からＸⅥ層にかけては、クマザサ属（ミヤコザサ節を含む）などのササ類を主体としてススキ属やチガヤ属、キビ族なども見られるイネ科植生が継続されていたものと推定される。クマザサ属は森林の林床でも生育が可能であるが、ススキ属やチガヤ属は日当りの悪い林床では生育が困難である。このことから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく比較的開かれた環境であったものと推定される。

タケ亜科のうち、メダケ属ネザサ節は温暖、クマザサ属は寒冷の指標とされており、両者の推定生産量の比率である「ネザサ率」の変遷は、地球規模の氷期－間氷期サイクルの変動とよく一致することが知られている（杉山・早田，1996）。ここでは、クマザサ属が圧倒的に卓越していることから、当時は寒冷な気候条件下で推移したものと推定される。クマザサ属は氷点下５℃程度でも光合成活動をしており、雪の中でも緑を保っていることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカなどの草食動物の重要な食物となっている（高槻，1992）。気候条件の厳しい氷期にクマザサ属などのササ類が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要である。

ＸＶ層からＸⅢ-2層にかけては、テフラの堆積など何らかの原因でイネ科植物の生育にはあまり適さない状況であったと考えられるが、ＸⅢ-1層からＸＩ層にかけては、クマザサ属（ミヤコザサ節を含む）などが比較的多く見られたものと推定される。

その後、霧島小林軽石（Kr-Kb，約1.4～1.6万年前）の堆積によって当時の植生は一時的に破壊され

たと考えられるが、ススキ属やチガヤ属などは比較的早い時期に再生し、Ⅸ-2層上部の時期にはその他の植物も再生したものと推定される。Ⅸ-1層から霧島瀬田尾軽石（Kr-St，約9,100年前）混のⅦ層下部にかけては、クマザサ属（ミヤコザサ節を含む）などのササ類を主体としてススキ属やチガヤ属、キビ族なども見られるイネ科植生が継続されていたと考えられるが、Ⅶ層上部の時期にはクマザサ属の減少に伴って、メダケ節やネザサ節が急激に増加したものと推定される。このような植生変化は、完新世初頭における気候温暖化に対応したものと考えられる。

その後、霧島牛ノ徑テフラ下部（Kr-USL，約6,300～6,500年前）や鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，約6,300年前）の堆積によって、当時の植生は一時的に破壊されたと考えられるが、ススキ属やチガヤ属などは比較的早い時期に再生したものと推定される。

参考文献

杉山　真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究，第2号，p.27-37.

杉山　真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，　p.70-83.

杉山　真二・早田勉（1996）植物珪酸体分析による宮城県高森遺跡とその周辺の古　環境推定－中期更新世以降の氷期－間氷期サイクルの検討－．日本第四紀学会　講演要旨集，26，p.68-69.

杉山　真二（1997）人類をとりまく植生と環境．宮崎県史通史編「原始・古代」．p.150-172.

高槻　成紀（1992）北に生きるシカたち－シカ、ササそして雪をめぐる生態学－．　どうぶつ社.

藤原　宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培　植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

表１　宮崎県、内屋敷遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群 ＼ 試料	9-Ｉグリッド																													
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
イネ科																														
キビ族型				7	7		44	22	22	15	7		8		13	22	15			22	43			7			15	15		
ススキ属型		7	8	22	7	53	30	22	30	68	28	7			6		7			14	12	7			8	22	22	15		
ウシクサ族型		44	8	73	59	60	111	105	104	128	121	89	30	22	57	67	44	15	29	43	62	14	15	35	15	90	95	52	14	19
ウシクサ族型(大型)															6	7		7									7			
タケ亜科																														
メダケ節型	29	22		44	119	98	162	90	22	23			8																	
ネザサ節型	154	52	23	191	349	345	598	255	45	15	14	7		22																
クマザサ属型	29	7		15	45	30	59	97	230	158	291	305	220	167	76	74	7		88	43	6	7	7	92	15	75	124	133	49	26
ミヤコザサ節型								30	22	15	106	179	265	94	64	89	7		59	29	25	7	22	21	91	157	160	185	190	19
未分類等	44	7		191	268	45	406	247	372	332	362	357	295	298	51	44	7		110	167	62			7	23	7	262	52	21	39
その他のイネ科																														
表皮毛起源							22	15	7			22	30		25	30	29	7	29	22	19	14	7	21		15	22	52	28	19
棒状珪酸体	37	37	8	433	558	188	871	630	587	649	760	812	583	537	236	185	169	58	315	406	284	48	45	106	68	37	735	608	232	129
茎部起源		7																												
未分類等	359	295	23	566	639	556	782	637	580	551	547	596	545	588	433	466	331	168	512	529	445	194	45	398	121	187	575	534	351	323
樹木起源																														
その他													8																	
植物珪酸体総数	652	480	68	1542	2052	1374	3084	2152	2021	1955	2236	2375	1991	1727	968	983	617	256	1141	1276	958	291	141	689	341	591	2017	1646	885	574

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）

ススキ属型		0.09	0.09	0.27	0.09	0.65	0.37	0.28	0.37	0.84	0.35	0.09			0.08		0.09			0.18	0.15	0.09			0.09	0.28	0.27	0.18		
メダケ節型	0.34	0.26		0.51	1.38	1.13	1.88	1.04	0.26	0.26			0.09																	
ネザサ節型	0.74	0.25	0.11	0.92	1.68	1.66	2.87	1.22	0.21	0.07	0.07	0.04		0.10																
クマザサ属型	0.22	0.06		0.11	0.33	0.23	0.44	0.73	1.73	1.19	2.18	2.29	1.65	1.25	0.57	0.55	0.06		0.66	0.33	0.05	0.05	0.06	0.69	0.11	0.56	0.93	1.00	0.37	0.19
ミヤコザサ節型								0.09	0.07	0.05	0.32	0.54	0.79	0.28	0.19	0.27	0.02		0.18	0.09	0.07	0.02	0.07	0.06	0.27	0.47	0.48	0.56	0.57	0.06

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	26	46		33	41	38	36	34	11	17			3																	
ネザサ節型	57	44	100	60	49	55	55	40	9	5	3	1		6																
クマザサ属型	17	10		7	10	7	9	24	76	76	85	80	65	76	75	68	71		79	79	38	71	45	92	29	54	66	64	39	77
ミヤコザサ節型								3	3	3	12	19	31	17	25	32	29		21	21	62	29	55	8	71	46	34	36	61	23

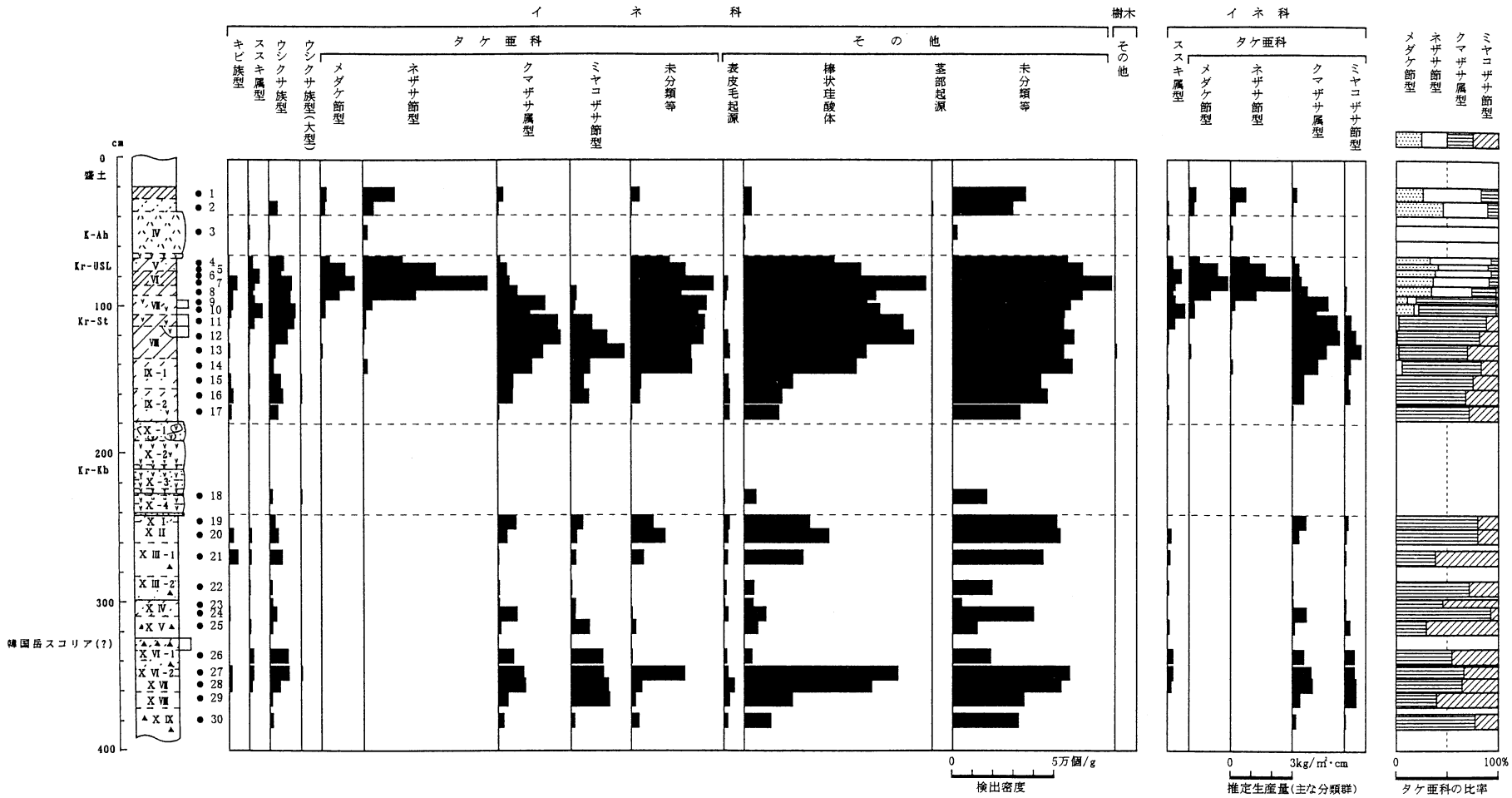
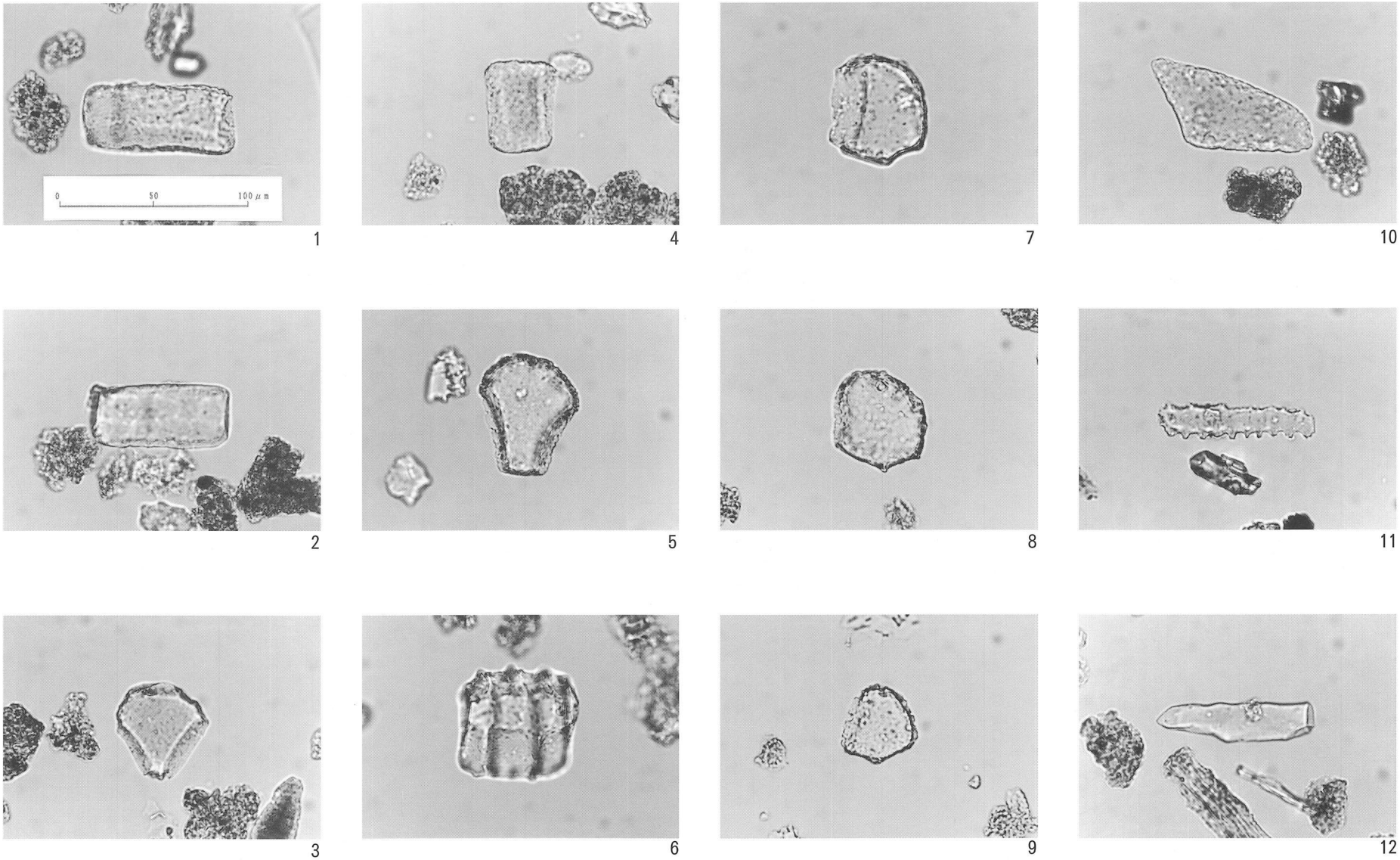


図1　内屋敷遺跡、9－Ⅰ グリッドにおける植物珪酸体分析結果



【植物珪酸体の顕微鏡写真】　1　キビ族型　2　キビ族型　3　ススキ属型　4　ウシクサ族型　5　メダケ節型　6　ネザサ節型
7　クマザサ属型　8　クマザサ属型　9　ミヤコザサ型　10　表皮毛起源　11　棒状珪酸体　12　樹木

第Ⅴ章　まとめ

内屋敷遺跡は、小林盆地の標高約212mのシラス台地上に立地する。今回の調査では、縄文早期～中世の遺構・遺物を数多く検出した。特に、アカホヤ火山灰層下の調査は、南九州縄文時代の縄文時代早期を考える上で貴重な資料となった。ここでは、調査成果や課題について整理を行う。

1　縄文時代早期遺構について

遺構は、集石遺構10基、配石遺構３基、平地住居跡と考えられる掘立柱建物11棟が検出された。

集石遺構

集石遺構は10基確認された。集石遺構は一般的に炉としての機能が与えられている。内屋敷遺跡の集石遺構は、主として輝石安山岩の亜円礫を用い、小規模のものが多い。検出された集石遺構は、わずか10基ではあるが、土坑（掘り込み）の有無、被熱痕跡（礫の赤変・炭化物の出土など）の有無など、いくつかの形態差が確認された。こうした検出状況の差異によって、集石遺構にいくつかの段階が想定できる。まず、土坑をもち、被熱痕跡の認められるタイプ（ＳＩ２・ＳＩ３・ＳＩ４・ＳＩ８・ＳＩ９・ＳＩ10）は、炉としての使用の可能性がある。土坑をもたず、被熱痕跡の認められるタイプ（ＳＩ５）は、廃棄礫の集積の可能性がある。土坑の有無に関係せず、被熱痕跡の認められないタイプ（ＳＩ１・ＳＩ６・ＳＩ７）は、準備礫の集積の可能性がある。

配石遺構

配石遺構は３基検出された。３基は、いずれも数枚の板石状礫を遺構内側に傾斜させ、逆ハの字状の断面形をもつ。確認状況に差異があるので明言はできないが、３基とも、長径１ｍ前後、短径70cm前後の楕円形土坑を有すると考えられる。

類似する配石遺構は南・西九州において数例確認されている。掃除山遺跡（鹿児島県鹿児島市）・栫ノ原遺跡（鹿児島県加世田市）・奥ノ仁田遺跡（鹿児島県西之表市）・鷹爪野遺跡（鹿児島県川辺町）・瀬田裏遺跡（熊本県大津町）などである。これらの殆どは、土壌や礫の赤変・炭化物の出土という被熱痕跡が確認され、炉跡と考えられている。内屋敷遺跡の配石遺構において、炉跡と裏付ける被熱痕跡は、３号で確認された礫の赤変のみである。１・２号は、被熱痕跡が見られず、炉跡と断言するのは難しい。しかし、他遺跡の遺構形状から考えても、内屋敷遺跡検出の配石遺構は、炉跡として機能していた可能性がある。配石遺構は、これまで縄文時代草創期の遺構として扱われてきた。鹿児島県の４遺跡は草創期に位置づけられている。内屋敷遺跡の配石遺構と最も形状が類似している掃除山遺跡の例も、やはり草創期に位置づけられており、若干の時期差がある。一方、瀬田裏遺跡の例は、早期に位置づけされている。今後の資料の増加が待たれるが、草創期に発生した配石遺構は、形状を若干変えながらも、早期まで継続していたと考えられる。

掘立柱建物（平地住居）

内屋敷遺跡において検出された掘立柱建物は、平地住居跡と考えられる。楕円形９基、半円形１基、方形１基である。楕円形９基は、側柱穴８～11本、直径2.5～3.4ｍ（平均2.97ｍ）、床面積4.9～9.0㎡

（平均6.8㎡）の規模である。半円形の１基も、楕円形に復元してみると同規模になる。方形の１基は、2.43×1.58m、床面積3.8㎡である。いずれも、一方向に入り口と考えられる、広めの柱間が確認された。

この掘立柱建物は、平地住居か竪穴住居かという問題がある。南九州縄文時代早期における住居跡の検出例は、札ノ元遺跡（宮崎県田野町）・留ヶ宇戸遺跡（宮崎県串間市）・加栗山遺跡（鹿児島県鹿児島市）・鹿児島県上野原第４工区遺跡（鹿児島県国分市）・村山闇谷遺跡（熊本県人吉市）・大丸・藤ノ迫遺跡（熊本県山江村）・狸谷遺跡（熊本県山江村）などがある。その殆どが竪穴住居であり、この中で平地住居として扱われているのは村山闇谷遺跡のみである。内屋敷遺跡では竪穴が検出されないが、その理由として、竪穴住居の竪穴を検出し得なかった可能性と元来竪穴をもたない平地住居である可能性の２通りが考えられる。検出作業過程において、本来の遺構面（当時の地表面）を確認できなかった可能性があり、竪穴の存在を完全には否定できない。しかし、柱穴の埋土確認時点で、その周辺に竪穴の痕跡が全く確認されなかったことを考えると、内屋敷遺跡における掘立柱建物は、竪穴が存在しない平地住居と考える方が妥当であろう。

掘立柱建物と遺物との共伴関係について。遺構のＡ～Ｄ群の内、直上の第Ⅵ・Ⅶ層で遺物を伴うのは、Ａ群のみである。Ｂ～Ｄ群は、直上及び周辺の第Ⅵ・Ⅶ層からも、遺物を出土していない。唯一、検出面上層に遺物を伴うＡ群においても、出土する土器には統一性がみられず、どれが遺構に伴う土器か判別できない。

また、11基の掘立柱建物は４つに分かれて群構造をなす。調査区域の制限などがあり、群全体が検出されたと思われるものは、Ｂ群とＤ群のみである。各群には、入口と想定される空間に方向性（外側に開く）があること、隣接しており重複がないことが認められる。このことを考慮すると、各群単位内は、同時期に存在していた可能性がある。しかし、各群が同時期に存在したのかという問題については、今回の検出状況から答えを導き出すことは難しい。

2　縄文時代早期遺物について

土器

内屋敷遺跡は、宮崎・鹿児島・熊本３県の県境に近く、中九州・南九州地域の一端に入る。出土した縄文時代早期土器は、地理的条件と相まって、複数の地域を結ぶ資料となり得る結果となった。本報告において縄文時代早期土器を、１～11類に分類を行ったが、型式不明の９～11類を除くと１～８類の８類型に分類される。ここでは、各類型について若干の記述を行う。

１～６類は、円筒形貝殻文土器であり、主として南九州に分布する。新東氏の編年（新東－1989）と照合すると、内屋敷遺跡出土の土器は、１類（岩本式）→２類（前平系）→３類（知覧式）→４類（吉田式）→５ａ類（倉園Ｂ式）→５ｂ類（石坂式）→６類（下剥峰式）という一連の編年に沿う土器が出土している。しかし、各類型の中には若干変則的なものも見受けられる。内屋敷遺跡出土の２類土器は、文様施文（口縁部上端の斜位の貝殻腹縁連続刺突文・斜方向の貝殻腹縁条痕文）は同じであるが、器形の面で前平式と多少異なる。胴部が直線状の円筒形ではなく、胴部が膨らむ器形を呈する。このタイプは、前原西遺跡（宮崎県宮崎市）・芳ヶ迫第一遺跡（宮崎県田野町）・札ノ元遺跡（宮崎県田野町）などで確認されている。前原西遺跡において、この類型は前平式に前後する時期に位置づけている。（面高－1988）

7類は、押型文土器である。これらの中に、山形押型文を施文に平底の底部の特徴をもつ土器がある。この外来系の押型文土器と、在地系の円筒形の混合形である円筒形押型文土器は、内屋敷遺跡の他、牟田尻遺跡（鹿児島県出水市）・仮牧段遺跡（鹿児島県市来町）など南九州西北部に限って確認されている。

8類は、円筒形条痕文土器であり、木崎氏の設定する（木崎－1998）の中原式Ⅰ～Ⅴ期に相当する。124～143は、口唇部から口縁部上端の狭い範囲にかけて、貝殻腹縁による連続刺突文を施している。これは、中原Ⅰ期に相当すると思われる。144～153は、口縁部から胴部上位にかけて、貝殻腹縁による横方向の条痕文である。中原Ⅳ期に相当すると思われる。154～158は、外器面全体に、貝殻腹縁による条痕文を施している。剥落などが著しく不明な点が多いが、少なくとも158は、外器面全体にかけての施文が確認できる。中原Ⅴ期に相当すると思われる。中原式は、縄文時代前半期、主に中九州西部に分布する土器である。

今回の調査では、縄文時代早期前半から早期後半にかけて時期幅のある土器が出土した。これを、垂直分布・平面分布の両面において、土器の共伴関係を明確にすることは困難である。しかし、1類（岩本式）・4類（吉田式）・7類（押型文）・8類（中原式）は、互いにある程度独立した分布の集中が見られる。このことが、同時期の集団差を示すものか、時期差を示すものか判じ難いが、興味深い結果となった。

石器

内屋敷遺跡では、狩猟具としての石鏃・尖頭状石器、加工用工具としての石錐・楔形石器、動物性食料加工用具としての削器、植物性食料加工用具（一部土器製作目的も含む）としての磨石・敲石・台石・石皿、伐採用具としての局部磨製石斧、石器製作を示す石核などバラエティーに富んだ石器類が出土した。こうした石器は、内屋敷遺跡で狩猟と植物採取の両方が行われていたことを如実に示す。石材は黒曜石・チャートが主体であり、特に黒曜石石材は、桑ノ木津留をはじめとする周辺地域で入手した可能性がある。また、石核の出土とともに黒曜石の剥片・チップ類が集中する場所が6Ｃ区などで確認されており、本遺跡で石器製作が行われた可能性がある。

3　弥生時代遺構について

弥生時代に属する遺構は、竪穴住居2基が検出された。ＳＡ１・ＳＡの2基は、方形プランに4本主柱穴配置という弥生時代後期後半から主流を占めるタイプである（石川－1991）。ＳＡ２では、北壁中央付近に土坑が検出された。土坑の性格として、入口の梯固定穴と炉の2通りが考えられる。ＳＡ２の土坑は、炭化物を多く含む埋土と周辺に灰と炭化物を含む土が確認されたことから、炉である可能性が高い。ＳＡ１については、中央部にピットが存在する。しかし、焼土など確認できない上に残存状態も悪く、柱穴とも炉とも判断ができない。ＳＡ１・ＳＡ２から出土した遺物は、レベル的に住居埋土の下位に位置しており遺構との時期差は小さいものと考えられ、弥生時代後期後半から古墳時代初頭に位置づけられる。

【参考文献】
八木澤一郎 1992 「鹿児島県下の縄文期集石Ⅰ」『南九州縄文通信』No.6 南九州縄文研究会
上東克彦 1995 「配石遺構」『旧石器から縄文へ』鹿児島県考古学会・宮崎県考古学会
鹿児島市教育委員会 1992 『掃除山遺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(12)
加世田市教育委員会 1998 『栫ノ原遺跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書 (15)
西之表市教育委員会 1995 『奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡』西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
上村純一 1993 「鷹爪野遺跡」『南九州における縄文時代草創期の諸問題』宮崎考古学会・南九州の縄文時代草創期を考える会
大津町教育委員会 1993 『瀬田裏遺跡調査報告Ⅱ』大津町文化財調査報告
長津宗重 1995 「宮崎県内の縄文時代早期竪穴住居一覧表」『旧石器から縄文へ』鹿児島県考古学会・宮崎県考古学会
田野町教育委員会 1986 『芳ヶ迫第1遺跡・芳ヶ迫第2遺跡・芳ヶ迫第3遺跡・札ノ元遺跡』田野町文化財調査報告書 第3集
串間市教育委員会 1994 『留ヶ宇戸遺跡』串間市文化財調査報告書 第11集
人吉市教育委員会 1988 『村山闇谷遺跡発掘調査報告書』
鹿児島県教育委員会 1981 『加栗山遺跡・神ノ木遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(16)
新東晃一 1989 「早期九州貝殻文系土様式」『縄文土器大観』小学館
面高哲郎 1988 「前原西遺跡の調査 第5節 まとめ」宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第4集 宮崎県教育委員会
木崎康弘 1998 「中原式土器について」『九州縄文土器編年の諸問題』九州縄文研究会
水ノ江和同 1998 「九州における押型文土器の地域性」『九州の押型文土器』九州縄文研究会
石川悦雄 1991 「宮崎における弥生時代竪穴式住居の展開」『宮崎県史研究』第5号 宮崎県

おわりに

本書を作成するにあたり、多くの方々にお世話になった。文末ではあるが、記して謝意を述べたい。(順不同・敬称略)
青山尚友・石川悦雄・菅付和樹・谷口武範・東憲章・日高広人（埋蔵文化財センター）、桑畑光博（都城市教育委員会）、中村真由美（小林市教育委員会）、上田寿美子・藤川留美子（整理作業員）、米久田真二、発掘・整理作業に携わった作業員の方々

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量（cm）			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	縄文土器	深鉢 口縁					口唇部に刻み目　三条の貝殻腹縁による横位の貝殻刺突　ナデ　スス付着	横方向のナデ	黒褐	黒褐	2.5mm以下の乳白色砂粒透明光沢粒	
2	縄文土器	深鉢 口縁～胴部					口唇部に刻み目　三条の貝殻腹縁による横位の貝殻刺突　ナデ・スス付着	横方向のナデ 指頭痕	黒褐	灰黄褐	4mm以下の乳白色砂粒 2.5mm以下の透明光沢粒 1mm以下の黒色光沢粒	
3	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	7層	30.7			斜方向の貝殻条痕・ナデ　口縁部上端部に貝殻腹縁による斜方向の連続刺突文	ミガキ 黒変	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な透明・半透明光沢粒 2mm以下の乳白・灰・黒色砂粒	前平系 7と同一個体
4	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	7層	21.9			斜方向の貝殻条痕　貝殻腹縁による連続刺突文　口唇部にミガキ	ミガキ　丁寧なナデ 黒変	にぶい黄橙	橙	微細な透明・半透明光沢粒 2mm以下の灰・褐色・乳白色砂粒	前平系
5	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	7層	18.0			斜方向の貝殻条痕　貝殻腹縁による連続刺突文　ナデ・黒斑	口唇部にミガキ 丁寧なナデ　黒変	黄灰 にぶい黄	黄灰 にぶい黄	2mm以下の褐・茶・白色砂粒 1mm以下の透明光沢粒	前平系
6	縄文土器	深鉢 口縁	7層				斜方向の貝殻条痕　斜位の貝殻腹縁による連続刺突文　ナデ・スス付着	工具による横方向の丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	0.5～2mmの灰白・浅黄・赤褐・褐灰色砂粒	前平系
7	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	7層				斜方向の貝殻条痕　斜位の貝殻腹縁による連続刺突文　ナデ・スス付着	口唇部にミガキ 丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な透明・半透明黒色光沢粒 2mm以下の乳白・黄灰・灰・黒色砂粒	前平系 3と同一個体
8	縄文土器	深鉢 口縁	7層				斜方向の貝殻条痕　斜位の貝殻腹縁による連続刺突文　スス付着・ナデ	横位の丁寧なナデ　指頭痕　口唇部にミガキ	灰黄褐	にぶい赤褐	0.5～1.5mmの透明・黒色光沢粒 灰白・浅黄橙・褐灰色砂粒	前平系
9	縄文土器	深鉢 口縁	7層				斜方向の貝殻条痕　斜位の貝殻腹縁による連続刺突文　ナデ	ミガキ スス付着	にぶい黄橙	にぶい黄橙 褐灰	微細～2mmの透明・黒色光沢粒 灰白・浅黄・褐灰色砂粒　4mm程度のにぶい赤褐・褐灰色砂粒	前平系
10	縄文土器	深鉢 口縁	7層				斜方向の貝殻条痕　斜位の貝殻腹縁による連続刺突文　スス付着・ナデ	ナデ 口唇部にミガキ	にぶい褐	にぶい橙 にぶい黄橙	0.5～1mmの透明・黒色光沢粒 灰白・褐灰・浅黄・暗赤褐色砂粒	前平系
11	縄文土器	深鉢 口縁	7層				斜方向の貝殻条痕　斜位の貝殻腹縁による連続刺突文　スス付着・ナデ	丁寧なナデ 口唇部にミガキ	灰黄	浅黄	微細～1mmの透明・黒色光沢粒　灰白・褐灰色砂粒	前平系
12	縄文土器	深鉢 口縁	7層				斜方向の貝殻条痕　斜位の貝殻腹縁による連続刺突文	丁寧なナデ ミガキ	浅黄 黄灰	暗灰黄	1.5mm以下の灰白・黒・灰色砂粒　光沢粒	前平系
13	縄文土器	深鉢 口縁	7層				斜方向の貝殻条痕　斜位の貝殻腹縁による連続刺突文　スス付着・ナデ	口唇部にミガキ 横位の丁寧なナデ	褐灰 灰黄褐	にぶい黄橙 黒褐	1mm以下の灰黄・灰色砂粒　光沢粒	前平系
14	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	7層				斜方向の貝殻条痕　斜位の貝殻腹縁による連続刺突文　ナデ	口唇部にミガキ 丁寧なナデ	浅黄	暗灰黄	1mm以下の乳白色砂粒 透明光沢粒	前平系
15	縄文土器	深鉢 口縁	7層				斜方向の貝殻条痕　斜位の貝殻腹縁による連続刺突文　ナデ	口唇部にミガキ 丁寧なナデ	浅黄	暗灰黄	1mm以下の乳白色砂粒 透明光沢粒	前平系
16	縄文土器	深鉢 口縁	7層				斜方向の貝殻条痕　斜位の貝殻腹縁による連続刺突文　ナデ	横位の丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐 灰黄褐	1mm以下の乳白色・灰色砂粒・透明光沢粒	前平系
17	縄文土器	深鉢 口縁	7層				斜方向の貝殻条痕　斜位の貝殻腹縁による連続刺突文　ナデ	口唇部にミガキ 横位の丁寧なナデ	にぶい黄橙 褐灰	灰黄褐	1mm以下の透明黒色光沢粒	前平系
18	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	7層				斜方向の貝殻条痕　斜位の貝殻腹縁による連続刺突文　ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	3.5mm以下の灰白色・赤褐色・黄褐色砂粒　透明黒色光沢粒	前平系
19	縄文土器	深鉢 口縁	7層				斜方向の貝殻条痕　斜位の貝殻腹縁による連続刺突文　ナデ	丁寧なナデ	にぶい黄橙 黒褐	黒褐	1mm以下のにぶい黄橙・黒色砂粒	前平系
20	縄文土器	深鉢 口縁	7層				斜方向の貝殻条痕　斜位の貝殻腹縁による連続刺突文　ナデ	横位のミガキ	にぶい黄橙	黒褐	1mm以下の乳白色・灰色砂粒　透明光沢粒	前平系
21	縄文土器	深鉢 口縁	7層				ナデ　貝殻腹縁による縦位の連続刺突文	丁寧なナデ	褐灰 にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の灰白・黒褐色砂粒　黒色光沢粒	前平系
22	縄文土器	深鉢 胴部	7層				貝殻腹縁による条痕の後 貝殻腹縁による連続刺突文　ナデ	縦位のナデ	灰黄	黄灰	2.5mm以下の灰白色砂粒・透明光沢粒	前平系
23	縄文土器	深鉢 底部	7層		6.0		ナデ　斜方向の貝殻条痕	丁寧なナデ	にぶい黄橙	橙	2mm以下の灰・褐色・乳白色の砂粒微細な透明光沢粒	前平系
24	縄文土器	深鉢（角筒） 口縁	7層				口唇部に連続刻み目　斜位の貝殻条痕の後 貝殻腹縁による刺突文　縦位の短沈線	ナデ	黒褐	黒褐	1mm以下の灰白・褐色・砂粒	知覧式
25	縄文土器	深鉢（角筒） 口縁	7層				口唇部に連続刻み目　貝殻腹縁による刺突文 刻み目をもつ貼付楔形突帯	ナデ	褐灰	にぶい褐	1mm以下の白・黄白・褐・赤褐色砂粒	知覧式
26	縄文土器	深鉢 口縁	7層				口唇部に連続刻み目　口縁部に横位の貝殻腹縁による三条の刺突　縦位の貝殻腹縁による刺突　刻み目をもつ貼付楔形突帯	ナデ	にぶい黄橙	明褐	2mm以下の乳白色・淡橙砂粒　1mm以下の透明光沢粒	知覧式
27	縄文土器	深鉢 口縁	7層				口唇部に連続刻み目　斜方向の貝殻腹縁による条痕　横位の貝殻腹縁による条痕	風化の為　調整不明	にぶい褐	褐	微細な透明・金色光沢粒 微細な乳白・黄灰砂粒	知覧式
28	縄文土器	深鉢（円筒） 胴部	7層				縦位の貝殻腹縁による連続刺突文 刻み目をもつ貼付楔形突帯	斜位のナデ	にぶい褐	褐	2mm以下の黄灰・灰・褐色砂粒　微細な透明・黒色光沢粒	知覧式
29	縄文土器	深鉢（円筒） 胴部	7層				縦位の貝殻腹縁による刺突文	縦位のナデ	灰褐	褐灰	2mm以下の白色・褐・灰色砂粒	知覧式
30	縄文土器	深鉢（円筒） 胴部	7層				縦位の貝殻腹縁による刺突文	ナデ	にぶい褐	暗灰黄	2mm以下の白・灰色砂粒	知覧式
31	縄文土器	深鉢（円筒） 胴部	7層				縦位の貝殻腹縁による刺突文	ナデ	にぶい褐	灰褐	2mm以下の白・褐色砂粒 透明粒	知覧式
32	縄文土器	深鉢（円筒） 胴部	7層				斜位の貝殻条痕　縦位の連続列点文	縦方向のナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	0.5mm以下の黄褐・灰褐色砂粒　透明砂粒	知覧式
33	縄文土器	深鉢（円筒） 胴部	7層				斜位方向の貝殻条痕　縦位の連続列点文	縦方向のナデ	にぶい褐	にぶい黄褐 褐灰	3mm以下の褐・灰白・淡黄色砂粒	知覧式
34	縄文土器	深鉢（円筒） 胴部	7層				横方向の貝殻条痕　縦位の連続列点文 貼付楔型突帯	ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐	1mm以下の黒・乳白色砂粒　透明光沢粒	知覧式
35	縄文土器	深鉢（円筒） 胴部	7層				横方向の貝殻条痕　縦位の連続列点文 貼付楔型突帯	ナデ	黄灰	にぶい褐	1mm以下の橙色・乳白色砂粒	知覧式
36	縄文土器	深鉢（円筒） 底部	7層		12.7		丁寧なナデ　ナデ　縦位の刻線	ナデ	にぶい褐	にぶい赤褐	3mm以下の灰白色砂粒	知覧式

第3表　出土土器観察表（1）

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量（cm）			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
37	縄文土器	深鉢 底部	7層		10.1		丁寧なナデ　縦位の刻線	粗いナデ	明赤褐 灰褐	灰黄褐 褐	2㎜以下の灰白・明黄褐色砂粒　透明光沢粒	知覧式
38	縄文土器	深鉢 口縁～底部付近	7層	20.0			口唇部に連続刻み目　横位の連続列点文 横位の連続押引き文	横位のナデ	黄灰 明赤褐	灰黄 黒	6㎜以下の浅黄橙・灰褐色砂粒 3㎜以下の黒褐乳白色砂粒	吉田式
39	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	7層	20.7			口唇部に連続刻み目　横位の連続列点文 横位の連続押引き文	横位の丁寧なナデ	黒褐	浅黄褐 にぶい黄橙	8㎜以下の茶褐色砂粒　3㎜以下の灰黄・乳白色砂粒　1㎜以下の光沢粒	吉田式
40	縄文土器	深鉢 胴部	7層				横位の貝殻腹縁による連続押引き文	斜位のナデ	にぶい褐	にぶい黄 黒	7㎜以下の赤褐色砂粒　6㎜以下乳白色砂粒 2㎜以下の透明光沢粒　3㎜以下の黒色砂粒	吉田式
41	縄文土器	深鉢 胴部	7層				横位の貝殻腹縁による連続押引き文 ススト付着	ナデ	にぶい褐	橙	4㎜程の茶色砂粒　1～2㎜の黒・乳白色砂粒　透明光沢粒	吉田式
42	縄文土器	深鉢 胴部	7層				横位の貝殻腹縁による連続押引き文 ススト付着	横位の丁寧なナデ	明褐	にぶい褐	1～2㎜の淡黄・灰色砂粒・透明・黒色光沢粒	吉田式
43	縄文土器	深鉢 胴部	7層				横位の貝殻腹縁による　連続押引き文 口唇部に横位の一条の列点文　ススト付着	斜位の丁寧なナデ	にぶい褐	灰黄褐	2㎜以下の灰白・灰黄・灰色砂粒・透明光沢粒　金色光沢粒	吉田式
44	縄文土器	深鉢 胴部	7層				横位の貝殻腹縁による　連続押引き文	横位の丁寧なナデ 指頭痕	にぶい橙	にぶい黄褐	5㎜以下の灰色　2㎜以下の褐・乳白・黒色砂粒　1㎜以下の透明光沢粒	吉田式
45	縄文土器	深鉢 胴部	7層				横位の貝殻腹縁による　連続押引き文	斜位の丁寧なナデ	にぶい褐	灰黄褐	2㎜以下の黄橙・灰白・灰黄色・黒色砂粒　透明光沢粒	吉田式
46	縄文土器	深鉢 胴部	7層				横位の貝殻腹縁による　連続押引き文	丁寧なナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	1㎜以下の黄白・灰白・赤褐黒色砂粒　0.5㎜以下の透明光沢粒	吉田式
47	縄文土器	深鉢 胴部	7層				横位の貝殻腹縁による　連続押引き文	横位の丁寧なナデ	橙 にぶい褐	にぶい橙	5㎜以下の淡橙・橙・灰白色砂粒	吉田式
48	縄文土器	深鉢 胴部	7層				横位の連続列点文 横位の連続押引き文　穿孔	横位の丁寧なナデ 穿孔　指頭痕	黒褐 暗灰黄	暗オリーブ褐	2㎜以下の浅黄・灰白色砂粒　金色光沢粒	吉田式
49	縄文土器	深鉢 胴部	7層				横位の貝殻腹縁による　連続押引き文	斜位のナデ	にぶい黄橙 にぶい橙	にぶい黄橙 褐灰	1㎜以下の透明光沢粒 乳白色・褐色砂粒	吉田式
50	縄文土器	深鉢 胴部	7層				横位の貝殻腹縁による　連続押引き文 ススト付着	ナデ	にぶい橙	褐灰	1㎜以下の透明光沢粒 乳白・褐色砂粒	吉田式
51	縄文土器	深鉢 胴部	7層				横位の貝殻腹縁による　連続押引き文 横位の連続列点文	ナデ	にぶい赤褐	橙	2㎜以下の茶褐・乳白色砂粒　1㎜以下の黒褐・灰褐色砂粒　微細な光沢粒	吉田式
52	縄文土器	深鉢 底部	7層				横位の貝殻腹縁による　連続押引き文 縦位の刻線	ナデ	にぶい褐	明褐	2㎜以下の黒・灰・褐色砂粒　微細な半透明光沢粒	吉田式
53	縄文土器	深鉢 底部	7層				横位の貝殻腹縁による　連続押引き文	風化の為調整不明	にぶい橙	にぶい橙	3㎜以下の白色砂粒　1㎜以下の透明・金色光沢粒	吉田式
54	縄文土器	深鉢 底部	7層				横位の貝殻腹縁による連続押引き文 縦位の刻線	ナデ	褐	にぶい褐	2㎜以下の灰・灰白色砂粒　透明粒	吉田式
55	縄文土器	深鉢 底部	7層				ナデ　横方向の貝殻腹縁による連続押引き文	丁寧なナデ	にぶい黄橙	明褐灰	2㎜以下の灰白色砂粒	吉田式
56	縄文土器	深鉢 口縁	7層				横方向の貝殻腹縁による連続押引き文　口唇部に連続刻み目　横位の貝殻腹縁による二条の連続刺突文　貝殻腹縁による羽状の連続刺突文	剥落の為の調整不明	にぶい黄褐	にぶい褐	3㎜以下の乳白色砂粒 透明光沢粒　金色砂粒	吉田式
57	縄文土器	深鉢 胴部	7層				横方向の貝殻腹縁による連続押引き文　横位の貝殻腹縁による二条以上の連続刺突文　円形刺突をもつ瘤状突起　穿孔　斜位の貝殻腹縁による連続刺突文	丁寧なナデ	にぶい赤褐 黒褐	暗灰黄	3㎜以下の透明・灰白色砂粒　1㎜以下の金色光沢粒	吉田式 58と同一個体
58	縄文土器	深鉢 胴部	7層				横位の貝殻腹縁による二条以上の連続刺突文 円形刺突をもつ瘤状突起　穿孔 斜位の貝殻腹縁による連続刺突文	丁寧なナデ	にぶい赤褐 黒褐	暗灰黄	3㎜以下の透明・灰白色砂粒　1㎜以下の金色光沢粒	吉田式 57と同一個体
59	縄文土器	深鉢 口縁	7層				横方向の貝殻腹縁による条痕文　口唇部に連続の刻み目　横位の貝殻腹縁による二条の連続刺突文　横方向の貝殻腹縁による連続押引き文	横方向の丁寧なナデ	にぶい褐	にぶい褐 黒褐	3㎜以下の褐・灰褐・黄褐色砂粒	倉園B式
60	縄文土器	深鉢 口縁	7層				横方向の貝殻腹縁による押引き風条痕文　口唇部に連続刻み目　横位の貝殻腹縁による二条の連続刺突文　横方向の貝殻腹縁による連続押引き文	横方向のナデ	にぶい橙	にぶい橙	2㎜以下の淡黄・橙・灰白・黒砂粒　透明光沢粒	倉園B式
61	縄文土器	深鉢 口縁	7層				口唇部に連続刻み目 横位の貝殻腹縁による三条の連続刺突文 横方向の貝殻腹縁による条痕文	横方向の丁寧なナデ	にぶい橙	にぶい橙	2㎜以下の乳白色砂粒 透明・黒色光沢粒	倉園B式
62	縄文土器	深鉢 口縁	7層				口唇部に連続刻み目 横位の貝殻腹縁による三条の連続刺突文 横方向の貝殻腹縁による押引き文	ナデ	明褐	明褐	2㎜以下の黄褐・灰褐砂粒　透明砂粒	倉園B式
63	縄文土器	深鉢 口縁	7層				横方向の貝殻条痕文　横位の貝殻腹縁による二条の連続刺突文　斜位の貝殻腹縁による刺突文　横方向の連続押引き文	横方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の黄褐・黒褐・灰白な砂粒　5㎜以下の灰白色砂粒	倉園B式
64	縄文土器	深鉢 口縁	7層				口唇部に連続刻み目 横位の貝殻腹縁による二条の連続刺突文 横方向の貝殻腹縁による押引き風・押引き文	横方向のナデ	にぶい黄橙 黒褐	にぶい黄	1.5㎜以下の乳白色砂粒 透明黒色光沢粒	倉園B式
65	縄文土器	深鉢 口縁	7層				口唇部に浅い連続刻み目 横方向の貝殻腹縁による押引き文？ 横方向の貝殻腹縁による条痕文	ミガキ	黒褐	暗褐	3㎜以下の乳白色砂粒 透明黒色光沢粒	倉園B式
66	縄文土器	深鉢 口縁	7層				口唇部に浅い連続刻み目 横位の貝殻腹縁による二条の連続刺突文	横方向の丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の乳白・灰褐・茶褐色砂粒　微細な光沢粒	倉園B式
67	縄文土器	深鉢 口縁	7層				口唇部に連続刻み目　横位の貝殻腹縁による三条の連続刺突文　横方向の貝殻腹縁による刺突文	横方向のナデ	にぶい赤褐	赤褐	1㎜以下の乳白色・灰褐色砂粒	倉園B式
68	縄文土器	深鉢 口縁	7層				口唇部に浅い連続刻み目　横位の貝殻腹縁による二条の連続刺突文　斜位の貝殻腹縁による刺突文　横方向の連続押引き文	横方向のナデ	にぶい橙	にぶい橙	1～2㎜の乳白色砂粒 透明・黒色光沢粒	倉園B式
69	縄文土器	深鉢 口縁	7層				口唇部に連続刻み目 横位の貝殻腹縁による二条以上の連続刺突文	横方向の丁寧なナデ	灰褐	にぶい赤褐	1㎜以下の淡黄色砂粒 0.5㎜以下のガラス状に光る粒	倉園B式
70	縄文土器	深鉢 口縁	7層				口唇部に浅い連続刻み目 横位の貝殻腹縁による二条以上の連続刺突文	風化の為　調整不明	褐灰	にぶい黄橙	1㎜以下の白・褐色砂粒	倉園B式
71	縄文土器	深鉢 口縁	7層				口唇部に浅い連続刻み目 横位の貝殻腹縁による二条以上の連続刺突文	丁寧なナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	1㎜以下の黄褐色砂粒 2㎜以下の赤褐色砂粒 0.5㎜以下の無色透明粒	倉園B式
72	縄文土器	深鉢 口縁	7層				口唇部に浅い連続刻み目 横方向の貝殻腹縁による連続押引き文	横・縦方向のナデ	橙	橙	5㎜以下の赤色砂粒　2㎜以下の白色砂粒　微細な光沢粒	倉園B式

第3表　出土土器観察表（2）

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量（cm）			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
73	縄文土器	深鉢 口縁	7層				口唇部に浅い連続刻み目　横位の三条以上の連続刺突文　スス付着	剥落の為の調整不明	にぶい橙	褐灰	1.5mm以下の灰白色砂粒	倉園B式
74	縄文土器	深鉢 口縁	7層				口唇部に浅い連続刻み目 横位の二条以上の連続刺突文	ナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	3mm以下の灰白色砂粒 透明・黒色光沢粒	倉園B式
75	縄文土器	深鉢 口縁	7層				横位の二条以上の連続刺突文　スス付着	ミガキ　スス付着	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1～2mmの茶・淡黄色砂粒 透明光沢粒　黒色光沢粒	倉園B式
76	縄文土器	深鉢 口縁	7層				口唇部に爪型連続刻み目 横位の二条以上の連続刺突文	ミガキ	にぶい黄褐	暗灰黄	3mm以下の橙・灰色砂粒 黒色・透明光沢粒	倉園B式
77	縄文土器	深鉢 口縁	7層				口唇部に連続刻み目 横位の二条以上の連続刺突文	ナデ	浅黄	にぶい黄褐	2mm以下の灰白・灰黄・橙色砂粒　黒色・透明光沢粒	倉園B式
78	縄文土器	深鉢 胴部	7層				横位の一条以上の連続刺突文 横方向の貝殻腹縁による連続押引き文 横方向の貝殻腹縁による条痕文	斜方向のナデ	極暗赤褐	暗赤褐	1mm以下の赤灰透明粒	倉園B式
79	縄文土器	深鉢 胴部	7層				横位の一条以上の連続刺突文 横方向の貝殻腹縁による連続押引き文 横方向の貝殻腹縁による条痕文	横方向の丁寧なナデ	にぶい褐	にぶい黄褐 褐灰	微細～1mmの透明光沢粒 灰白・浅黄橙・黒・褐灰色砂粒	倉園B式
80	縄文土器	深鉢 胴部	7層				横方向の貝殻腹縁による連続押引き文 横方向の貝殻腹縁による条痕文	ナデ　指頭痕	にぶい橙	にぶい黄橙 灰黄褐	微細～1mmの透明光沢粒　灰白・浅黄橙・褐灰色砂粒 3～4mmの黄灰・淡黄色砂粒	倉園B式
81	縄文土器	深鉢 胴部	7層			80	横方向の貝殻腹縁による連続押引き文 横方向の貝殻腹縁による条痕文	ナデ	にぶい赤褐 にぶい褐	にぶい赤褐 にぶい黄褐	2mm以下の浅黄橙・灰黄褐・褐色砂粒	倉園B式
82	縄文土器	深鉢 胴部	7層			80	横方向の貝殻腹縁による連続押引き文 横方向の貝殻腹縁による条痕文	斜方向の丁寧なナデ	暗灰黄	褐	2mm以下の褐・灰・黄灰・黒色砂粒　微細な透明金色光沢粒	倉園B式
83	縄文土器	深鉢 胴部	7層			80	横方向の貝殻腹縁による連続押引き文 横方向の貝殻腹縁による条痕文	剥落の為調整不明	橙	橙	1mm以下の黄白・灰白・黒色砂粒	倉園B式
84	縄文土器	深鉢 胴部	7層			84	横方向の貝殻腹縁による条痕文	横方向のナデ	にぶい黄 褐灰	灰黄	1mm以下の乳白色砂粒・透明光沢粒	倉園B式
85	縄文土器	深鉢 胴部	7層			84	横方向の貝殻腹縁による条痕文	ナデ	にぶい黄	にぶい黄橙	2mm以下の黄褐・褐・灰褐色砂粒　透明砂粒	倉園B式
86	縄文土器	深鉢 胴部	7層			84	横方向の貝殻腹縁による条痕文	横方向の粗いナデ	橙	橙	3mm以下の灰黄・灰白・黒色砂粒　透明光沢粒	倉園B式
87	縄文土器	深鉢 胴部	7層				横位の貝殻腹縁による三条以上の連続刺突文	風化の為調整不明	にぶい褐	灰褐	1.5mm以下の灰白・褐黒色砂粒　1mm以下の透明光沢粒	倉園B式
88	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	7層	29.2			羽状の貝殻腹縁による連続刺突文 貝殻腹縁による綾杉文	風化の為調整不明	褐 黒褐	橙 褐	1.5mm以下の灰白・褐灰・透明・黒色砂粒　光沢粒	石坂式
89	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	7層	13.3			五条の横位の連続刺突文 貝殻腹縁による綾杉文	斜位のナデ・指頭痕	褐灰 にぶい黄橙	褐灰 にぶい黄橙	5mm以下の褐色砂粒 1.5mm以下の乳白色砂粒・透明光沢粒	石坂式
90	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	7層				口唇部に連続刻み目　櫛歯状工具にる七条の横位の連続刺突文　貝殻腹縁による綾杉文	ナデ	にぶい黄褐 にぶい橙	にぶい黄褐	5mm以下の茶褐・灰褐・白灰色砂粒　微細な透明光沢粒	石坂式
91	縄文土器	深鉢 口縁	7層			91	貝殻腹縁による連続刺突文	口唇部にミガキ 粗いナデ・指頭痕	褐灰	にぶい黄橙	1mm以下の透明光沢粒	石坂式
92	縄文土器	深鉢 口縁	7層			91	貝殻腹縁による連続刺突文	口唇部にミガキ 丁寧なナデ	にぶい黄橙	黄灰	1mm以下の褐灰・灰白色砂粒　透明光沢粒	石坂式
93	縄文土器	深鉢 胴部	7層				櫛歯状工具にる二条以上の横位の連続刺突文 貝殻腹縁による綾杉文	指頭痕 粗いナデ	にぶい黄橙 灰黄褐	褐灰 灰黄褐	2mm以下の灰白・黄橙・黒色砂粒・透明光沢粒	石坂式
94	縄文土器	深鉢 胴部	7層				貝殻腹縁による綾杉文	粗いナデ	にぶい褐	褐灰	2mm以下の透明・黒色光沢粒	石坂式
95	縄文土器	深鉢 胴部	7層				貝殻腹縁による綾杉文	粗いナデ	にぶい褐	黒褐	3mm以下の透明・黒色光沢粒	石坂式
96	縄文土器	深鉢 胴部	7層				貝殻腹縁による綾杉文	縦方向のナデ	明赤褐	にぶい赤褐	2mm以下の透明・黒色光沢粒	石坂式
97	縄文土器	深鉢 口縁～胴部		27.0			ヘラ状工具による綾杉文 横位の貝殻腹縁刺突文	ミガキ・指頭痕	にぶい黄	にぶい黄橙 灰黄褐	3mm以下の灰白・透明光沢粒	下剥峰式
98	縄文土器	深鉢 口縁	SI2				ヘラ状工具による綾杉文 横位の貝殻腹縁刺突文	ミガキ	黄灰	暗灰黄 黄灰	4mm以下の灰白・透明光沢粒	下剥峰式
99	縄文土器	深鉢 口縁付近～胴部					ヘラ状工具による綾杉文 横位の貝殻腹縁刺突文	丁寧なナデ	にぶい黄	にぶい黄	2mm以下の乳白色砂粒 1mm以下の透明光沢粒	下剥峰式
100	縄文土器	深鉢 胴部	6層				ヘラ状工具による綾杉文 横位の貝殻腹縁刺突文	ミガキ	灰黄褐	灰黄褐	2mm以下の乳白色砂粒・金色光沢粒　1mm以下の透明光沢粒	下剥峰式
101	縄文土器	深鉢 胴部					ヘラ状工具による綾杉文　三状の横沈線	ミガキ	にぶい黄褐	暗灰黄	1mm以下の乳白色砂粒 透明光沢粒	下剥峰式
102	縄文土器	深鉢 胴部					ヘラ状工具による綾杉文	ミガキ	暗灰黄	黒褐	2mm以下の乳白色砂粒 1mm以下の透明光沢粒	下剥峰式
103	縄文土器	深鉢 口縁	7層				ヘラ状工具による綾杉文	ミガキ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	5mm以下の乳白・黒色砂粒	下剥峰式
104	縄文土器	深鉢 胴部	7層				ヘラ状工具による綾杉文	ミガキ	にぶい赤褐	黒褐	3mm以下の乳白・白・黒色砂粒	下剥峰式
105	縄文土器	深鉢 胴部					貝殻腹縁による綾杉文　風化気味	ナデ	明赤褐	褐	4mm以下の褐・灰白色砂粒　透明光沢粒	下剥峰式
106	縄文土器	深鉢 胴部					貝殻腹縁刺突による綾杉文と横位の刺突文	ミガキ	にぶい黄褐	暗灰黄	2mm以下の乳白色・白色砂粒	下剥峰式
107	縄文土器	深鉢 胴部	SI4				貝殻腹縁による綾杉文	ナデ	にぶい褐	褐	3mm以下の灰褐・黒色砂粒　透明光沢粒	下剥峰式
108	縄文土器	深鉢 胴部	7層				貝殻条痕による綾杉文の後三又状の貝殻腹縁刺突文	ナデ	橙 にぶい黄橙	にぶい黄橙 にぶい橙	3mm以下の淡黄・褐・灰褐・茶褐色砂粒　透明光沢粒	下剥峰式

第3表　出土土器観察表（3）

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量（cm）			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
109	縄文土器	深鉢 底部付近	ＳＩ５				貝殻腹縁による刺突文	ナデ	黄褐 黄灰	黒 にぶい黄	2㎜以下の浅黄橙砂粒	下剥峰式
110	縄文土器	深鉢 口縁	7層	28.2			ナデ　押型文の後ナデ　山形押型文	横方向のミガキ	浅黄 灰黄	にぶい黄橙	1㎜以下の透明・黒色光沢粒　1～3㎜の暗青灰・暗赤褐・黒色砂粒	押型文
111	縄文土器	深鉢 口縁～底部付近	7層	23.1			口唇部押型施文後・ミガキ　山形押型文	横・斜方向に粗いミガキ	にぶい黄褐	にぶい褐	5㎜以下の赤褐・黒・乳白色砂粒　透明光沢粒	押型文
112	縄文土器	深鉢 胴部	7層				山形押型文	ナデ	褐灰 灰黄褐	灰黄褐	3㎜以下の黄褐・灰褐黒褐色砂粒・黒色光沢粒 7㎜の褐色砂粒	押型文
113	縄文土器	深鉢 胴部	7層				斜方向の条痕　山型押型文	粗いミガキ	にぶい黄	黄灰	1㎜以下の乳白・灰白色砂粒	押型文
114	縄文土器	深鉢 胴部	7層				山形押型文	ナデ	褐灰 にぶい黄橙	灰黄褐	5㎜以下の灰白・茶褐・黄褐色砂粒　無色透明・黒色光沢粒　8㎜の褐色砂粒	押型文
115	縄文土器	深鉢 胴部～底部	7層		10.8		山形押型文	斜方向の粗いナデ	にぶい黄	にぶい黄褐 褐灰	4㎜以下の黒褐・乳白・灰白色砂粒	押型文
116	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	7層	16.5			山形押型文の後、工具による不定斜方向の条痕文	口唇部にミガキ　横・斜方向の粗いミガキ	橙	暗灰黄	2㎜以下の茶・乳白・灰・黒・黄灰色砂粒　微細な透明・半透明光沢粒	押型文
117	縄文土器	深鉢 口縁	7層				工具による不定斜方向の条痕文	口唇部　ミガキ 斜方向の粗いミガキ	浅黄	にぶい黄橙	2㎜以下の灰・乳白・黄灰色砂粒	押型文
118	縄文土器	深鉢 口縁	7層				工具による不定斜方向の条痕文	風化の為調整不明	にぶい黄橙 褐灰	灰黄	4㎜以下の乳白・灰色砂粒	押型文
119	縄文土器	深鉢 口縁	7層				工具による不定斜方向の条痕文	口唇部にミガキ　縦方向のミガキ	褐	黒褐	3㎜以下の黒・乳白色砂粒	押型文
120	縄文土器	深鉢 胴部	7層				工具による不定斜方向の条痕文	粗いミガキ	灰黄	にぶい黄橙	2㎜以下の乳白・灰白色砂粒	押型文
121	縄文土器	深鉢 胴部	7層				工具による不定斜方向の条痕文 山形押型文	粗いミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄	3㎜以下の灰・黄灰砂粒	押型文
122	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	7層	23.1			楕円形押型文　ナデ	口唇部に楕円形押型文 ナデ　指頭痕	にぶい黄橙 灰黄褐	にぶい黄橙 褐灰	5㎜以下の灰白・褐色砂粒　1㎜以下の黒色砂粒	押型文 123と同一個体
123	縄文土器	深鉢 口縁	7層				楕円形押型文　ナデ	口唇部に楕円形押型文 ナデ　指頭痕	にぶい黄橙 褐灰	にぶい黄橙 灰黄褐	3㎜以下の灰白・褐色砂粒　1㎜以下の黒色砂粒・黒色光沢粒	押型文 122と同一個体
124	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	7層				縦位の貝殻腹縁による横方向の連続刺突文（3単位）　ミガキ	ミガキ・ナデ	にぶい橙 灰黄褐	にぶい黄褐 灰黄褐	5㎜大の灰・乳白色の粒 3㎜以下の黒・乳白色砂粒・黒色透明光沢粒	中原式
125	縄文土器	深鉢 口縁	7層				縦位の貝殻腹縁による横方向の連続刺突文（2単位以上）　ナデ	ミガキ・ナデ	灰黄褐 黒褐	灰黄褐 灰褐	1㎝大の黄褐の粒　3㎜程度の灰白・黒・灰褐色砂粒　0.5㎜以下の黒色砂粒　透明光沢粒	中原式
126	縄文土器	深鉢 口縁	7層				縦位の貝殻腹縁による横方向の連続刺突文（4単位）　縦方向の丁寧なナデ	横方向のミガキ ナデ	にぶい褐 灰黄褐	にぶい褐 灰黄褐	1.5㎜以下の灰白・浅黄橙の砂粒　透明光沢粒　微細な金色光沢粒	中原式
127	縄文土器	深鉢 口縁	7層				縦位の貝殻腹縁による横方向の連続刺突文（3単位）　丁寧なナデ	横方向のミガキ	にぶい黄橙 褐灰	褐灰	5㎜大の浅黄橙色の粒　2㎜以下の浅黄橙・乳白灰色砂粒	中原式
128	縄文土器	深鉢 口縁	7層				縦位の貝殻腹縁による横方向の連続刺突文（4単位）　丁寧なナデ	横方向のミガキ 丁寧なナデ	灰褐	褐	2㎜以下の金色光沢粒 3㎜以下の乳白色砂粒	中原式
129	縄文土器	深鉢 口縁	7層				縦位の貝殻腹縁による横方向の連続刺突文（3単位）　ナデ	横方向の丁寧なナデ 横方向のミガキ	灰	浅黄 黄灰	微細～2㎜の透明・黒色光沢粒・灰白・浅黄・褐灰色砂粒 3～5㎜の灰白・淡黄色砂粒	中原式
130	縄文土器	深鉢 口縁	7層				縦位の貝殻腹縁による横方向の連続刺突文（3単位）　丁寧なナデ	横方向のミガキ	黒褐	にぶい褐	2.5㎜以下の白色・乳白色砂粒	中原式
131	縄文土器	深鉢 口縁	7層	23.4			縦位の貝殻腹縁による横方向の連続刺突文（3単位）　穿孔　横方向のナデ	横方向のミガキ 穿孔・丁寧なナデ	にぶい橙	にぶい橙	1㎜以下の乳白色砂粒 黒色・透明光沢粒	中原式
132	縄文土器	深鉢 口縁	7層				縦位の貝殻腹縁による横方向の連続刺突文（3単位）　丁寧なナデ	横方向のミガキ 横方向の丁寧なナデ	にぶい褐	にぶい赤褐	1㎜以下の乳白色砂粒	中原式
133	縄文土器	深鉢 口縁	7層				縦位の貝殻腹縁による横方向の連続刺突文 ナデ	丁寧なナデ 横方向のミガキ	にぶい黄橙	にぶい褐	1㎜以下の乳白色砂粒 透明な粒	中原式
134	縄文土器	深鉢 口縁	7層				縦位の貝殻腹縁による横方向の連続刺突文（3単位）　丁寧なナデ	横方向のミガキ 丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙 橙	微細～1㎜の透明光沢粒 浅黄・橙・白・褐灰色砂粒	中原式
135	縄文土器	深鉢 口縁	7層				縦位の貝殻腹縁による横方向の連続刺突文（2単位以上）	ミガキ	橙	橙	0.5～1㎜の淡黄・灰白・橙色砂粒　透明・黒色光沢粒	中原式
136	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	7層	25.5			縦位の貝殻腹縁による横方向の押引き風連続刺突文（3単位）　縦・横方向の丁寧なナデ	横方向の丁寧なナデ	明黄褐 褐灰	にぶい赤褐 明赤褐	2㎜以下の褐・淡黄・灰黄色砂粒	中原式
137	縄文土器	深鉢 口縁	7層				縦位の貝殻腹縁による横方向の押引き風連続刺突文（2単位以上）　横位の貝殻腹縁による連続刺突文（二条以上）	横方向の丁寧なナデ	橙	橙	2.5～1.5㎜の茶・淡黄色砂粒　1㎜程の茶・乳白色砂粒　黒色・透明光沢粒	中原式
138	縄文土器	（深鉢） 口縁	7層				縦位の貝殻腹縁による横方向の押引き風連続刺突文（2単位以上）	横方向の丁寧なナデ	灰黄褐	にぶい黄褐	9㎜大の灰色粒・2～4㎜の淡黄・灰色砂粒　1㎜以下の灰・淡黄砂粒　黒色・透明光沢粒	中原式
139	縄文土器	深鉢 口縁	7層				縦位の貝殻腹縁による横方向の押引き風連続刺突文（3単位以上）	横方向のミガキ	灰褐	灰褐	5㎜以下の黄褐色砂粒 透明光沢・金色光沢粒	中原式
140	縄文土器	深鉢 口縁	7層				縦位の貝殻腹縁による連続刺突文（4単位）	横方向のミガキ 丁寧なナデ	灰黄褐	にぶい黄褐	2㎜以下の黒く光る柱状粒・乳白色砂粒 0.5㎜以下の白く光る粒	中原式
141	縄文土器	深鉢 口縁	7層				縦位の貝殻腹縁による押引き風連続刺突文（2単位以上）	指頭痕 ナデ	にぶい黄橙	明黄褐	1.5～3.5㎜の茶・灰・淡黄乳白色砂粒　1㎜以下の透明・黒色光沢粒	中原式
142	縄文土器	深鉢 口縁	7層				縦位の貝殻腹縁による押引き風連続刺突文（1単位以上）	横方向のミガキ 丁寧なナデ	黒褐	褐	2㎜以下の黒・灰黄・灰白淡橙色砂粒　透明・黒色光沢粒	中原式
143	縄文土器	深鉢 胴部	7層				縦位の貝殻腹縁による横方向の連続刺突文 ナデ	ナデ	浅黄	浅黄	5㎜大の黄灰色の礫　2㎜以下の灰・乳白・黄灰・黒色砂粒　微細な透明・半透明・黒色光沢粒	中原式
144	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	7層	22.75			貝殻腹縁による横方向の条痕文　ナデ	横斜方向のミガキ ナデ	黄灰　暗灰黄 にぶい橙	黒褐 にぶい黄橙	6㎜以下の灰・灰褐・にぶい黄橙色砂粒 2㎜以下の黒色光沢粒	中原式

第３表　出土土器観察表（4）

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量（cm）			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
145	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	7層	19.6			貝殻条痕　横ナデ　黒変	横・斜方向のミガキ	浅黄 灰	浅黄 灰	5㎜以下の乳白・黒・灰色砂粒　2㎜以下の黒色光沢粒	中原式
146	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	7層				貝殻条痕　ナデ・スス付着	横方向のミガキ 丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	6㎜以下の乳白・黒・茶色砂粒　2㎜以下の黒色光沢粒	中原式
147	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	7層				貝殻腹縁による横方向の条痕文 ミガキ　爪痕	丁寧なナデ 斜方向のミガキ　黒変	にぶい黄橙	にぶい黄 暗灰黄	2㎜程度の黒・灰・明黄褐砂粒　1㎜以下の透明黒色粒	中原式
148	縄文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻腹縁による横方向の条痕文　ミガキ	横方向のミガキ 丁寧なナデ	橙 にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の灰白色砂粒 1㎜以下の透明・黒色光沢粒	中原式
149	縄文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻腹縁による横方向の条痕文　スス付着	横方向の粗いナデ	灰黄褐	褐灰	微細～2㎜の透明光沢粒 灰白・褐灰色砂粒	中原式
150	縄文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻腹縁による横方向の条痕文	横方向のミガキ 丁寧なナデ	にぶい黄	にぶい黄橙	微細な透明・半透明・黒色光沢粒　2㎜以下の黒・黄灰・灰色砂粒	中原式
151	縄文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻腹縁による横方向の条痕文	横方向のミガキ 丁寧なナデ	灰オリーブ	にぶい黄	微細な透明・半透明・黒色光沢粒　3㎜以下の黄灰・褐色・灰色砂粒	中原式
152	縄文土器	深鉢 口縁	7層				ナデ　貝殻腹縁による横方向の条痕文　穿孔	横方向のミガキ	浅黄 黄灰	ミガキ	2㎜以下の乳白・黒色砂粒	中原式
153	縄文土器	深鉢 胴部	7層				貝殻腹縁による横方向の条痕文　粗いナデ	粗いナデ 黒変	暗灰黄 にぶい黄橙	橙　灰黄 黒褐	3.5㎜以下の灰・黒・灰黄色砂粒 2㎜以下の黒色光沢粒	中原式
154	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	7層				貝殻腹縁による横方向の条痕文　ナデ	横方向のミガキ 指頭痕・ナデ	にぶい黄	にぶい黄	4㎜以下の褐灰・灰白色砂粒	中原式
155	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	7層				貝殻腹縁による横方向の条痕文　ナデ スス付着	ナデ 横方向のミガキ	にぶい黄	浅黄	6㎜以下の茶・乳白・黒色砂粒　2㎜以下の黒色光沢粒	中原式
156	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	7層				ナデ　貝殻腹縁による横方向の条痕文	ナデ 横方向のミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4㎜以下の灰白・褐・褐灰色砂粒　0.5～2㎜の黒色光沢粒	中原式
157	縄文土器	深鉢 胴部	7層				貝殻腹縁による横方向の条痕文　ナデ	風化の為調整不明	灰黄褐 暗灰黄	にぶい黄橙	9㎜以下の灰白・黒・灰黄・灰黄褐色砂粒 2.5㎜以下の黒色光沢粒	中原式
158	縄文土器	深鉢 胴部	7層				貝殻腹縁による横方向の条痕文　ナデ 黒変	横・縦方向の丁寧なナデ　黒変	にぶい黄橙	にぶい橙	3㎜以下の乳白・灰・橙色砂粒　1㎜以下の透明光沢粒	中原式
159	縄文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻腹縁による横方向の条痕文　ナデ	ナデ	にぶい黄橙 褐灰	褐灰	微細～1㎜の透明光沢粒 灰白・浅黄橙・褐灰色砂粒	中原式
160	縄文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻腹縁による横方向の条痕文	横方向のミガキ 横方向のナデ	褐灰 にぶい黄橙	にぶい黄橙 褐灰	3㎜以下の黒・浅黄・灰黄色砂粒　2㎜以下の黒色光沢粒	中原式
161	縄文土器	深鉢 口縁	7層				ナデ　貝殻腹縁による横方向の条痕文	横方向のミガキ	灰黄	灰黄	3㎜以下の浅黄橙・黒・灰白色砂粒　2㎜以下の黒色・透明光沢粒	中原式
162	縄文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻腹縁による横方向の条痕文　スス付着	横方向のミガキ	にぶい黄	にぶい黄橙	2㎜以下の黄灰・褐色・乳白色砂粒 微細な透明・黒色光沢粒	中原式
163	縄文土器	深鉢 口縁	7層				ナデ　貝殻腹縁による横方向の条痕文	横方向のミガキ ナデ・指頭痕	浅黄	浅黄	4㎜以下の乳白色・黒色砂粒　1㎜以下の透明・黒色光沢粒	中原式
164	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	SI4	14.8			口唇部　ミガキ　横方向の貝殻条痕　黒変	ミガキ 黒変	明赤褐	にぶい赤褐	6㎜以下の茶・褐色砂粒 2㎜以下の灰・褐・乳白色・透明光沢粒	165と同一
165	縄文土器	深鉢 胴部～底部			9.9		横方向の貝殻条痕　底部ミガキ	ミガキ	明赤褐 褐	にぶい褐 灰褐	6㎜以下の茶・褐色砂粒 2㎜以下の茶・黒・乳白色・透明光沢粒	164と同一
166	縄文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻腹縁による不定方向の条痕文	ミガキ 丁寧なナデ	橙 褐灰	明赤褐 黒褐	2㎜以下、灰白・褐色の砂粒 2㎜以下の黒色・透明光沢粒	
167	縄文土器	深鉢 胴部	7層				貝殻腹縁による横方向の条痕文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐 褐	4㎜以下の白色砂粒・1㎜以下の褐色砂粒　金色光沢粒	
168	縄文土器	深鉢 胴部	7層				貝殻腹縁による横方向の条痕文　ナデ	ナデ・黒変	にぶい褐	黒褐	1.5㎜以下の黒・乳白色砂粒　透明光沢粒	
169	縄文土器	深鉢 胴部	7層				貝殻腹縁による横方向の押引き風条痕文	ナデ	明赤褐	にぶい褐	1.5㎜以下の黄白・褐・黒色砂粒　透明光沢粒	
170	縄文土器	深鉢 胴部	7層				貝殻腹縁による横方向の条痕文	斜方向のナデ	橙	にぶい橙 灰褐	2㎜以下の淡黄・灰白色砂粒　1㎜以下の透明光沢粒	
171	縄文土器	深鉢 胴部	7層				貝殻腹縁による横方向の条痕文	ナデ	橙	にぶい褐	4㎜以下の赤褐色砂粒　1㎜以下の灰白・透明光沢粒	
172	縄文土器	深鉢 胴部	7層				貝殻腹縁による横方向の条痕文　ナデ	縦方向のナデ 黒斑	にぶい赤褐	にぶい橙	2㎜以下の灰・白色砂粒 0.5㎜以下の透明光沢粒	
173	縄文土器	深鉢 胴部	7層				貝殻腹縁による横方向の条痕文	丁寧なナデ	にぶい橙	灰褐	5㎜以下の茶褐色砂粒 2㎜以下の白色砂粒　透明光沢粒	
174	縄文土器	深鉢 胴部					斜方向の貝殻条痕	ナデ・黒斑	にぶい褐	黒褐	3㎜以下の茶褐色・灰・灰白色・砂粒 0.5㎜以下の透明光沢粒	
175	縄文土器	深鉢 口縁	6層				2段の貝殻腹縁による刺突文	ナデ	にぶい褐	明褐	1㎜以下で乳白・褐色砂粒　微細な黒色光沢粒	
176	縄文土器	深鉢 口縁	7層				貝殻腹縁による横方向の条痕文　穿孔	横方向の丁寧なナデ 穿孔	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4㎜以下の黒・褐色砂粒	
177	縄文土器	深鉢 口縁	7層				ミガキ	丁寧なナデ	にぶい黄褐 灰褐	にぶい褐 褐灰	微細～1㎜の透明光沢粒 浅黄橙・褐灰・灰白色砂粒　5㎜程の褐灰色砂粒	
178	縄文土器	深鉢 胴部	6層				横位の細沈線　ナデ	丁寧なナデ	にぶい黄橙 黒褐	にぶい黄橙 黒褐	3㎜以下のオリーブ黒・にぶい橙色砂粒　0.5㎜以下の光沢粒	
179	縄文土器	深鉢 胴部					横方向のナデ、横位の細沈線 横方向に工具痕　黒斑	ナデ 黒斑	にぶい橙	灰褐	5㎜以下の褐色 3㎜以下の灰白色砂粒 1㎜以下の無色透明粒	
180	縄文土器	深鉢 胴部	7層				縦位の細沈線による刻線　丁寧なナデ	丁寧なナデ	橙	橙	2.5㎜以下の灰黄・灰白色砂粒　黒色光沢・透明光沢粒	

第3表　出土土器観察表（5）

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量（cm）			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
181	縄文土器	深鉢 底部	7層		14.3		ナデ　黒変	ナデ	明赤褐	にぶい褐	微細な透明・半透明・黒色光沢粒　2㎜以下の黄灰・灰・黒・乳白色砂粒	
182	縄文土器	深鉢 底部	7層		10.2		ナデ	剥離の為調整不明	明黄褐	明黄褐	微細な透明・半透明・黒色光沢粒　3㎜以下の黄灰・黒灰・乳白・褐色砂粒	
183	縄文土器	深鉢 底部	7層		15.1		縦位の刻線　ナデ	ナデ	黒褐 灰黄	褐灰	2.5㎜以下の淡橙・灰白・黒色砂粒	
184	縄文土器	深鉢 胴部～底部	7層		10.0		ミガキ 丁寧なナデ	縦・横方向のミガキ 黒変	灰黄	にぶい黄橙	1.5～3㎜の褐色砂粒　1㎜以下の透明・黒色光沢粒	
185	縄文土器	深鉢 底部	7層		10.0		縦位の刻線　貝殻腹縁による条痕文　ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	2㎜以下の灰白砂粒・透明・黒色光沢粒	
186	縄文土器	深鉢 底部	7層		7.7		丁寧なナデ	工具によるナデ 黒変	灰白	灰	1㎜以下の透明光沢粒　灰色砂粒	
187	縄文土器	深鉢 底部	7層		6.5		縦方向のミガキ　ミガキ	ミガキ	橙	暗灰黄	1㎜程の乳白色砂粒　黒色・透明光沢粒	
188	縄文土器	深鉢 底部	7層				貝殻腹縁による横方向の条痕 縦位の細沈線による刻線	丁寧なナデ	にぶい黄橙	褐灰	3㎜以下の灰白色砂粒	
307	縄文土器	深鉢 口縁	3層				口唇部に連続刻み目　紐状貼付突帯 短沈線文（横・斜）	短沈線（横）　ナデ	褐	褐	2㎜以下の乳白・灰褐色砂粒　透明・黒色光沢粒	
308	縄文土器	深鉢 口縁	3層				口唇部に連続刻み目　紐状貼付 短沈線文（横・縦）	沈線文（横）	褐	褐	1㎜以下の黄褐・灰褐色砂粒　透明・黒色光沢粒	
309	縄文土器	深鉢 口縁	3層				口唇部に連続刻み目　紐状貼付突帯 短沈線文（横・縦）	短沈線（斜）	暗褐	暗褐	2㎜以下の黄褐・灰白色砂粒　微細な黒色光沢粒	
310	縄文土器	深鉢 口縁	3層				ナデ　沈線文（横）	ナデ・短沈線文（横）	にぶい褐	褐	1.5㎜以下の橙・灰黄・灰白・黒色砂粒	
311	縄文土器	深鉢 口縁	SCI				口唇部に連続刻み目　紐状貼付突帯 沈線文（横）ナデ	沈線文（横）・ナデ	灰褐	灰褐	8㎜大のにぶい黄橙砂粒 3㎜以下の黒・黄褐色砂粒　透明光沢粒	
312	縄文土器	深鉢 口縁	3層				紐状貼付　短沈線文（横）　スス付着	ナデ・短沈線文（横）	明赤褐	明褐	1㎜以下の淡黄・灰白・橙色砂粒　黒色光沢粒	
313	縄文土器	深鉢 胴部	3層				横方向のナデ　沈線文（横・縦）	横方向のナデ	褐	にぶい赤褐	2㎜以下の乳白・灰色砂粒	
314	縄文土器	深鉢 胴部	3層				沈線文（横）　短沈線文（斜）	ナデ 短沈線文（横）	赤褐	赤褐	3㎜以下の灰褐・橙・淡黄色砂粒　黒色透明光沢粒	
315	縄文土器	深鉢 胴部	3層				貼付突帯　短沈線文（横・縦）	横方向のナデ 押引き状・沈線文（横）	黒褐	暗赤褐	1.5㎜以下の乳白色砂粒・透明光沢粒	
316	縄文土器	深鉢 胴部	3層				短沈線文（横・縦・斜）	横方向のナデ 短沈線文（横）	にぶい赤褐	にぶい赤褐	1㎜以下の灰白・灰褐色砂粒　黒色・透明光沢粒	
317	縄文土器	深鉢 胴部	3層				沈線文（横・縦）　横方向のナデ	横方向のナデ 押引き風沈線文（横）	にぶい赤褐	にぶい赤褐	3㎜以下の黄橙・にぶい赤褐・灰白色砂粒・透明光沢粒	
318	縄文土器	深鉢 胴部	3層				沈線文（縦・斜）　黒変	横方向のナデ	灰褐	褐	2㎜以下の灰色砂粒　透明光沢粒	
319	縄文土器	深鉢 胴部	3層				沈線文（縦）　貼付突帯　刺突文（横）	丁寧なナデ	赤褐 暗赤褐	にぶい赤褐	2㎜以下の褐色・淡黄・灰黄色砂粒・黒色・透明光沢粒	
320	縄文土器	深鉢 胴部	3層				沈線文（横・斜）　連続刺突文 貼付突帯	ナデ	褐　黒褐	黒褐	1㎜以下の乳白色・灰色砂粒　透明光沢粒	
321	縄文土器	深鉢 胴部	3層				ナデ　短沈線文（横）	ナデ	褐	褐	微細な透明光沢粒	
322	縄文土器	深鉢 胴部	3層				短沈線文（縦・斜）　ナデ	ナデ	灰褐	にぶい赤褐	1㎜以下の透明光沢粒	
323	縄文土器	深鉢 胴部	3層				沈線文（縦・斜）　ナデ　スス付着	ナデ	にぶい赤褐	赤褐	2㎜以下の褐色・乳白色砂粒　透明・黒色光沢粒	
324	縄文土器	深鉢 胴部	3層				短沈線文（縦・横・斜）	ナデ	黒褐	にぶい黄褐	2㎜以下の乳白・黒・茶色砂　微細な透明光沢粒	
325	縄文土器	深鉢 胴部	3層				短沈線文（縦・斜）　沈線文（横）　スス付着	横方向のナデ	灰褐	にぶい赤褐	1.5㎜以下の淡黄色砂粒・透明光沢粒	
326	縄文土器	深鉢 胴部	SEI				ナデ　短沈線文（横・斜）	ナデ	褐	にぶい褐	2㎜以下の灰・淡黄色砂粒　微細な透明光沢粒	
327	縄文土器	深鉢 胴部	3層				沈線による山形文　ナデ	ナデ	褐	灰黄褐	1㎜以下の褐色砂粒	
328	縄文土器	深鉢 胴部	3層				短沈線文（斜）	ナデ	灰褐	にぶい赤褐	0.5㎜以下の透明光沢粒	
329	縄文土器	深鉢 胴部	3層				沈線文（横）　ナデ	ナデ 黒変	にぶい褐	黒	1.5㎜以下の褐色砂粒　透明光沢粒	
330	縄文土器	浅鉢 口縁					沈線文（横）　ナデ	丁寧なナデ	にぶい褐	灰褐	1㎜以下の黄褐・灰褐色砂粒　黒色光沢粒	波状口縁
335	弥生土器	甕 口縁		22.1			口縁端部に沈線　横ナデ・スス付着	横ナデ	灰黄褐	にぶい黄褐	2㎜以下の黒・茶・乳白色砂粒 1㎜以下の透明光沢粒	336と同一
336	弥生土器	甕 胴部					ハケ目・スス付着	ハケ目 指頭痕	灰黄褐	にぶい黄褐	4㎜以下の赤褐・灰・乳白色砂粒 1㎜以下の透明光沢粒	335と同一
337	弥生土器	甕 胴部	SAI				ハケ目	ナデ・指頭痕	橙	褐灰	2㎜以下の黒・乳白色・砂粒　透明光沢粒	
338	弥生土器	甕 胴部～底部			10.8		ナデ　縦方向のハケ目	横ナデ・指頭痕　斜方向のハケ目の後ナデ	にぶい褐	褐	3㎜以下の灰・黒・乳白色砂粒　黒色光沢粒	

第3表　出土土器観察表（6）

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量（cm）			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
339	弥生土器	甕 底部					ハケ目	ナデ　炭化物付着	橙	黒褐	3.5mm以下の灰白・にぶい黄橙砂粒 1mm以下の透明光沢粒	
340	弥生土器	壺 口縁～胴部	ＳＡ１	6.8			ナデ　縦・斜方向のハケ目	ナデ・指頭痕	にぶい黄褐	にぶい褐	2mm以下の透明・黒色光沢粒	341と同一
341	弥生土器	壺 胴部～底部	ＳＡ１		5.0		ナデ　縦・斜方向のハケ目 底部にヘラによる沈線	ナデ・指頭痕	にぶい黄褐 黒褐	にぶい褐	2mm以下の褐色砂粒　黒色・透明光沢粒	340と同一
342	弥生土器	壺 口縁付近～頸部	ＳＡ１				ハケ目	工具ナデ	赤褐	赤褐	3mm以下の乳白・褐・灰褐色砂粒	343と同一
343	弥生土器	壺 肩部～胴部	ＳＡ１				ハケ目	工具ナデ・指頭痕	赤褐	赤褐	5mm以下の茶褐・黒褐色砂粒　1mm以下の灰褐色砂粒	342と同一
344	弥生土器	壺 口縁付近～頸部					ナデ	ナデ・風化気味	橙	橙	2mm以下の黒・灰・乳白色砂粒　微細な黒色・透明光沢粒	
345	弥生土器	壺 肩部					縦・斜方向のハケ目　ハケ目の後ミガキ	横・斜方向のハケ目 ハケ目の後ナデ・指頭痕	橙	にぶい黄橙	3mm以下の黒・褐・乳白色砂粒　微細な透明光沢粒	
346	弥生土器	壺 底部			5.0		ハケ目・ミガキ　粘土のかえり	ナデ・黒変 指頭痕	褐	にぶい黄褐 褐灰	1mm以下の灰白・褐灰色砂粒　透明・黒色光沢粒	
347	弥生土器	壺 底部			4.7		ミガキ・黒変	丁寧なナデ・黒変	にぶい黄橙 明黄褐	オリーブ黒 橙	1mm以下の黄褐・灰白・暗灰黄色砂粒　透明光沢粒	347と同一
348	弥生土器	高坏 坏部	ＳＡ１	25.2			ミガキ・スス付着	ミガキ（風化の為単位不明）スス付着・黒変	橙 明黄褐	明黄褐	2mm以下の透明・黒色光沢粒	346と同一
349	弥生土器	高坏 脚部					ミガキ・風化気味	ナデ・ハケ目 指頭痕	橙	橙	1mm以下の灰白色砂粒 黒色透明光沢粒	
353	弥生土器	甕 口縁～胴部	ＳＡ２	22.7			ナデ・横斜方向の工具ナデ 指頭痕・スス付着	横ナデ・指頭痕　斜方向のハケ目の後ナデ	明褐色	明褐色	4mm以下の赤褐・乳白色砂粒　2mm以下の黒色・透明光沢粒	
354	弥生土器	甕 口縁～頸部	ＳＡ２	12.5			ナデ	ナデ・指頭痕・スス付着	橙 黄灰	明黄褐	2.5mm以下の黒・淡黄・灰白色砂粒・透明光沢粒	
355	弥生土器	甕 口縁～胴部	ＳＡ２	14.4			ナデ・ハケ目　指頭痕　スス付着	横方向のハケ目 指頭痕	橙	にぶい黄橙	3mm以下の褐灰・黒褐・赤褐・灰白色砂粒	
356	弥生土器	甕 胴部～底部	ＳＡ２				縦・斜方向のハケ目　ハケ目の後ナデ 指頭痕・スス付着	ハケ目の後ナデ ナデ・工具痕	にぶい橙 灰黄褐	明褐 灰褐	3mm以下のにぶい黄橙・橙・灰白色砂粒	
357	弥生土器	甕 胴部	ＳＡ２				縦・斜方向のハケ目の後ナデ　スス付着	斜方向のハケ目の後ナデ	にぶい黄褐 黒	黒褐	1.5mm以下の明褐色砂粒・黒色光沢粒	
358	弥生土器	壺 口縁～底部付近	ＳＡ２	11.2			ハケ目（斜・縦）・ナデ　スス付着	ハケ目の後ナデ 指頭痕	にぶい黄橙 灰黄褐	にぶい黄橙 にぶい黄褐	6mm大の灰黄褐色砂粒 3mm以下の灰褐・黄褐色砂粒　透明光沢粒	
359	弥生土器	壺 口縁	ＳＡ２	10.6			縦方向のハケ目・ナデ　スス付着	横ナデ・指頭痕	にぶい黄橙 褐灰	黒褐 灰黄褐	1.5mm以下の橙色・淡黄色砂粒　透明光沢粒	
360	弥生土器	壺 胴部	ＳＡ２				ナデ	縦方向のナデ	橙	黄灰	2mm以下の橙色砂粒・黒色・透明光沢粒	
361	弥生土器	壺 肩部	ＳＡ２				ミガキ	ミガキ	橙	橙	1mm以下の乳白色砂粒 黒色・透明光沢粒	
362	弥生土器	壺 頸部～胴部	ＳＡ２				縦方向のミガキ	ナデ・指頭痕	橙	橙 黄灰	2mm以下の橙・灰・乳白色砂粒　微細な透明光沢粒	
363	弥生土器	壺 胴部	ＳＡ２				重弧文	縦方向のナデ	にぶい黄褐	にぶい褐	2mm以下の白色砂粒　微細な透明光沢粒	
364	弥生土器	壺 胴部	ＳＡ２				重弧文	ナデ	黒褐	黒褐	2mm以下の赤褐色砂粒 微細な透明光沢粒	
365	弥生土器	壺 胴部	ＳＡ２				重弧文	ナデ	にぶい褐	黒褐	1.5mm以下の灰・赤褐色砂粒　微細な透明光沢粒	
366	弥生土器	壺 胴部	ＳＡ２				重弧文	ナデ	灰褐	黒褐	2.5mm以下の淡橙・赤褐色砂粒　微細な透明光沢粒	
367	弥生土器	壺 胴部	ＳＡ２				重弧文	ナデ	黒褐	黒褐	2mm以下の赤褐色乳白・褐色砂粒　微細な透明光沢粒	
368	弥生土器	壺 胴部	ＳＡ２				重弧文	ナデ	黒	にぶい黄褐	1.2mm以下の乳白・黄橙色砂粒　0.5mm以下の透明光沢粒	
369	弥生土器	壺 底部	ＳＡ２		4.5		風化著しく調整不明	風化著しく調整不明	橙	黄灰	3mm以下の灰・黒・乳白色砂粒　6mm大の茶褐色粒	
370	弥生土器	鉢 口縁～胴部	ＳＡ２	11.0			斜方向のハケ目　ナデ・スス付着	ナデ・ハケ目・指頭痕 スス付着	橙	橙	2mm以下の灰・乳白・黒色砂粒　微細な透明光沢粒	
375	弥生土器	甕 口縁	３層	20.0			横ナデ・爪痕 貼付突帯	ナデ	にぶい赤褐	褐	6mm大の黒褐色の粒 1.5mm以下の透明光沢粒	
376	弥生土器	甕 口縁	ＳＥ１				ナデ・ハケ目	風化の為調整不明	にぶい黄褐	にぶい黄褐	5mm以下の黒褐・褐色砂粒　黒色光沢粒	
377	弥生土器	甕 底部	３層		10.3		ナデ・横方向の土具ナデ スス付着	ナデ・工具ナデ	褐	褐	2mm以下の灰・黄灰・褐・黒・乳白色砂粒	
378	弥生土器	壺 胴部	ＳＥ２				ナデ・重弧文	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	2mm以下の灰褐・灰白色砂粒　透明光沢粒	
379	弥生土器	不明 口縁	３層				口唇部横方向のハケ目 縦方向のミガキ・黒変	ナデ	黒	にぶい黄橙	1.5mm以下の灰褐色砂粒	

第３表　出土土器観察表（7）

番号	器種	石材	出土層	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）
189	石鏃	石英	Ⅶ層	3.7	1.7	0.3	2.1
190	石鏃	チャート	Ⅵ層	2.4	2.0	0.4	1.5
191	石鏃	チャート	Ⅶ層	2.3	2.2	0.6	1.7
192	石鏃	チャート	Ⅶ層	2.5	2.2	0.5	1.6
193	石鏃	チャート	Ⅶ層	3.1	1.8	0.3	1.2
194	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	2.4	1.6	0.6	1.3
195	石鏃	チャート	Ⅶ層	2.2	1.7	0.4	1.0
196	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	2.3	1.7	0.5	1.0
197	石鏃	チャート	Ⅶ層	2.1	1.1	0.3	0.5
198	石鏃	チャート	Ⅵ層	2.4	2.0	0.5	1.2
199	石鏃	チャート	Ⅵ層	2.1	1.7	0.4	1.0
200	石鏃	石英	Ⅶ層	2.7	1.7	0.3	1.0
201	石鏃	チャート	Ⅵ層	2.1	1.4	0.3	0.5
202	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	1.7	1.3	0.2	0.3
203	石鏃	チャート	Ⅶ層	2.4	2.0	0.5	1.5
204	石鏃	チャート	Ⅶ層	1.8	1.9	0.2	0.6
205	石鏃	チャート	Ⅵ層	2.2	1.6	0.4	0.7
206	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	2.3	0.9	0.3	0.4
207	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	2.3	1.5	0.2	0.6
208	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	2.0	1.1	0.3	0.7
209	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	1.8	1.5	0.4	0.6
210	石鏃	チャート	Ⅶ層	1.6	1.4	0.3	0.4
211	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	1.8	1.3	0.3	0.5
212	石鏃	チャート	Ⅶ層	1.6	1.3	0.3	0.4
213	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	1.6	1.2	0.3	0.4
214	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	1.5	1.3	0.3	0.4
215	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	0.9	0.8	0.2	0.1
216	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	1.0	1.2	0.2	0.1
217	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	1.1	1.0	0.2	0.2
218	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	0.9	0.9	0.3	0.1
219	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	1.1	1.1	0.2	0.2
220	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	1.2	1.1	0.3	0.2
221	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	1.5	1.2	0.2	0.3
222	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	1.4	1.1	0.2	0.2
223	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	1.3	1.2	0.2	0.2
224	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	1.6	1.0	0.4	0.5
225	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	1.4	1.4	0.3	0.4
226	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	1.3	1.4	0.3	0.3
227	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	1.1	1.4	0.3	0.2
228	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	1.1	1.3	0.3	0.3
229	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	1.2	1.3	0.3	0.3
230	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	1.1	1.1	0.3	0.2
231	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	1.0	1.2	0.2	0.1
232	石鏃	チャート	Ⅶ層	1.3	1.2	0.3	0.2
233	石鏃	チャート	Ⅶ層	1.2	1.2	0.2	0.2
234	石鏃	黒曜石	Ⅶ層	1.8	0.8	0.2	0.2
235	尖頭状石器	チャート	Ⅶ層	3.8	2.8	1.0	9.7
236	尖頭状石器	チャート	Ⅶ層	2.4	2.1	0.7	2.2
237	尖頭状石器	チャート	Ⅶ層	2.2	2.0	0.5	2.0
238	尖頭状石器	チャート	Ⅵ層	2.2	1.7	0.3	1.1
239	尖頭状石器	チャート	Ⅶ層	2.6	2.0	0.4	1.5
240	尖頭状石器	チャート	Ⅶ層	2.3	1.4	0.6	1.2
241	削器	チャート	Ⅶ層	6.3	3.2	1.3	17.8
242	削器	チャート	Ⅶ層	4.2	2.8	1.0	11.6
243	削器	チャート	Ⅶ層	4.7	3.1	1.1	1.4
244	削器	黒曜石	Ⅶ層	3.4	2.5	1.0	6.2
245	削器	チャート	Ⅶ層	2.8	3.1	1.1	8.5
246	削器	黒曜石	Ⅶ層	2.8	3.8	0.8	6.6
247	削器	チャート	Ⅶ層	2.8	4.1	0.9	7.1
248	削器	チャート	Ⅶ層	4.3	3.9	1.2	21.5
249	削器	黒曜石	Ⅶ層	3.0	3.3	1.2	9.2
250	石錐	黒曜石	Ⅶ層	2.3	2.2	0.8	3.1
251	石錐	黒曜石	Ⅶ層	2.1	1.6	0.7	1.9
252	石核	黒曜石	Ⅶ層	3.0	4.6	1.2	14.6
253	石核	黒曜石	Ⅶ層	3.4	2.8	1.3	11.9
254	石核	黒曜石	Ⅶ層	3.3	2.6	1.0	7.4
255	楔形石器	チャート	Ⅶ層	2.3	3.7	0.8	6.3

第３表　出土石器観察表（1）

番号	器種	石材	出土層	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重さ（g）
256	楔形石器	黒曜石	Ⅶ層	2.3	2.8	0.8	4.0
257	折断剥片	ホルンフェルス	Ⅶ層	3.9	5.6	1.5	25.8
258	使用痕剥片	ホルンフェルス	Ⅶ層	4.8	4.9	1.2	24.9
259	使用痕剥片	ホルンフェルス	Ⅶ層	4.3	5.2	1.1	25.1
260	使用痕剥片	黒曜石	Ⅶ層	2.1	3.4	1.0	6.1
261	使用痕剥片	黒曜石	Ⅶ層	2.3	2.6	0.7	3.2
262	使用痕剥片	チャート	Ⅶ層	2.5	1.4	0.2	0.7
263	使用痕剥片	砂岩	Ⅶ層	4.3	10.8	1.7	68.0
264	使用痕剥片	黒曜石	Ⅶ層	3.7	2.2	1.1	8.1
265	使用痕剥片	黒曜石	Ⅶ層	1.6	3.4	0.7	3.6
266	使用痕剥片	黒曜石	Ⅶ層	3.0	3.4	0.8	6.9
267	使用痕剥片	黒曜石	Ⅶ層	2.1	3.2	0.9	3.6
268	使用痕剥片	チャート	Ⅶ層	3.3	2.4	0.9	5.8
269	使用痕剥片	チャート	Ⅶ層	3.9	2.0	0.6	3.6
270	二次加工剥片	チャート	Ⅶ層	3.4	4.2	1.5	20.3
271	二次加工剥片	黒曜石	Ⅶ層	3.5	3.3	1.1	10.1
272	二次加工剥片	黒曜石	Ⅶ層	2.3	2.8	1.5	8.0
273	二次加工剥片	黒曜石	Ⅶ層	3.0	2.7	1.2	6.1
274	不明剥片	珪質岩	Ⅶ層	2.4	1.5	0.3	0.6
275	不明剥片	チャート	Ⅶ層	2.7	1.3	0.2	0.8
276	不明楕円形石製品	粘板岩	Ⅶ層	3.4	5.5	0.5	8.9
277	局部磨製石斧	ホルンフェルス	Ⅶ層	12.3	7.7	3.5	430.0
278	磨石・敲石	凝灰岩	Ⅶ層	8.1	6.1	4.6	224.7
279	磨石・敲石	凝灰岩	Ⅶ層	9.8	8.3	3.8	371.5
280	磨石・敲石	尾鈴山系酸性凝灰岩	Ⅶ層	9.1	7.8	4.5	450.1
281	磨石・敲石	砂岩	Ⅶ層	7.0	6.2	2.8	170.9
282	磨石・敲石	輝石安山岩	Ⅶ層	11.7	12.9	9.3	2000.0
283	磨石・敲石	尾鈴山系酸性凝灰岩	Ⅶ層	8.7	10.0	5.4	700.0
284	磨石・敲石	凝灰岩	Ⅶ層	9.4	8.5	5.8	710.0
285	磨石・敲石	尾鈴山系酸性凝灰岩	Ⅶ層	8.2	7.9	4.7	405.0
286	磨石・敲石	砂岩	Ⅶ層	9.8	9.1	4.5	550.0
287	磨石・敲石	砂岩	Ⅶ層	16.7	8.7	3.4	725.0
288	磨石・敲石	砂岩	Ⅶ層	10.3	8.6	5.7	620.0
289	磨石・敲石	砂岩	Ⅶ層	10.8	7.7	4.0	430.0
290	磨石・敲石	砂岩	Ⅶ層	8.2	10.0	5.1	257.0
291	磨石・敲石	尾鈴山系酸性凝灰岩	Ⅵ層	4.4	9.9	4.0	208.5
292	磨石・敲石	砂岩	Ⅶ層	9.8	7.0	5.6	435.0
293	磨石・敲石	砂岩	Ⅶ層	4.9	4.7	2.9	100.0
294	台石	輝石安山岩	Ⅶ層	26.5	28.0	7.7	6300.0
295	台石	輝石安山岩	Ⅶ層	18.3	27.2	6.4	4700.0
296	台石	輝石安山岩	Ⅶ層	18.5	18.6	6.2	3200.0
297	台石	輝石安山岩	Ⅶ層	20.2	20.5	5.7	3500.0
298	台石	輝石安山岩	Ⅶ層	18.3	16.7	5.3	2500.0
299	台石	輝石安山岩	Ⅶ層	13.0	12.8	3.9	1000.0
300	台石	輝石安山岩	Ⅶ層	22.1	14.7	3.8	2000.0
301	台石	輝石安山岩	Ⅶ層	28.4	21.2	10.1	7400.0
302	台石	凝灰岩	Ⅶ層	24.9	30.9	5.9	6300.0
303	台石	凝灰岩	Ⅶ層	26.7	15.1	7.1	5000.0
304	台石	輝石安山岩	Ⅶ層	9.4	15.5	8.4	1700.0
305	台石	輝石安山岩	Ⅶ層	9.4	14.5	8.1	2400.0
306	台石	輝石安山岩	Ⅶ層	6.9	9.9	4.5	389.8
331	石匙	珪質岩	Ⅲ層	5.2	3.9	0.8	15.8
332	石匙	珪質岩	Ⅲ層	4.4	3.0	0.8	10.8
333	石鏃	黒曜石	Ⅲ層	1.4	1.4	0.4	0.4
334	石鏃	黒曜石	Ⅲ層	1.8	1.4	0.4	0.5
350	台石	輝石安山岩	ＳＡ１	25.1	19.2	6.1	4500.0
351	磨石・敲石	輝石安山岩	ＳＡ１	8.8	8.1	7.3	659.0
352	磨石・敲石	凝灰岩	ＳＡ１	12.0	10.9	8.8	1600.0
371	砥石	砂岩	ＳＡ２	3.4	9.4	0.4	22.6
372	砥石	ホルンフェルス	ＳＡ２	10.6	3.9	3.7	278.0
373	石庖丁	粘板岩	ＳＡ２	3.1	2.8	0.4	5.0
380	磨製石器	粘板岩	Ⅲ層	2.2	2.0	0.3	1.7

第９表　出土石器観察表　(2)

374	鉄鏃		ＳＡ２	3.3	2.5	0.1	3.9
381	銭貨		Ⅲ層				
382	硯	シルト岩	Ⅲ層	2.9	4.3	1.1	16.7

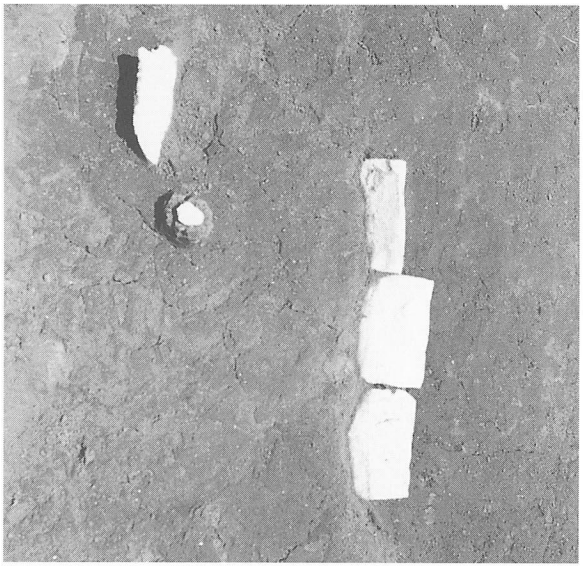
第10表　出土遺物観察表

図版 1

内屋敷遺跡全景

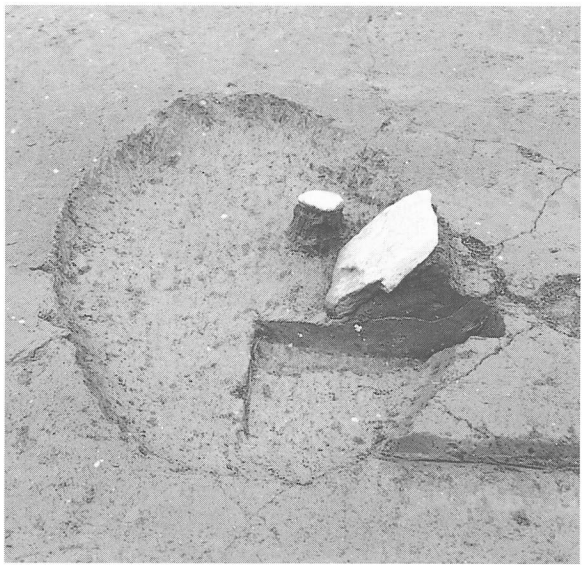
図版2

調査区全景



配石遺構 ①（2号配石）

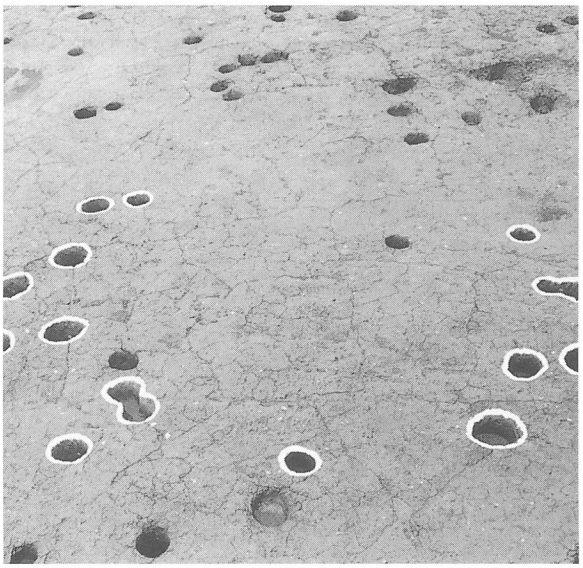
土層断面



配石遺構 ②（3号配石）

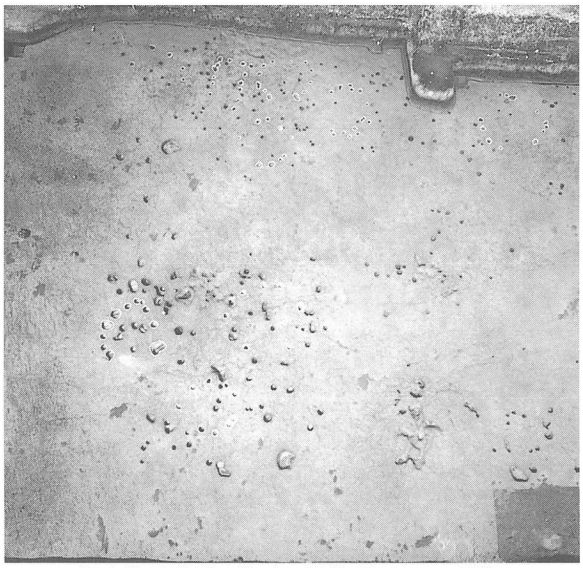
集石遺構（SI2）

掘立柱建物跡 ①（SB11）

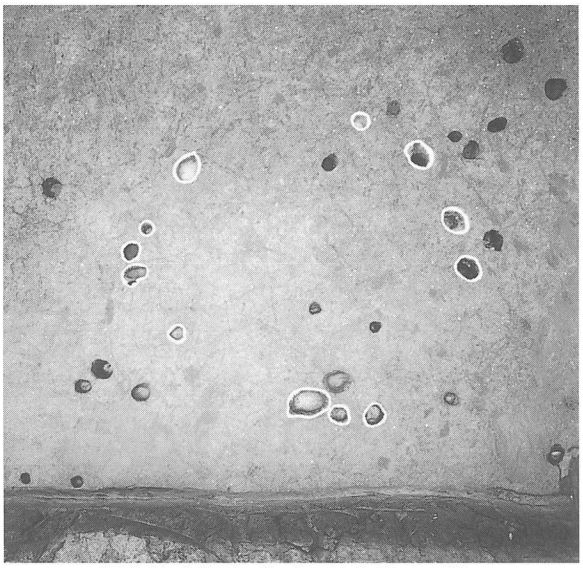


掘立柱建物跡 ②（平地住居 SB7）

掘立柱建物跡 ⑤（平地住居 B群）

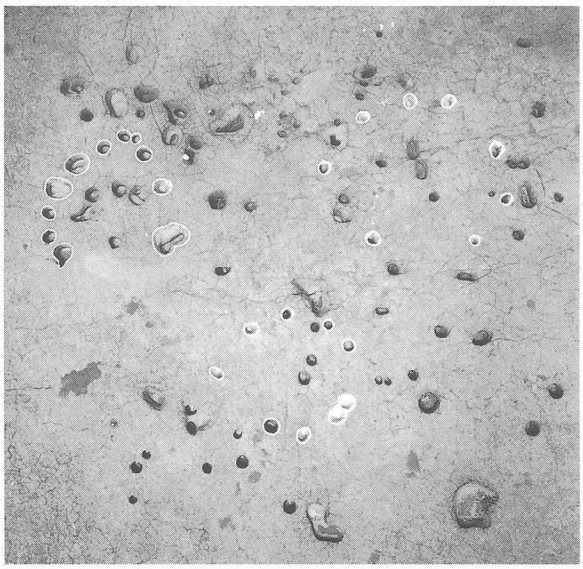


掘立柱建物跡 ③（平地住居 B～D群）



掘立柱建物跡 ⑥（平地住居 C群）

掘立柱建物跡 ④（平地住居 A群）

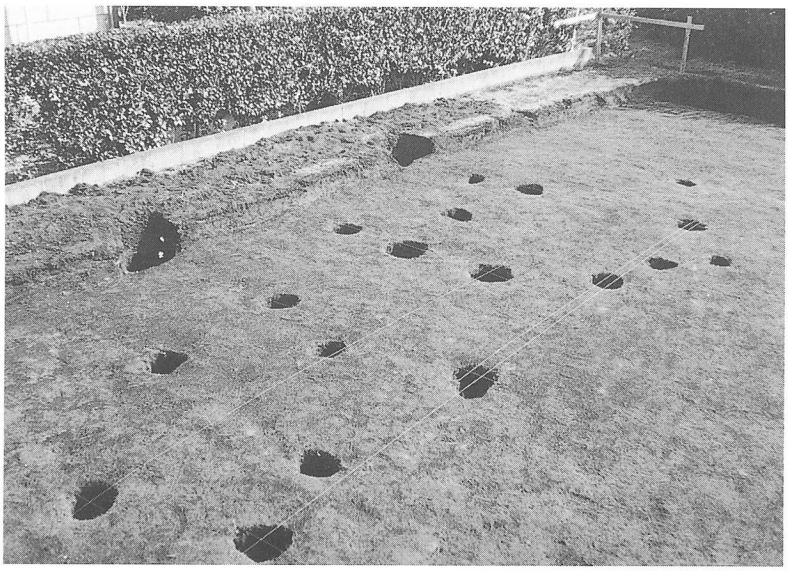


掘立柱建物跡 ⑦（平地住居 D群）

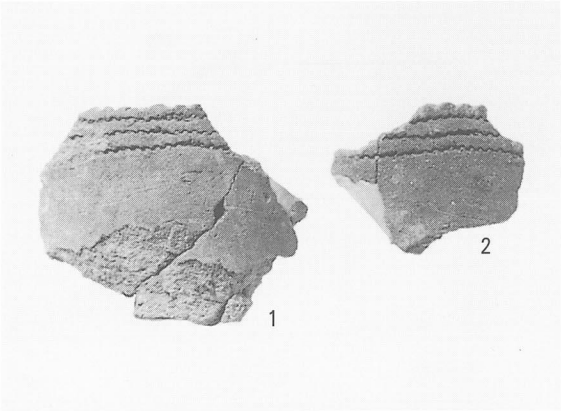
図版4

竪穴住居（SA1）
完掘状況

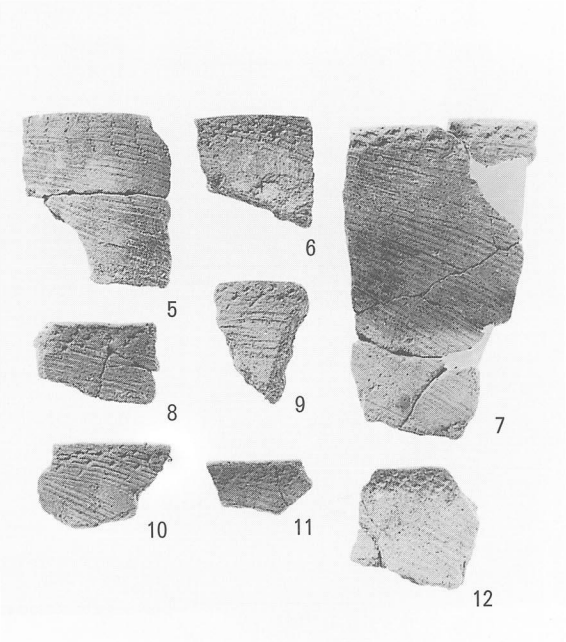
竪穴住居（SA2）
完掘状況



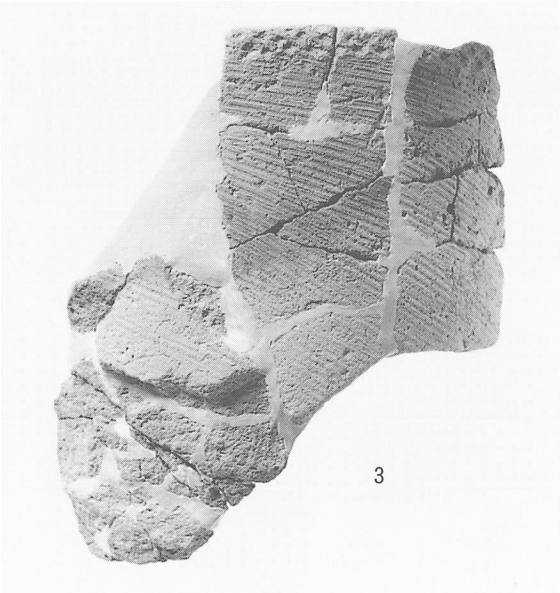
掘立柱建物（SB13～15）
完掘状況



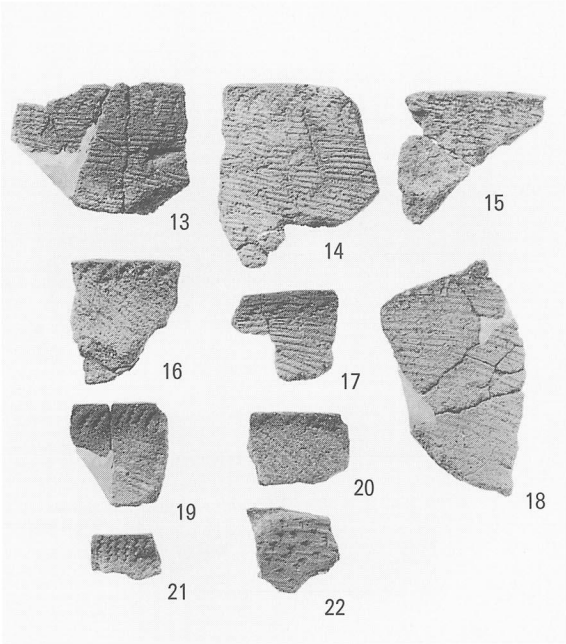
縄文時代早期土器　1類



縄文時代早期土器　2類 ③

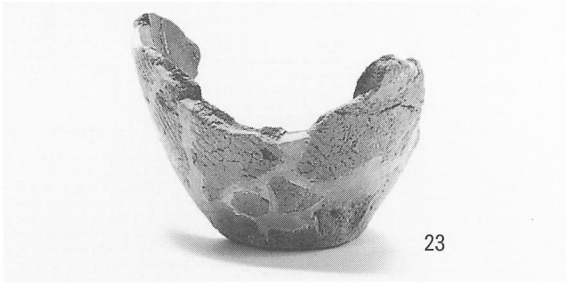


縄文時代早期土器　2類 ①



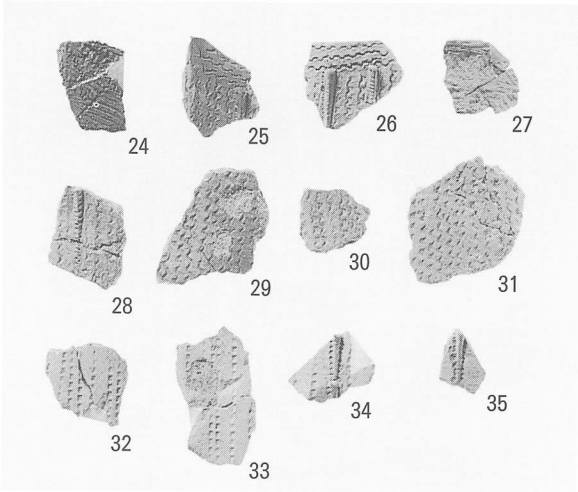
縄文時代早期土器　2類 ④

縄文時代早期土器　2類 ②

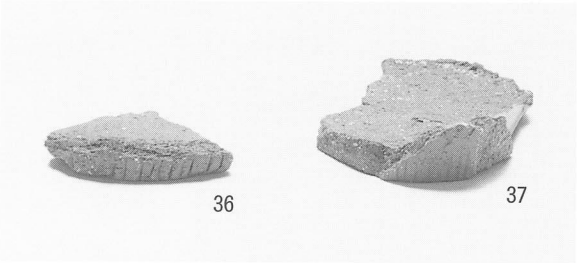


縄文時代早期土器　2類 ⑤

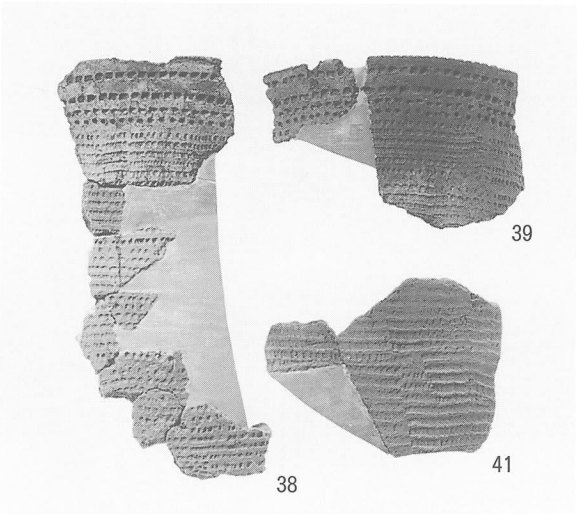
図版6



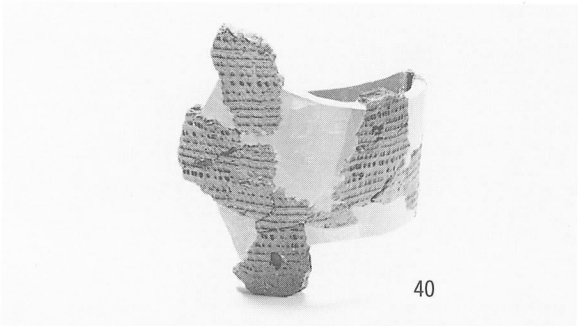
縄文時代早期土器　3類 ①



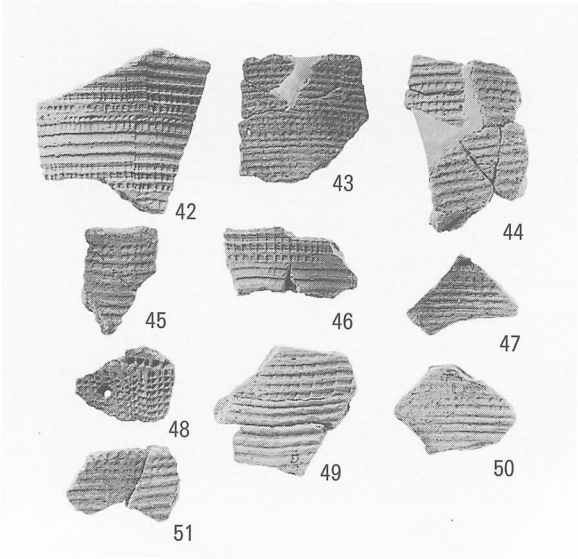
縄文時代早期土器　3類 ②



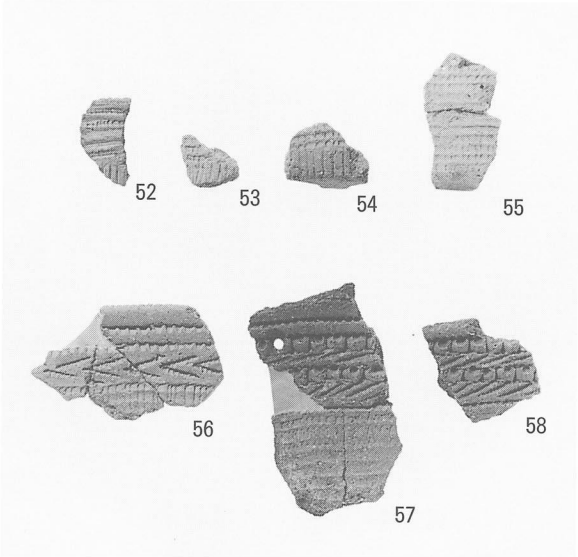
縄文時代早期土器　4類 ①



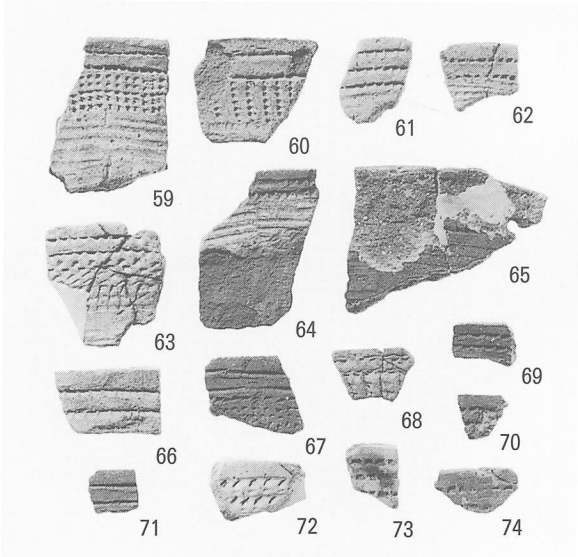
縄文時代早期土器　4類 ②



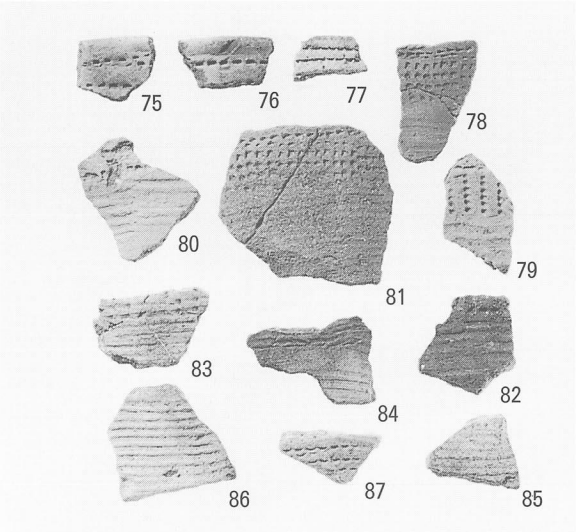
縄文時代早期土器　4類 ③



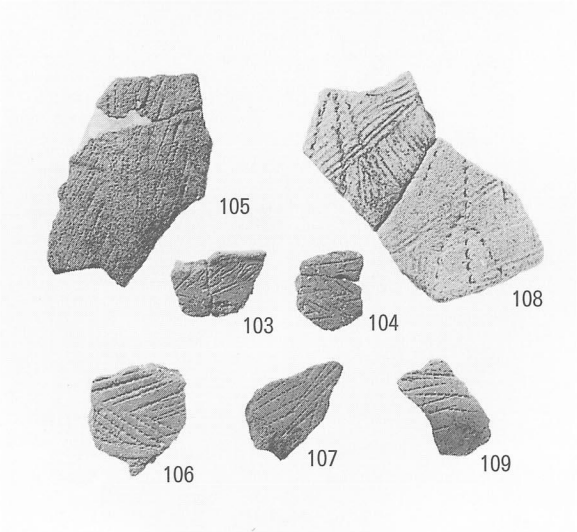
縄文時代早期土器　4類 ④



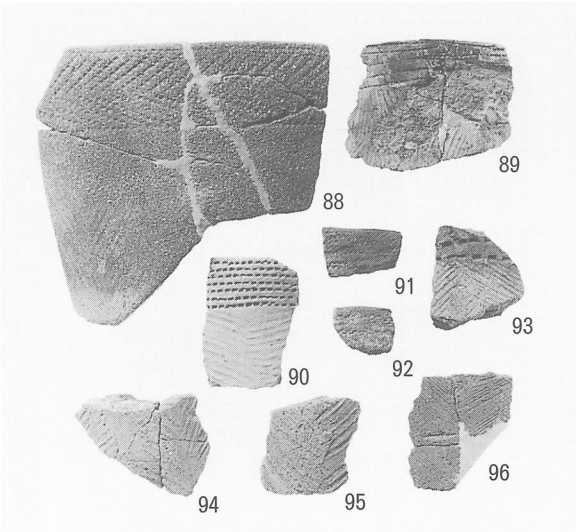
縄文時代早期土器　5類 ①



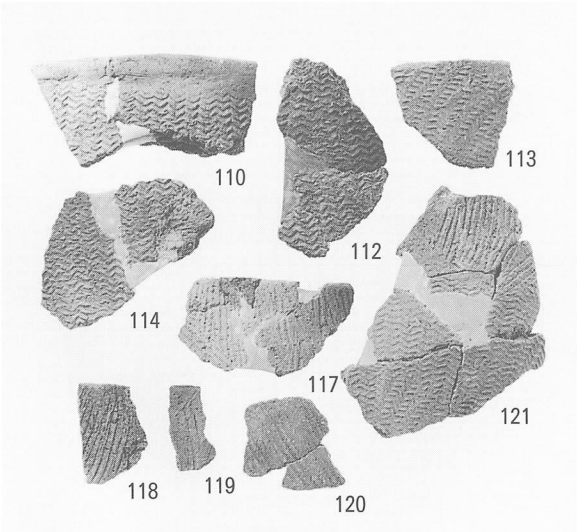
縄文時代早期土器　5 a類 ②



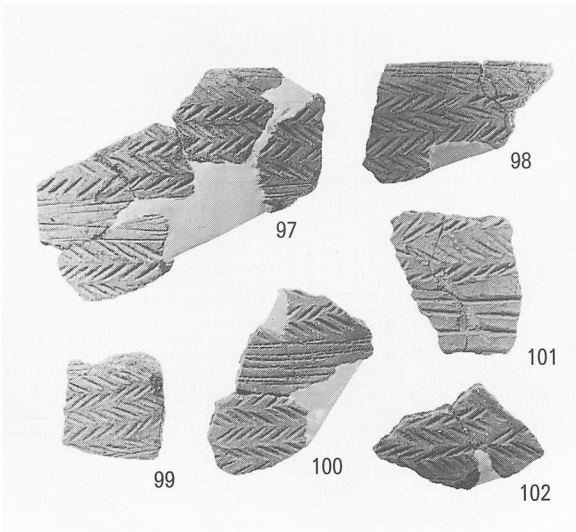
縄文時代早期土器　6 類 ②



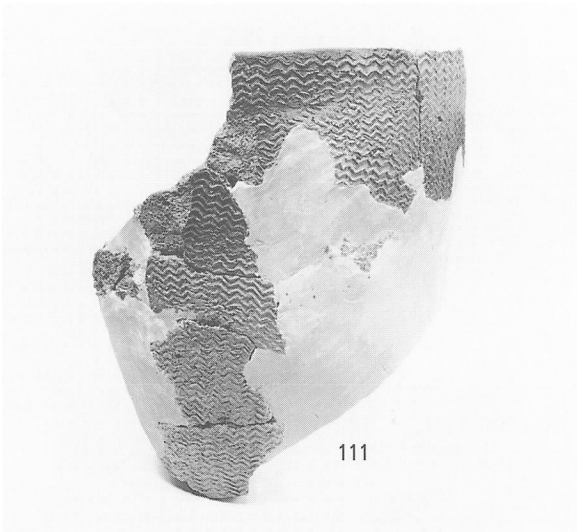
縄文時代早期土器　5 b類



縄文時代早期土器　7 a類 ①

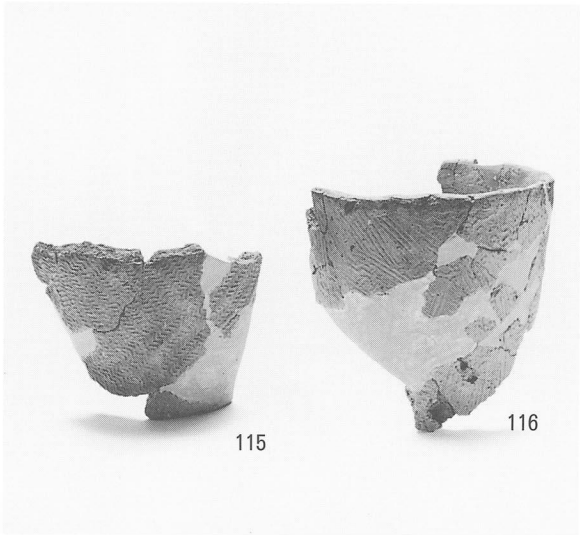


縄文時代早期土器　6 類 ①

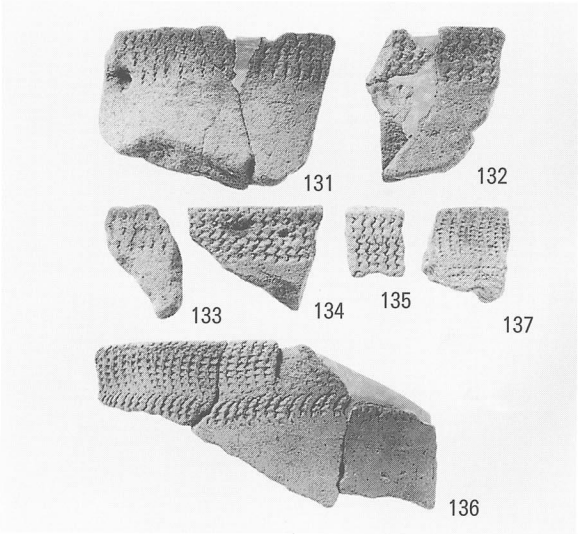


縄文時代早期土器　7 a類 ②

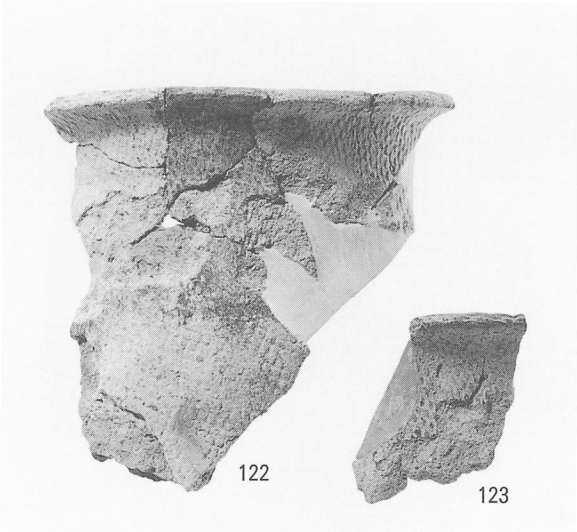
図版8



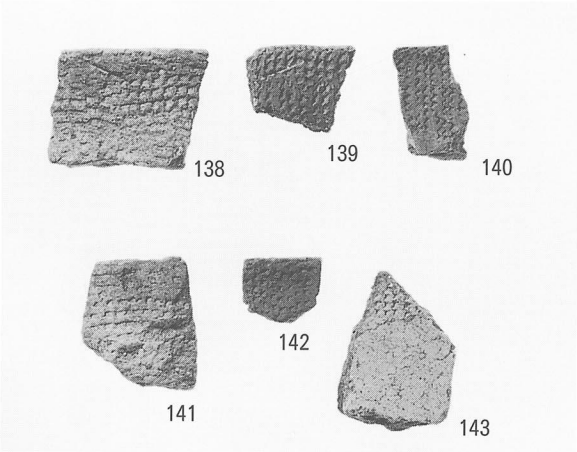
縄文時代早期土器　7 a類 ③



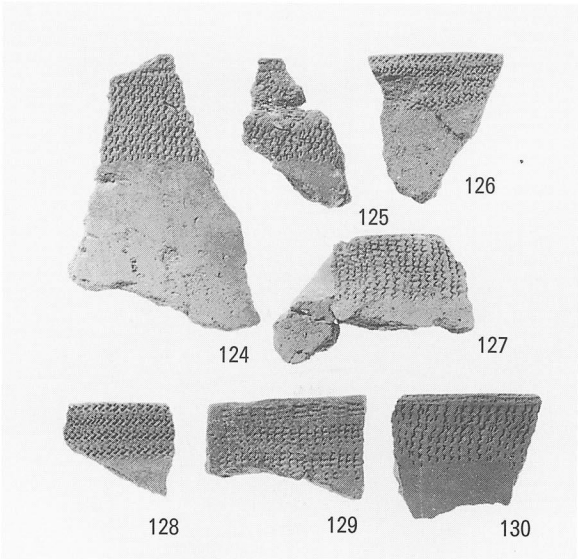
縄文時代早期土器　8 類 ②



縄文時代早期土器　7 b類

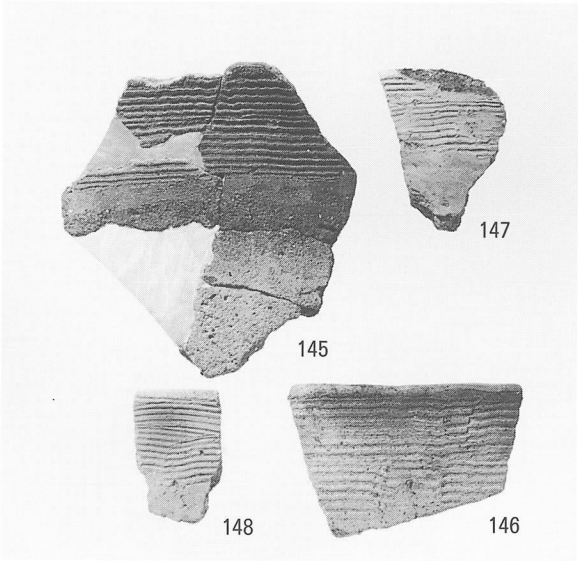


縄文時代早期土器　8 類 ③

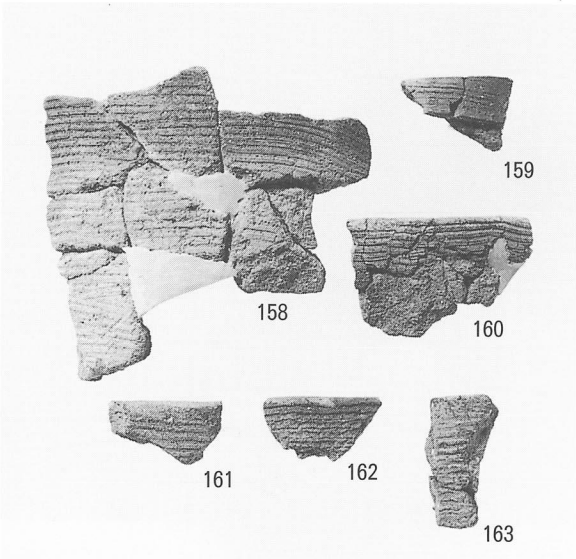


縄文時代早期土器　8 類 ①

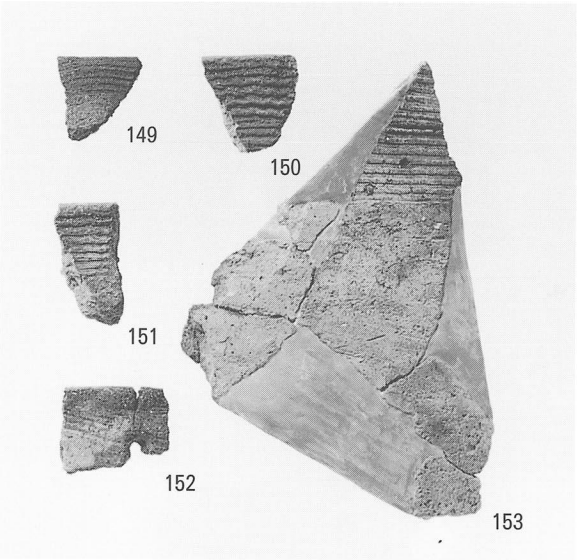
縄文時代早期土器　8 類 ④



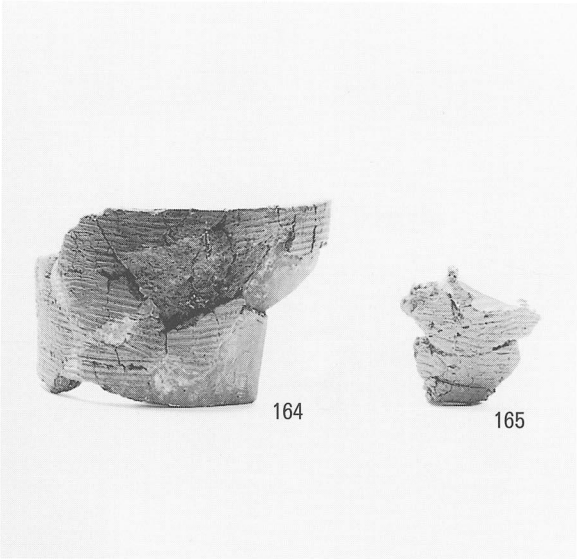
縄文時代早期土器　8類 ⑤



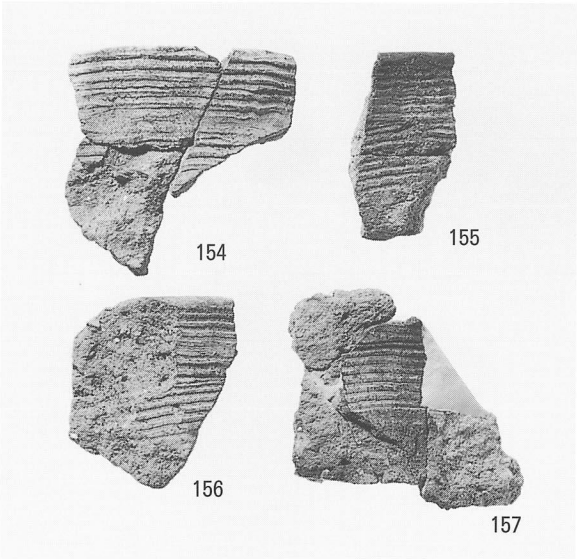
縄文時代早期土器　8類 ⑧



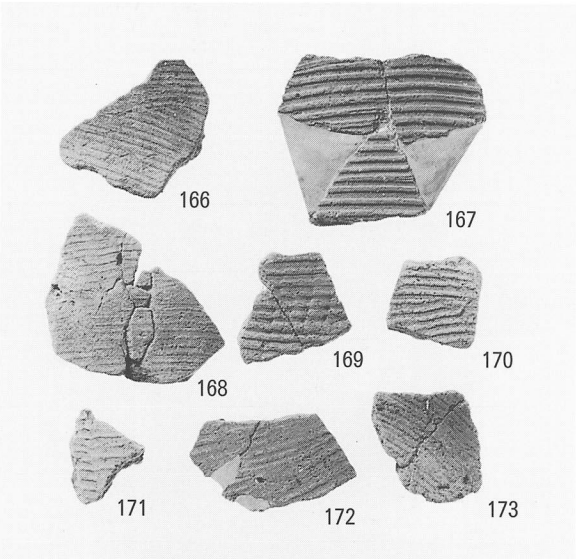
縄文時代早期土器　8類 ⑥



縄文時代早期土器　9類 ①

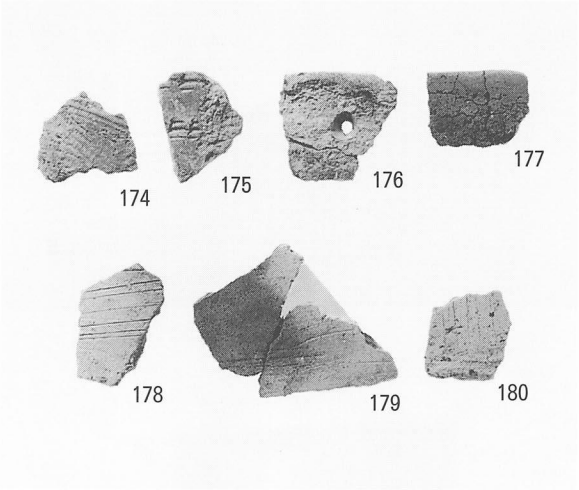


縄文時代早期土器　8類 ⑦

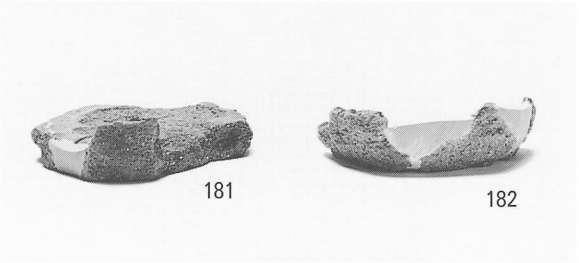


縄文時代早期土器　9類 ②

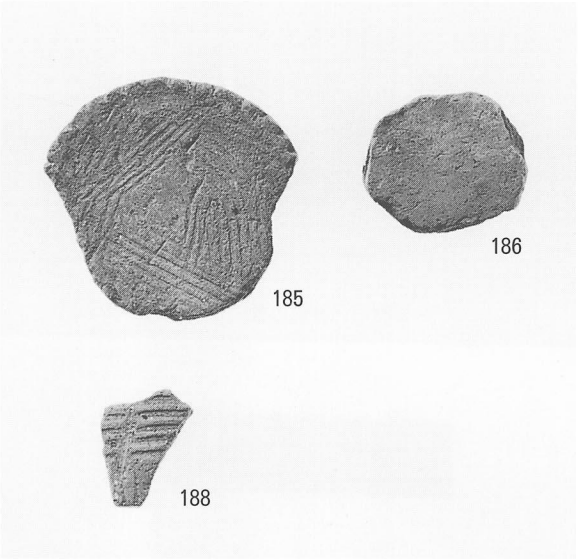
図版10



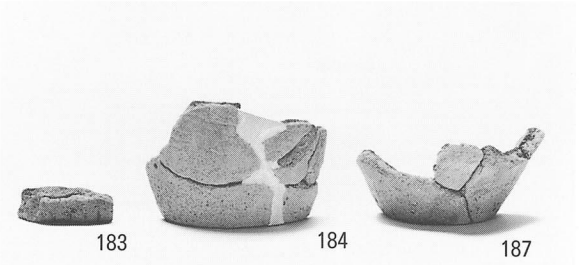
縄文時代早期土器　9類 ③・10類



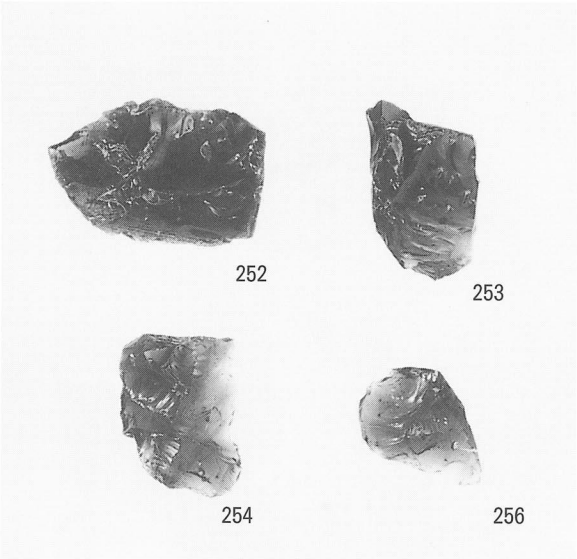
縄文時代早期土器　11類 ①



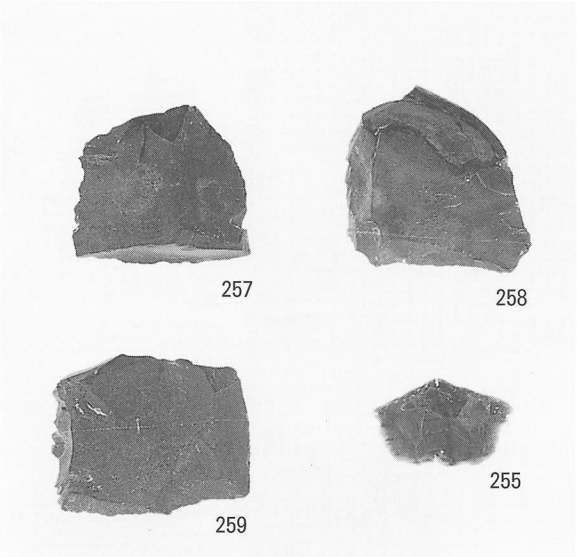
縄文時代早期土器　11類 ②



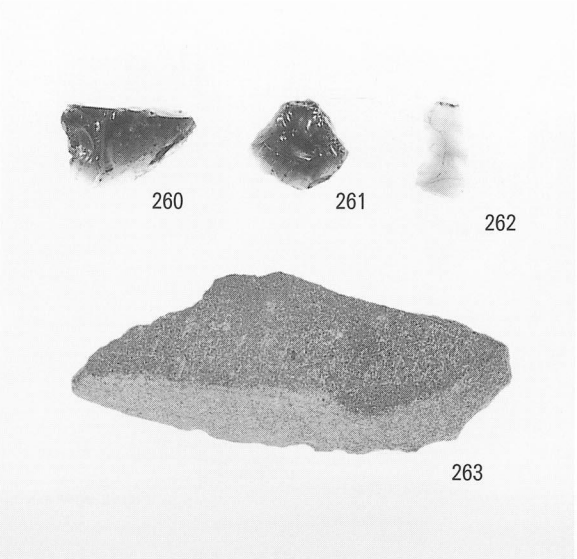
縄文時代早期土器　11類 ③



出土石器（石核・楔形石器）



出土石器（折断剥片・使用痕剥片・楔形石器）



出土石器（使用痕剥片）